沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(Ⅲ)

―― 北部編 ――

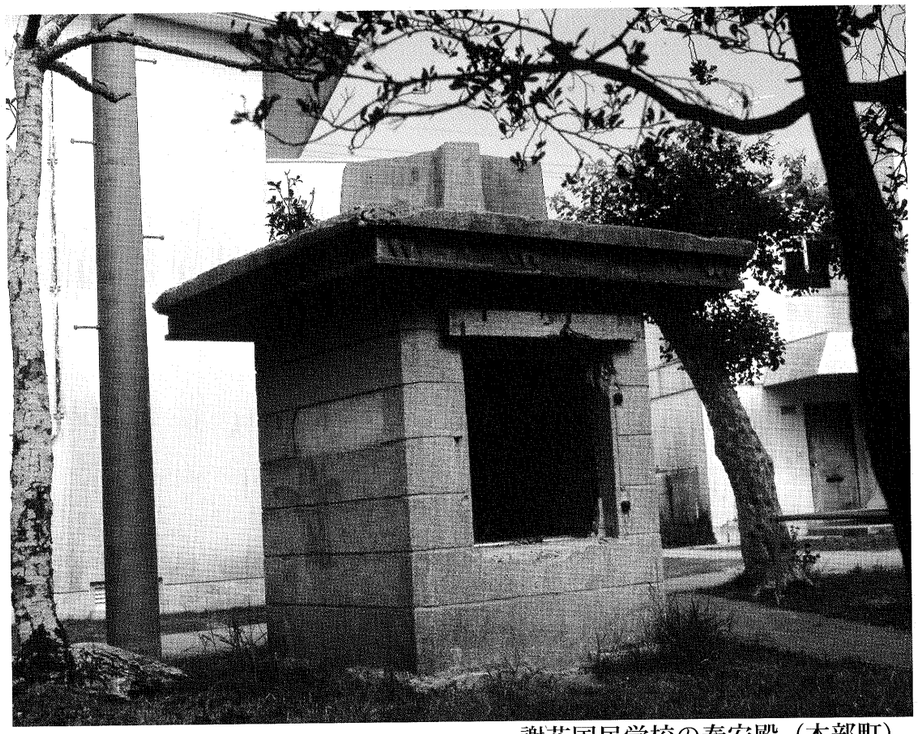
2003年（平成15）３月
沖縄県立埋蔵文化財センター

大宜味の住民避難壕群（大宜味村）

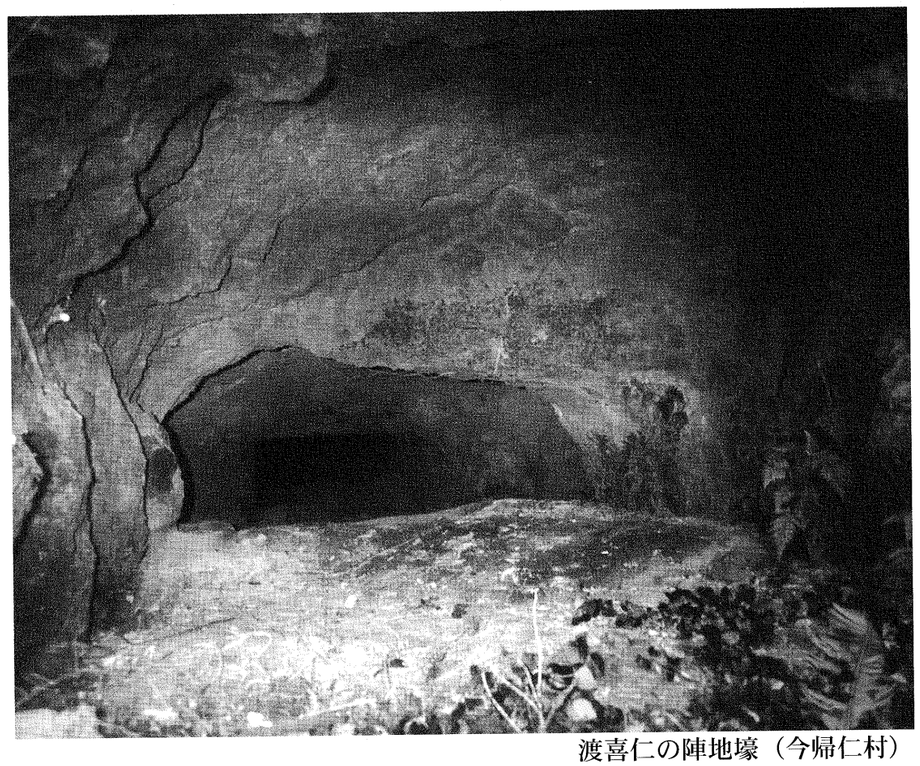
本部監視哨跡（本部町）

ギナン原のトーチカ（恩納村）

慶佐次カミガーの壕群（東村）



謝花国民学校の奉安殿（本部町）



渡喜仁の陣地壕（今帰仁村）

序

本報告書は文化庁から国庫補助を受けた沖縄県戦争遺跡詳細分布調査のうち、平成13年～14年度に実施した沖縄本島北部地区（伊江村を含む）における　成果をまとめたものであります。

本県は去る沖縄戦において、多くの一般住民を巻き込んだ激しい戦闘が展開され多数の尊い命や財産が奪われました。沖縄諸島及び宮古・八重山諸島の島々には、この沖縄戦によって、多くの構造物や遺構などが残されています。

平成10年度より開始された戦争遺跡詳細分布調査のなかで、本報告書は一昨年の「南部編」、昨年の「中部編」に続くものであります。

全県的な詳細分布調査の成果は、戦争遺跡を文化財として保存検討するための資料として、また、諸開発事業との協議調整や歴史・平和教育としての活用に資するための基礎資料として役立つものと考えています。

本報告書が文化財保護思想の普及啓発や地域文化財への関心、並びに沖縄県の歴史に対する理解と認識を深めるために、多方面にご活用いただければ幸いに存じます。

末尾になりましたが、現地調査並びに報告書作成にあたり、多大なるご指導ご協力を賜りました文化庁をはじめ、関係市町村教育委員会などの各位に対して深く感謝申し上げます。

2003年（平成15）３月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所　長　　安里嗣淳

例　　言

1　本報告書は、平成１３～１４年度に実施した戦争遺跡詳細分布調査（北部地区）成果を収録したものである。

2　本事業は、文化庁からの補助を受け、沖縄県教育委員会が行ったものである。調査は県立埋蔵文化財センターが主体となって実施した。

3　執筆者は次のとおりである。また、編集作業は川元哲哉を中心に地主園亮・吉川由紀の協力を得て行った。

川元　哲哉　第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅳ章１節、３節、５節ａ・ｂ、７節ｂ、８節、10節ａ、第Ⅴ章、附編Ⅲ
吉川　由紀　第Ⅲ章、第Ⅳ章２節、６節ｂ、７節ａ
地主園　亮　第Ⅳ章４節、９節、１０節ｂ・ｄ、附編Ⅰ
池田　榮史　第Ⅳ章５節ｃ
恩河　　尚　第Ⅳ章６節ａ
村上　有慶　第Ⅳ章10節ｃ
吉浜　　忍　附編Ⅱ

4　本報告書に使用した地形図は、国土地理院（平成６年１２月１日）発行の25,000分1を複製、転用した。

5　附図（遺跡分布図）には、踏査で確認されている戦争に関連する戦前期の記念碑等も戦争遺跡としてプロットした。

6　本調査において、北部地区各市町村教育委員会、地域史協議会機関及び関係者等の協力のもと、円滑な調査を実施することができた。特に記して感謝申し上げます。

7　本調査で得られた実測図、写真などの資料はすべて沖縄県立埋蔵文化財センターに保管してある。

8　本報告書第Ⅳ章の各遺跡の種別と形態は次のとおりである。

種別：住民避難、陣地、記念碑等、砲台、トーチカ、交通関係、秘匿壕、監視哨、銃座、指揮所、不明、その他
形態：自然壕、人工壕、建造物、構築物、不明、その他

※本報告書では、主として軍事目的に建築または土木工事を行った構造物を構築物とし、軍事目的以外のものを建造物とした。

目　　次

巻頭図版
序
例　　言

第Ⅰ章　調査の概要 …… 1
　第１節．調査体制 …… 1
　第２節．調査経過 …… 3

第Ⅱ章　地理的・歴史的環境 …… 4
　第１節．地理的環境 …… 4
　第２節．歴史的環境 …… 5

第Ⅲ章　沖縄戦の概要 …… 8
　第１節．本島北部における戦時体制づくり …… 8
　第２節．本島北部地域の戦闘 …… 9
　第３節．住民被害と戦後の始まり …… 11

第Ⅳ章　各市町村における戦争遺跡 …… 13
　第１節．国頭村 …… 15
　　ａ．伊地の鉱山跡 …… 16
　第２節．大宜味村 …… 19
　　ａ．大宜味の住民避難壕群 …… 20
　第３節．東村 …… 23
　　ａ．慶佐次カミガーの壕群 …… 24
　第４節．今帰仁村 …… 27
　　ａ．渡喜仁の陣地壕 …… 28
　　ｂ．運天の魚雷艇隊の壕 …… 30
　第５節．本部町 …… 31
　　ａ．本部監視哨跡 …… 32
　　ｂ．謝花国民学校の奉安殿 …… 34
　　ｃ．清末隊の陣地壕 …… 36
　第６節．名護市 …… 37
　　ａ．大湿帯の御真影奉護壕 …… 38
　　ｂ．早田壕 …… 40
　　沖縄愛楽園の戦争遺跡 …… 42
　第７節．恩納村 …… 43
　　ａ．ギナン原のトーチカ …… 44
　　ｂ．石川岳の住民避難地域 …… 46

第８節．宜野座村 ……49
ａ．トゥールガマ ……50
第９節．金武町 ……53
ａ．金武の震洋隊秘匿壕 ……54
第10節．伊江村……57
ａ．公益質屋跡 ……58
ｂ．ニィヤティヤガマ ……60
ｃ．独立混成第44旅団第２歩兵隊第３中隊関連の壕……62
ｄ．アハシャガマ ……64
第Ｖ章　総括 ……66
図　版 ……71
附　編 ……81
Ⅰ．収容所 ……82
Ⅱ．記念碑 ……84
Ⅲ．沖縄戦関係文献目録 ……86
索　引 ……88

図目次

第１図　日本国周辺位置図……5
第２図　沖縄本島及び周辺離島位置図……6
第３図　調査地区……6
第４図　鉱山跡　平面図・壕口立面図 ……17
第５図　避難壕群プロット図 ……21
第６図　カミガーの壕№５平面図 ……25
第７図　陣地壕平面図及び壕口立面図 ……29
第８図　監視哨跡平面図及び立面図 ……33
第９図　奉安殿平面図及び立面図 ……35
第10図　奉護壕平面図及び壕口断面図 ……39
第11図　早田壕平面図 ……41
第12図　銃眼１，２及び壕口立面図 ……45
第13図　避難経路地形図 ……47
第14図　トゥールガマ平面図及び断面図 ……51
第15図　秘匿壕平面図 ……55
第16図　公益質屋跡平面図及び立面図 ……59
第17図　ニィヤティヤガマ周辺遺跡分布図 ……61
第18図　山グシの陣地壕平面図及び壕口立面図 ……63

表目次

第１表　北部地区各市町村の人口と面積……4

図版目次

図版１　国頭村奥の避難壕・・・・・・・・71
図版２　大宜味村津波住民の避難壕・・・・71
図版３　東村平良弾痕の残る塀・・・・・・72
図版４　今帰仁村上運天安里組２班の壕・・72
図版５　今帰仁村謝名の交通壕・・・・・・73
図版６　今帰仁村諸志の陣地壕群・・・・・73
図版７　本部町謝花仲袋の壕口・・・・・・74
図版８　本部町謝花仲袋の壕内部・・・・・74
図版９　名護市振慶名の陣地壕塞口・・・75
図版10　名護市振慶名の陣地壕内部・・・75
図版11　名護市喜瀬の炭焼き窯遠景・・・76
図版12　名護市喜瀬の炭焼き窯壁面・・・76
図版13　恩納村恩納バイパス接続部の壕・77
図版14　宜野座村惣慶マッタラクブガマ・77
図版15　金武町金武豊平隊陣地壕・・・・78
図版16　伊江村特設警備工兵隊出撃の地・78

第Ⅰ章　調査の概要

第１節．調査体制

現地調査（平成１３年度～平成１４年度）から資料整理及び報告書の刊行（平成１４年度）まで、下記の体制で実施した。また、北部地区各市町村教育委員会、地域史協議会機関及び関係者からの協力を随時得ることができた。

ａ2001年度（平成13）の調査体制

事業主体・・・沖縄県教育委員会	
教育長	津嘉山朝祥
県教育庁文化課課長	當眞嗣一
〃　課長補佐	長堂嘉一郎・大城慧
〃　記念物係長	盛本勲
〃　〃　専門員	仲座久宜
調査主体・・・沖縄県立埋蔵文化財センター	
所長	知念勇
調査事務	
副所長兼庶務課課長	知念廣義
庶務課主事	上原浩・城間千賀
調査総括	
調査課課長	島袋洋
調査員	
調査課主事	川元哲哉
調査補助員	
文化財調査嘱託員	地主園亮・吉川由紀
調査作業員	島袋貴

ｂ2002年度（平成14）の調査体制

事業主体・・・沖縄県教育委員会	
教育長	津嘉山朝祥
県教育庁文化課課長	日越国昭
〃　課長補佐	長堂嘉一郎・大城慧
〃　記念物係長	島袋洋
〃　〃　主任専門員	岸本義彦
調査主体・・・沖縄県立埋蔵文化財センター	
所長	安里嗣淳
調査事務	
副所長兼庶務課課長	安冨祖英紀
庶務課主任	西江幸枝
〃　主事	城間千賀

第Ⅱ章　地理的・歴史的環境

第１節．地理的環境

本報告書における調査対象地域である北部地区とは、沖縄本島の中程に位置する金武町、恩納村以北の地域及び伊江島の１市２町７村である。

沖縄本島北部は、石川地峡をほぼ境にして沖縄本島中部と区分することができる。地勢は山原（やんばる）と俗称されるように、山地部とその周辺の段丘群からなるもので、国指定特別天然記念物ヤンバルクイナを代表とする野生動物の宝庫である。

北部地区の土壌は、千枚岩（せんまいがん）・安山岩・花崗岩（かこうがん）・国頭礫層（くにがみれき）などが中心となる赤～黄色の酸性土壌で国頭マージと呼ばれる。北部山地の多くは本土壌で形成され、もっとも広く分布している。表土は比較的軟らかく、取り扱いやすいが、作物の生育に必要なカルシウムやマグネシウムなどの軽金属類が溶けて酸性土壌を形成しており、一般的に痩せた土壌である。生産作物としては酸性土壌に強い、パインアップルのほか、蜜柑、スイカ、茶、など果実類をはじめとする農作物生産が営まれている。

また、山間部の多い北部地区の地形図を眺めていると、一際目立つ平野地帯が本部半島の付け根に確認することができる。羽地（はねじ）平野と呼ばれる地域であり、数十年前までは沖縄本島最大の水田地帯であった。

羽地内海に注ぐ羽地大川・我部祖河（がぶそか）川・奈佐田（なさだ）川の下流域の沖積低地を指し、方言名でハニジターブックゥと呼称される地域である。ターブックゥ（田袋）は田圃（でんぼ）を意味する方言であるが、減反政策や農家の後継者不足等により、いまはサトウキビを主体とする畑作地へと転換を余儀なくされている。この地域には、沖縄戦中から大規模な住民の収容所が設置されていた。北部地区の戦後は、この収容所生活から始まったといっても過言ではない。（収容所については附編「Ⅰ収容所」を参照されたい）

北部地区市町村の人口・世帯数・面積

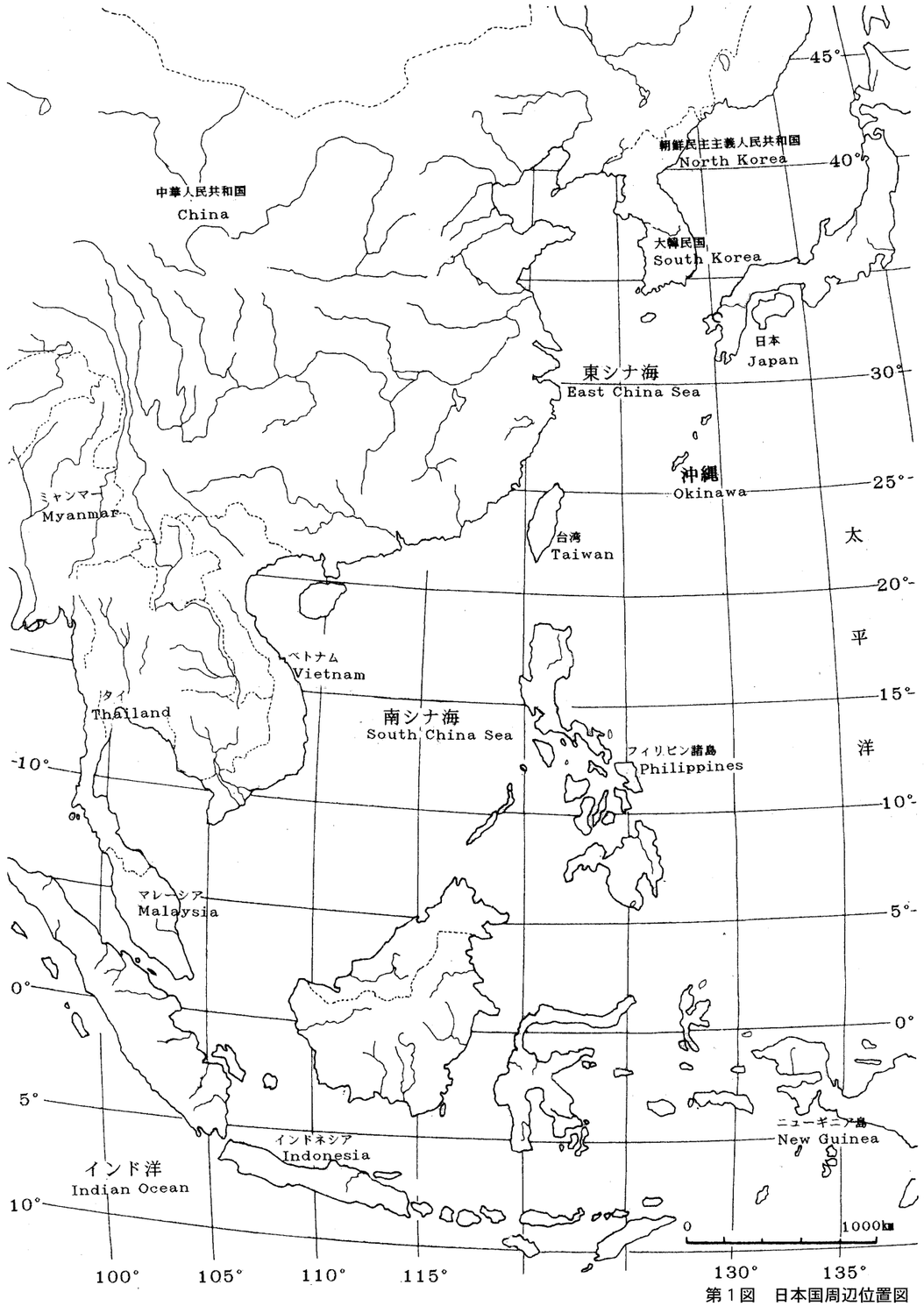
市町村名	人口(人)	世帯数(世帯)	面積(㎢)
国頭村	5,913	2,279	194.80
大宜味村	3,527	1,532	63.12
東村	1,940	733	81.79
今帰仁村	9,500	3,390	39.86
本部町	14,641	5,396	54.29
名護市	55,991	20,076	210.24
恩納村	9,731	3,444	50.72
宜野座村	5,035	1,613	31.28
金武町	10,342	3,866	37.76
伊江村	5,391	2,044	22.73
北部地区計	122,011	44,373	786.59

(注１)データは沖縄県企画開発部市町村課資料による。
(注２)人口及び世帯数については、平成13年３月21日現在の住民基本台帳に記載されている数値である。
(注３)面積については、平成12年10月１日現在の建設省国土地理院調査による。（但し、石川市及び金武町の境界未定部分については、平成13年度普通交付税の算定に用いる市町村面積の協定書によって確定した）

沖縄戦後、北部地区には山間地域を中心として、北部訓練場、辺野古（へのこ）弾薬庫、キャンプ・シュワブ、キャンプ・ハンセンなど広大な面積を占める米軍基地が建設された。近年では辺野古沖へ普天間基地代替施設を軍民共用空港として建設することで基本計画が合意されているが、具体的な建設位置や建設方法において、国・県・市（名護市）との調整が続けられているところである。

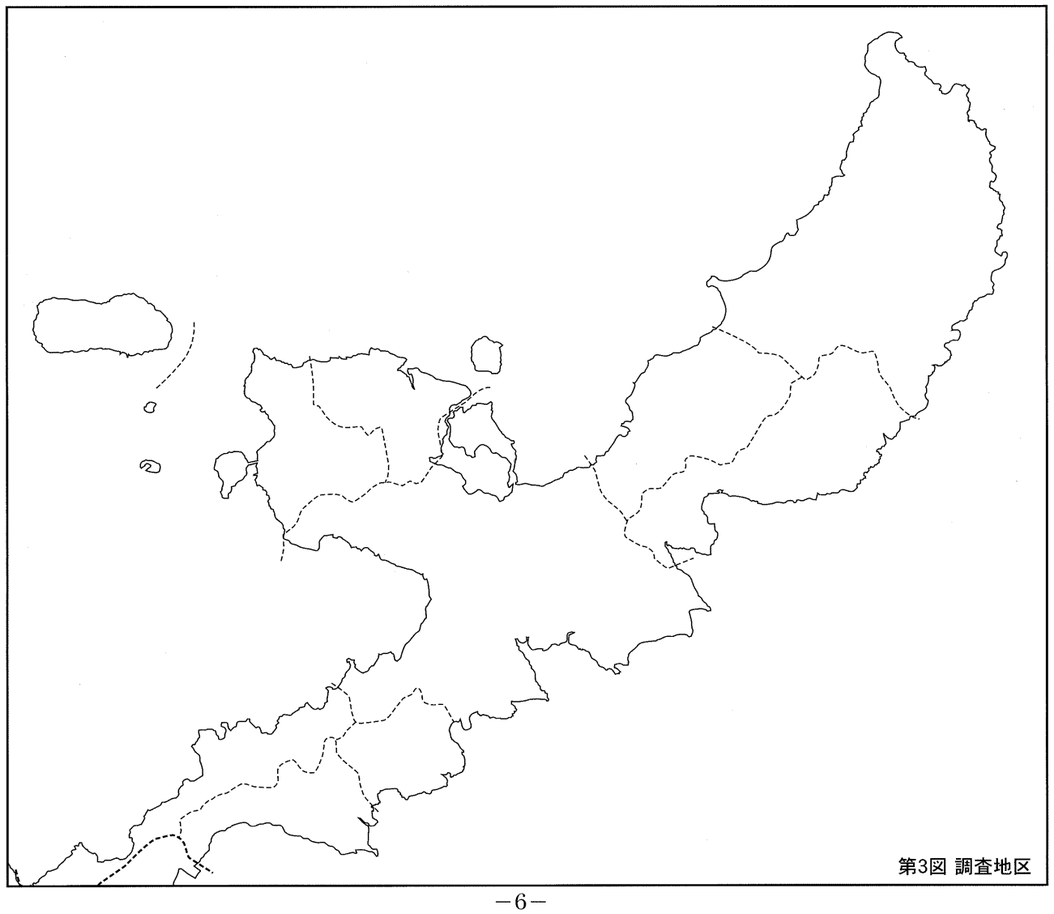
一方、諸開発事業においては、近年の急激な山地開発と相まって降雨のたびに多量の土壌が流出して、特に西海岸地帯での赤土流出汚染などの新たな環境問題をおこしている。そもそも北部地域において、開発がさかんに行われるようになったのは、日本復帰後の海洋博覧会に関わるリゾート開発であった。現在、恩納村や名護市の西海岸を中心にリゾートホテルが並び沖縄観光の中心地の一つを形成している。

（参考文献）
河名俊夫『琉球列島の地形』新星図書出版　1988年
名桜大学総合研究所『名桜大学総合研究No.3』名桜大学総合研究所　2001年
平凡社地方資料センター『日本歴史地名体系第48巻 沖縄県の地名』平凡社　2002年



第１図　日本国周辺位置図

第2図 沖縄本島及び周辺離島位置図



第3図 調査地区

第２節．歴史的環境

沖縄本島北部、金武町・恩納村以北の地域を指す俗称として、山原が使われることは前節でも述べた。山の多い地方という意味であり、近世以来、島尻（本島南部）を下方、中頭（本島中部）を田舎、国頭（本島北部）を山原といった。

ここでは北部地区を、近世の国頭方、近代の国頭郡を中心に、本調査地区である北部地区の歴史的環境について述べることにする。

国頭方とは近世から、廃藩置県の行われた1879年までの行政区画を指す。1660年に国頭方代官が設置された。「琉球国由来記」によると、恩納・名護・本部・今帰仁・羽地・大宜味・国頭・金武・久志の各間切と伊江島・伊平屋島の９間切２島を管轄した。なお、古琉球時代の７代官制にあっては、金武・名護・羽地・今帰仁・国頭などの間切が今帰仁代官の管轄であったといわれている。

国頭方の宿次は首里の北側に近接する中頭方西原間切を起点とし金武・久志・羽地・大宜味・国頭の各間切番所を経由する東宿と、中頭方浦添間切を起点とし恩納・名護・本部・今帰仁の各間切番所を経由する西宿があり、これらを繋ぐ宿道も整備された。それぞれ、国頭方東海道・国頭方西海道と呼ばれ海上の道とともに、北部地区と中南部地区を繋ぐ経路として利用されていた。

北部地区は、山間地が多いという地勢上、海上交通も重視され、今帰仁間切の運天（現今帰仁村）、本部間切の渡久地（現本部町）、久志間切の慶佐次（現東村）などの港があった。近世以来、この港などを利用して、首里・那覇や中南部に薪炭や木材・竹のほか、砂糖樽の材料などを供給しており、林産物を山原船で運搬する光景が戦前までは多くみられた。これらの港湾は、沖縄戦時においても重要視され、海軍の根拠地隊や暁部隊の木材集積地として利用されている。

国頭郡という名称は、1896年に公布された沖縄県郡編制法に基づいて成立したものである。1879年の沖縄県設置当初、県内の間切と島は首里・那覇・島尻地方、中頭地方・国頭地方・久米島・伊平屋島・宮古島・八重山島の９行政区に区分されていた。その内国頭地方は金武・恩納・久志・羽地・名護・今帰仁・本部・大宜味・国頭の９間切及び伊江島をもって成立していた。本調査地区もほぼこれと同じ地域である。

近代日本の一地方県に過ぎなくなった沖縄においても、殖産興業・富国強兵が叫ばれ続けており、その声は当然地方にも反映することになった。

国頭郡は古くから農林業が主要な産業であり、産業奨励も農林業を中心に行われた。明治末期には、重要物産品評会、鼠駆除勝負、農具勝負、製炭改良奨励などが、郡主催あるいは青年会事業として各地で行われている。

一方、軍事思想の普及については、1909年に国頭郡兵事会が組織され更に各村に村兵事会が設けられた。翌年に、沖縄警備隊区司令部で在郷軍人会沖縄支部が結成され、太平洋戦争に至るまでの間、国防団体の役割を果たした。村内の戸主を会員、在郷軍人を義務会員として村長を会長に推戴し、軍人優待、壮丁教育、戦没者遺族慰藉、模範兵表彰等の各事業を行っていた。沖縄の一地方であるこの地域においても軍事思想の普及発達が進められていった。

（参考文献）
国頭郡教育部会『沖縄県国頭郡誌』国頭郡教育部会　1919年（1973年明治文献より復刻）
県教育庁文化課『沖縄県歴史の道調査報告書－国頭・中頭方西海道（Ⅱ）－』県教育委員会　1986年
県教育庁文化課『沖縄県歴史の道調査報告書Ⅳ－国頭方東海道・他－』県教育委員会　1989年

第Ⅲ章　沖縄戦の概要

第１節．本島北部における戦時体制づくり

（１）飛行場建設と住民の徴用

北部地域では、1943年から伊江島において飛行場建設が開始されていた。伊江島飛行場は「浮沈空母・沖縄」の代表的な航空基地で、陸軍航空本部と国場組により工事が開始された。

1944年３月の第32軍創設後、飛行場大隊が沖縄に投入されると、工事は急ピッチで進んだ。伊江島飛行場の建設にあてられた第50飛行場大隊は、東側滑走路、中央滑走路の工事を担当した。飛行場大隊は元来、飛行機の整備・補給・警備が主任務であるので、500名弱の隊員は作業の指揮にあたるだけだった。実際の土木作業にあたったのは、本島全域から集められた県民たちで、ピーク時には4000人を越えた。（東・中飛行場のみ）労務者たちは、空腹に堪えながら１週間から10日間、長い時には１カ月に及ぶ重労働に従事したのである。９月末までには伊江島の中央部に３本の滑走路が南北に並列した。

（２）地上戦闘部隊の配置

1944年７月、地上戦闘部隊の沖縄配備が始まった。本島中南部には第９師団、本島北部地域と伊江島には独立混成第44旅団・独立混成第15連隊（美田部隊）が配置され、第２歩兵隊（宇土部隊）の本部が名護に置かれた。

８月上旬になると、中国大陸から第24師団が沖縄入りし、南は普天間、北は安富祖～金武のラインに駐屯した。８月下旬には、第62師団が普天間・浦添・北谷を中心に配置され、壕掘り作業を中心とする陣地構築を始めた。また、北部に比べ平坦地の多い中南部には多くの飛行場が建設された。軍は米軍との決戦場は本島南半部であるとの認識を持っていたので、主力を本島中南部に集め、陣地を構築した。

一方北部地域では、山間部を利用したゲリラ戦を想定して遊撃隊の配備が進められていた。８月下旬、第32軍に対して第３遊撃隊・第４遊撃隊の編成が下令され、陸軍中野学校出身の将校らが幹部となり、10月に編成を終えた。両部隊は防諜上、第１護郷隊・第２護郷隊と称された。作戦の遂行には、地元の地理に詳しい青少年が必要だったため、17歳未満の学校生徒（義勇隊）や学徒隊約700名が召集された。

なお海軍部隊は、第27魚雷艇隊及び第２蛟龍隊が運天港に、特攻艇部隊である第22・第42震洋隊が金武と屋嘉にそれぞれ配置された。

（３）十・十空襲

10月10日、南西諸島一帯は５次にわたって米軍機による空襲を受けた。

北部地域で真っ先に爆撃対象とされた伊江島飛行場には、午前７時前、第一次攻撃で米軍機が来襲した。艦載機の機銃掃射と急降下爆撃をうけ、滑走路、通信施設、宿舎などが破壊され、７人の兵隊と40人の労務者が犠牲となった。

渡久地・名護方面には、７時過ぎに14機が来襲して、瀬底島の船舶に急降下爆撃を加え３隻を炎上沈没させた。渡久地には暁部隊の弾薬庫があり、これが爆破されたことで街は火の海と化した。また、海軍部隊が配置されていた運天港も空襲され、対岸の屋我地島にあったハンセン病療養所国頭愛楽園（当時）も爆撃された。この空襲による北部地域の人的被害は、名護・渡久地の警察署が把握する限りで死傷者108名を数えた。

空襲後、軍は防衛隊を組織して破壊された伊江島飛行場の修復を行い、翌45年の３月上旬までには、東・中・西の３飛行場を完成させた。

（４）たび重なる配備変更

1944年11月、第９師団が台湾へ引き抜かれることになった。12月から翌年１月にかけて、第９師団が輸送されると、沖縄本島内の配備も大幅に変更された。読谷・具志川・嘉手納を中心に駐屯していた第24師団が本島南部へと移動したため、独立混成第44旅団は、駐屯地域の南側境界線を金武～安富祖のラインから北谷～熱田まで下げた。独立混成第15連隊は、本島中部に主力を移し、北部地域は歩兵２個大隊と遊

撃隊を中心とした編成になった。このとき、第３遊撃隊は多野岳・名護岳・久志岳から北側は塩屋と川田を結ぶラインまで、第４遊撃隊は恩納岳・石川岳を中心に国頭郡南部から中頭郡北部までをそれぞれ重点地域とし、遊撃戦の準備をすすめた。

1945年２月、再度の配備変更により、独立混成第44旅団は知念半島へ移駐し、本島中部には第62師団独立歩兵第12大隊（賀谷支隊）が置かれた。さらに、司令部は飛行場の破壊を決定した。理由は、航空特攻作戦から戦略持久作戦へ方針転換したことと、上陸後の米軍に飛行場を利用されることを恐れてたためである。３月13日、軍民は伊江島飛行場の破壊作業にとりかかった。

（５）疎開地になる

1944年７月から県民の疎開事務を開始した県庁は、翌年の３月までに本土へ約６万人、台湾へ約２万人の疎開を行った。また本島北部地域は、敵の上陸が予想される中南部の住民疎開地域とされ、1945年２月以降、疎開事務が行われた。２月７日、軍司令部から住民の食糧確保と老幼婦女子の北部疎開を言い渡された県庁は、北部山岳地帯に収容小屋をつくることにし、名護にその設営本部を置いた。

しかし、北部への疎開は容易に進まなかった。避難先での生活に不安があるのはもちろん、食糧をめぐる問題や北部までの移動手段が徒歩しか無いことが、県民を躊躇させた。結果的に北部へ避難した県民は約８万5000人に及ぶと考えられる。

また、県内の各学校に置かれていた御真影を護るために、北部へ「疎開」させることになった。1945年１月、教師や男子中学生らによって羽地村稲嶺国民学校に集められた御真影は、その後源河大湿帯の御真影奉護壕に移された。同年６月30日、同地において焼却されたようである。

第２節．本島北部地域の戦闘

（１）本島北部の戦闘

1945年４月１日、本島中部西海岸から上陸した米軍は、３日までに東海岸に達し、本島を南北に分断した。米軍は主力を中南部に注ぎつつ、本島北部にも侵攻した。米軍上陸地点に配置したわずかな日本軍部隊のうち、飛行場設営隊を中心とした特設第１連隊は敗走北上して石川岳の第４遊撃隊に合流、ゲリラ戦に参戦することになった。

第４遊撃隊の岩波隊長は遊撃戦を企図していたが、石川岳は遊撃戦をするには立地上困難であるとの理由から、４月４日恩納岳へ移動した。その後、恩納・金武の各部落に奇襲攻撃を敢行したが、米軍の警戒が厳重なため大きな成果は得られなかった。

第３遊撃隊は、タニヨ（多野）岳に隊本部を設け、名護岳、久志岳、乙羽岳一帯における遊撃戦を準備していた。４月３日ころから名護付近には、中頭地区で米軍攻撃を受け指揮官を失った無統制の兵が集まり、避難民の激増と相俟って混雑していた。第３遊撃隊の村上隊長は、これらの兵を叱咤激励し、食糧を与えて所属部隊に復帰するよう指導したという。

村上隊は各中隊に遊撃戦を命じ、タニヨ岳北西側の部落に侵攻してきた米軍に奇襲攻撃を行った。また、４月17日早朝には真喜屋、稲嶺、源河の米軍を急襲、18日以降も名護、源河、伊差川、二見と各地に遊撃戦を展開した。

本部半島南部の国頭支隊は、３月25日隊本部をそれまでの伊豆味国民学校から八重岳の戦闘指揮所に移した。国頭支隊には県立第３中学校生徒で編成した鉄血勤皇隊や、県立第３高等女学校生徒による看護学徒隊が編入されていた。また、中頭地区から後退してきた県立農林学校生徒で編成した鉄血勤皇隊もいた。国頭支隊は、これらの兵力を八重岳周辺に配置し、斬込隊として派遣した。

一方、運天港所在の海軍部隊は、3月25日以降、上陸前の米軍に対し攻撃を行っていたが30日、空襲を受けほとんど機能を失っていた。また、金武・屋嘉所在の震洋隊は3月27日から数度にわたり米艦船を攻撃したが結果をあげられず、生存者は北部山中や南部の陸戦に加わっていった。

４月６日、米軍が幸喜に上陸を開始し、名護に侵攻してくると、運天港の海軍部隊は国頭支隊長の指揮下に入ることを決め、７日八重岳に移動した。８日、米軍は名護から本部半島に接近し12日までに半島の

沿岸道を制圧した。これによって、八重岳は四方から砲爆撃にさらされることになり、米軍の包囲網が徐々に狭まってきた。宇土支隊長は、乙羽岳の遊撃隊や周辺の鉄血勤皇隊を八重岳に集結させたが、米軍の猛攻に死傷者が続出し、16日、タニヨ岳への撤退を決めた。４月18日以降、徐々にタニヨ岳への移動が始まり、宇土支隊長は21日未明に第３遊撃隊本部に到着した。国頭支隊に合流していた海軍部隊も、同じころタニヨ岳に到着し、遊撃戦に加わった。

このとき宇土支隊長は、タニヨ岳は大兵力をもって防御する地形ではないことから、挺進攻撃の方針を固めた。25日には村上隊長の指揮する挺進斬込隊が名護に派遣され、戦果をあげた。しかし、４月も下旬になると兵器と食糧の不足から兵士の士気が萎えはじめた。このとき、第３遊撃隊の人員は70％まで減っていた。

５月上旬、第３遊撃隊は連絡の途絶えた軍司令部に伝令を送り、５月24日伝令が無事帰還すると、士気は高まり、義勇隊らの協力をもってさらに遊撃戦を続けた。

６月25日ころ村上隊長は第32軍の崩壊を知り、７月１日に総攻撃を決行することを決めた。しかし、６月30日に至って、部下の意見具申により総攻撃は中止し秘密遊撃戦に移行することになった。７月７日ころから秘密遊撃戦の配置についた村上隊長は、少数の部下とともに名護岳付近に拠点を設けて潜伏した。

米軍は、山間部に潜む遊撃隊と戦闘しつつ、西海岸を北上した。本島最北端の辺戸岬には４月13日に達している。恩納岳・多野岳の包囲網は徐々に狭まり、６月２日夜、第４遊撃隊は恩納岳を放棄した。しかし同隊は久志岳に移動して、なおも遊撃戦を続行した。

第４遊撃隊は、７月10日第３遊撃隊の村上隊長と会った。ここで軍主力の死亡を確認し、同隊が秘密遊撃隊に移行していることを知ると、第４遊撃隊も、秘密遊撃戦に移行することに決定し、７月16日部隊を解散した。その後は、各隊員を出身部落に返し、家業を行いながら中隊長や隊本部に情報・食糧を提供することを指示した。同隊が終戦を知り、収容所に入ったのは10月のことである。

一方、村上隊長は容易に降伏しなかった。９月末から10月にかけて宇土支隊長以下大部分が下山し、先に収容されていた日本軍将校の使者が、村上隊長のもとへ数回説得に訪れたが、降伏を承知しなかった。翌1946年１月八原高級参謀の手紙を渡され意を決し、１月３日、ようやく下山したのである。

（２）伊江島の戦闘

伊江島には、独立混成第44旅団第２歩兵隊第１大隊（井川隊長）を中心とする伊江島地区隊が駐屯し、陣地構築を行っていた。1945年３月、伊江島飛行場の破壊作業を終えた第50飛行場大隊は本部半島に移動する予定だったが、23日の空襲、26日からの艦砲射撃を受けて移動の機を失い、大隊の主力は伊江島に残った。米軍上陸時の日本軍側兵力は約2700名、この中には200名を越える少年義勇隊・女子救護班・婦人協力隊の姿があった。伊江島に残った一般住民は約3000名と考えられる。

伊江島地区隊は、伊江城山（タッチュー）を中心に地下道で連結する陣地を構築したが、西部の陣地は海岸洞窟を利用した急造の野戦陣地に過ぎなかった。４月に入り空襲が激しくなると、城山の草木は一掃されて、裸の岩山となったという。

４月16日朝８時ころ、米軍は島の西側から上陸を開始し、その日のうちに城山西方300mまで達した。また、破壊されていた伊江島飛行場の修復工事にとりかかり、２日後には早くも使用を開始した。17日には、島の南側から新たな兵力が上陸し、水納島からの激しい砲撃も行った。日本軍は、夜間の奇襲攻撃や爆雷を抱えて戦車に突撃する「肉迫攻撃」を行ったが、米軍の四方からの包囲網は着実に城山へ迫っていた。20日夕方に米軍は、城山を中心に半径300mの位置まで侵攻してきていた。この間、米軍の侵攻を前に「集団自決」をはかった住民らもいた。

20日夜、井川隊長は最後の総突撃命令を出した。兵員は僅か百数十名程度だったが、一般住民や防衛隊、女子救護班として多くの島民がこの攻撃に志願した。しかし、米軍の猛攻撃にあい失敗、部隊は全滅の状態となり、21日、組織的戦闘は終了した。その後は解隊状態となり、遊撃戦へと移行、生き延びた島民は、座間味島と渡嘉敷島に強制移住させられた。隊組織を失い、正式な降伏式もなかった伊江島では、その後１年以上終戦を知らずに木の上で生活した日本兵がいた。日本側の死者は3500名あまり、そのうち伊江島の住民は1500人を越えると思われる。のちに伊江島の戦闘は、「沖縄戦の縮図」と言われた。

第3節．住民被害と戦後の始まり

本島北部では、中南部のような地上戦の激しさはなかったものの、多くの一般住民の死者を出した。米軍の爆撃による被弾死のほか、マラリアの蔓延、餓死がそのおもな原因である。山中での生活を余儀なくされた一般住民は、恐怖と不安の中で避難を続けていた。雨露をかろうじてしのげる程度の避難小屋は、山岳地帯の水辺の近くに造られた。そして昼間は防空壕に息をひそめ、夜になると避難小屋に戻るという生活を繰り返した。徐々に、蓄えた食糧が底をつき飢餓状態となるが、戦時体制下で培われた軍国思想や皇国史観、避難中の誤った情報の流布などにより、住民は下山して米軍の保護下に入ることをためらった。米軍が迫ってくると更に山奥へと逃げ込み、犠牲者を増やしたのである。

また、敗残兵となってもなお反撃の機会をさぐる日本軍が、避難民に死を強制する場面も見られた。1945年５月、大宜味村渡野喜屋（現白浜）で起きた虐殺事件は、すでに米軍の保護下にあった一般住民を日本兵が砂浜へ連れ出し、手榴弾を投げつけて20名以上を殺害するというものだった。その他、食糧の強奪やスパイ嫌疑による住民殺害など、日本兵が起こした事件は少なくなく、本島北部地域で16カ所57名以上の犠牲があったことがわかっている。住民の北部疎開は、「県民の生命の尊重」というより、戦闘地区からの排除、食糧自給体制の確保が第一であっただろうと考えられる。

沖縄戦を生き抜いた県民は、北部各地に設置された収容所で戦後のスタートをきった。沖縄侵攻前から全島の基地化を計画していた米軍は、上陸後、戦線をすすめながら必要な土地を確保し、基地建設を行った。よって、住民が帰郷できた時期には地域差があり、それまでの間、県民は自由な移動を許されず、北部各地に設けられた難民収容所に住まわされたのである。激しい砲爆撃をくぐり抜けたにもかかわらず、食糧事情の悪い不衛生な環境の中での生活を強いられたため、栄養失調やマラリア罹患者が続出、さらに戦場で受けた傷の悪化や極度の疲労もあって、老人や子どもらが次々と命を落としていった。当時７万人あまりが収容されていた宜野座村では、米軍の野戦病院が設置され、収容所の男性たちは死者の埋葬に追われた。福山の共同墓地死亡者名簿では603名、古知屋の同名簿では426名の氏名が確認できる。宜野座村では1983年に収容所共同墓地の収骨作業を行い、161人分を収骨した。（難民収容所や捕虜収容所の設置状況については附編「Ⅰ収容所」を参照）

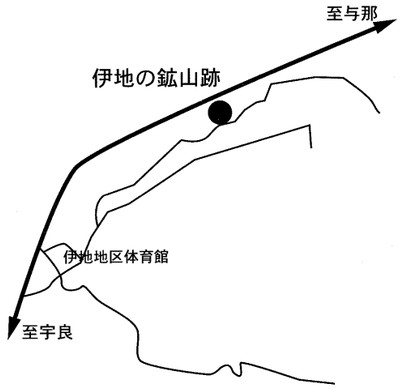
（参考文献）
防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書　沖縄方面陸軍作戦』朝雲新聞社　1968年
琉球政府文教局研究調査課『琉球史料　第３集』琉球政府文教局　1958年
琉球政府『沖縄県史第９巻各論編８　沖縄戦記録１』琉球政府　1971年
沖縄県教育委員会『沖縄県史第10巻各論編９　沖縄戦記録２』沖縄県教育委員会　1974年
中野校友会『陸軍中野学校』中野校友会　1978年
上原正稔訳編『沖縄戦アメリカ軍戦時記録』三一書房　1986年
沖縄平和ネットワーク編『新歩く・みる・考える沖縄』沖縄時事出版　1997年
沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編『沖縄戦研究Ⅱ』沖縄県教育委員会　1999年
国頭村『国頭村史』国頭村役場　1967年
今帰仁村史編纂委員会『今帰仁村史』今帰仁村役場　1975年
大宜味村史編集委員会『大宜味村史通史』大宜味村役場　1979年
仲松弥秀『恩納村誌』恩納村役場　1980年
東村史編集委員会『東村史第３巻資料編２』東村役場　1984年
名護市戦争記録の会　名護市史編さん委員会（戦争部会）名護市史編さん室『名護市史叢書１　語りつぐ戦争－市民の戦時・戦後体験記録－第１集』名護市役所　1985年
宜野座村誌編集委員会『宜野座米軍野戦病院集団埋葬地収骨報告書』宜野座村　1985年
宜野座村誌編集委員会『宜野座村誌第２巻資料編１　移民・開墾・戦争体験』宜野座村役場　1987年
町民の戦時体験記編集委員会『町民の戦時体験記』本部町教育委員会　1996年
伊江村史編集委員会『伊江村史下巻』伊江村役場　1980年
伊江村教育委員会『証言資料集成　伊江島の戦中・戦後体験記録　イーハッチャー魂で苦難を越えて』伊江村教育委員会　1999年
漢那区誌編集委員会『漢那誌』漢那区誌編集委員会　1984年
大兼久誌編集委員会『大兼久誌』山川保清　1991年
瀬底誌編集委員会『瀬底誌』本部町瀬底　1995年
金武町史編さん委員会『金武町史第二巻　戦争・本編、証言編、資料編』金武町教育委員会　2002年

第Ⅳ章　各市町村における戦争遺跡

第１節．国頭村

a. 伊地の鉱山跡

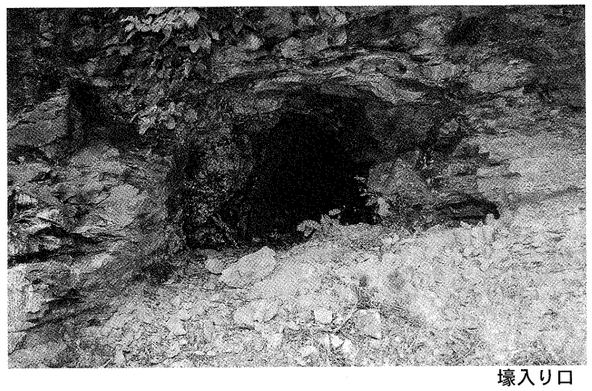
所在地：国頭村字伊地小字田平原795番地
立地（標高）：山中（約75m）
形態：人工壕
種別：住民避難
現状：一部落盤が見られるが比較的良好。コウモリが多数棲息
保存状況：農林道の脇、擁壁に壕口が開いている
築造者：伊地の銅山作業員
築造年月日：1890年代
戦時中の使用状況：字伊地の住民が避難していた
主な遺構：坑道、小部屋



概　要

字伊地の鉱山跡は、伊地集落の北側に面する地元でトーミャーと呼ばれる山林の中腹に所在する。集落から山頂へと向かう農林道路の擁壁に壕口が２基あるのを確認することができる。

その内、壁に向かって右側の壕口No.1は山林道の地表面より約110㎝の位置に立ち上がっており、よじ登るようにして入壕できる位置に口が開いている。壕口No.2はより高所に位置するため、直接入壕することは困難である。壕口No.1、No.2とも千枚岩質の岩盤を掘削したものであるが、比較的保存状態は良好であり大規模な落盤の恐れは少ないものと思われる。

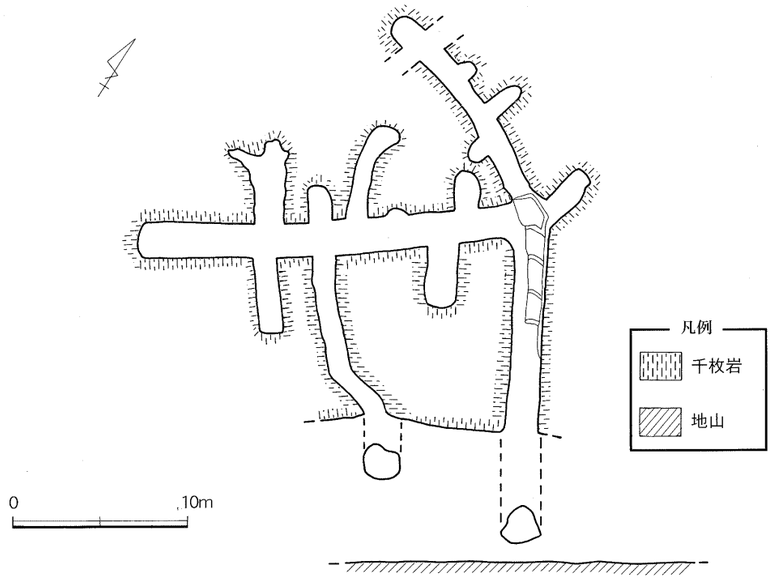

壕入り口

伊地集落では、明治期に首里・本部その他地域の寄留民が藍造りや銅山作業員として移住したものが多い。1894年の「南嶋探検」にも「伊地村尚氏（旧国王ノ持）伊地鉱山事務所」とあり、この時期銅の出鉱が行われていたことがわかる。明治末期には鉱山経営の不振により採鉱は中止となった。

本遺跡の鉱山跡は、その当時放置されていた坑道に沖縄戦中、伊地の住民が防空壕として再利用したものである。現在、伊地において残存している壕はここだけであり、オキナワコキクガシラコウモリの良好な棲息地となっている。

壕は、口部より北北西に向かって構築されている。口部周辺の坑道は緩やかな傾斜を有し上昇している。５m程進むと急勾配になるためツルハシなどで整形した階段状の遺構が

農道脇に開く口



第４図　鉱山跡　平面図・壕口立面図

見られる。内部は枝状に坑道が分岐し、それぞれの坑道の先端部には掘削痕が見られた。また、北北西に延びる坑道を20m程進むと、空気が薄くなり実測作業が不可能であった。

沖縄戦当時の状況としては、1945年３月、空襲が激しくなったときにのみ壕内に避難し、それ以外は畑作業などに従事し通常の生活であったという。多いときで、伊地集落の住民が50人ほど避難していた。

急勾配の坑道

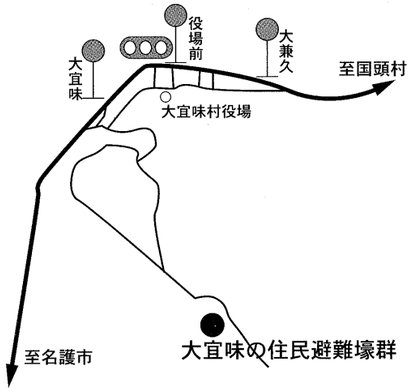
壕先端部

（参考文献）
国頭村役所『国頭村史』国頭村役所　1967年
（証言者）
島親寄さん

第２節．大宜味村

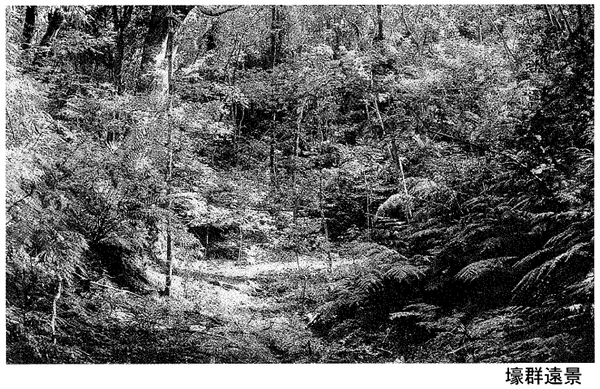
a. 大宜味の住民避難壕群

所在地：大宜味村字根路銘2170他
立地（標高）：山腹（120～130m）
形態：人工壕
種別：住民避難
現状：平和学習に活用されている
保存状況：山中に放置されている
築造者：字大宜味の住民
築造年月日：1945年１月ころ
戦時中の使用状況：字大宜味の住民が避難
主な遺構：壕



概　要

字大宜味集落の南約１㎞の通称中山と呼ばれる山中にある、沖縄戦当時の住民避難壕群。全体的に残り具合は良好である。当時は小さな川が流れていた窪みの周辺に、現在、17基の壕口を見ることができる。そのうちの15基は、川上に向かって左側の、比較的緩やかな斜面に口を開けている。壕の形状は、U字型に連結しているものが６カ所、単独のものが４カ所、隣の壕と連結しようとして掘削途中のＬ字型の壕が１カ所ある。大きさはどれも、間口が70㎝～90㎝、高さ１m前後。U字型のものは、壕内の距離が５m～８m、単独のものは奥行き120㎝程度である。


壕群遠景

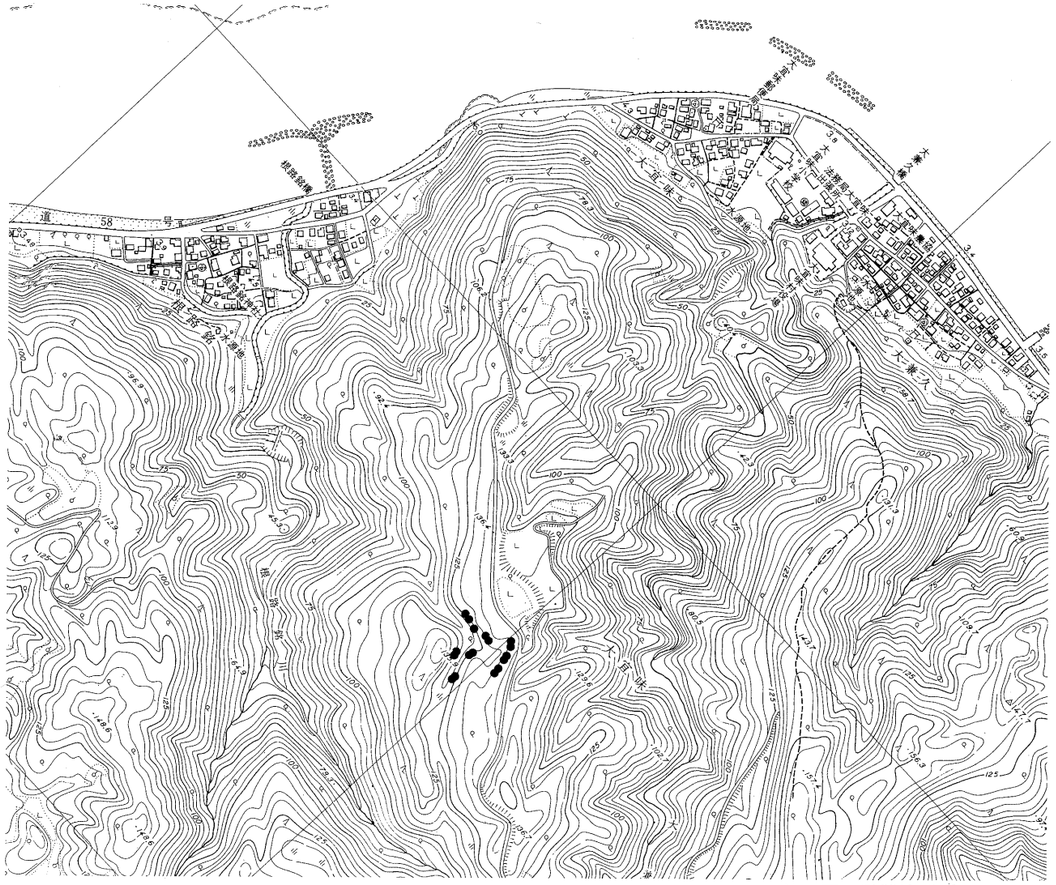
これらの壕を構築したのは、大宜味集落の住民達であった。当時、国民学校６年生だった平良松信氏によると、十・十空襲後、山中に避難小屋を造ったが、1945年になると避難壕の構築も不可欠であるということになり、親戚や隣近所同士で壕の掘削作業を開始したという。

３月27日ごろからこの壕へ避難を開始した。家族・親族単位で避難した住民は約20世帯いたという。U字型の壕には、２～３世帯（10人～15人）がぎゅうぎゅう詰めになって入った。また、現在は落盤で消滅したが大きな単独の壕が３つあり、ここに避難民の約半数が入っていたという。食事の準備は壕前の広場で行い、夜も集落へ戻ることはなかった。

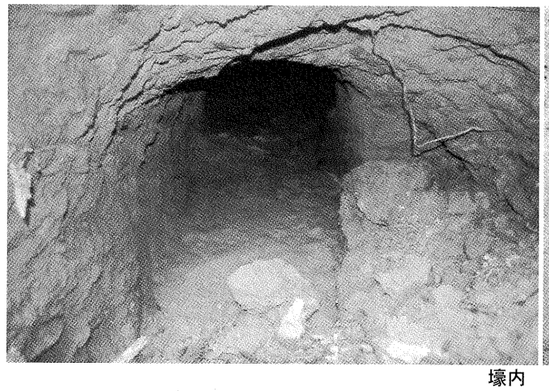
壕口近景

４月中旬になると、大人達の間で「米軍が塩屋まで来ている」との情報が広まり、住民たちは「米軍に捕まってはならない」と、さらに山中深く逃げ込んだ。平良氏は、米軍に保護される７月中旬までの約３カ月間、家族・親族14名と山中を彷徨した。この間、逃げ遅れた老人らが米兵によって数名殺害されたという。

現在この避難壕群は、地域の小学校の平和学習に活用されている。体を屈め壕内に入り、


第５図　避難壕群プロット図

当時の食器など生活道具を目にして、追体験を行っている。


壕内

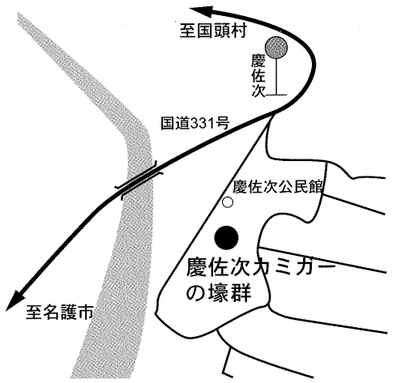
壕内に残る甕

(参考資料)
「戦争時の避難生活を体験」琉球新報　2001年６月23日
「壕前で平和学習」沖縄タイムス　2001年６月26日
(証言者)
平良松信さん

第３節．東村

a. 慶佐次カミガーの壕群

所在地：東村慶佐次95－２
立地（標高）：低地帯（約５m）
形態：人工壕
種別：住民避難、陣地
現状：壕口部に一部土砂流入がみられるが比較的良好
保存状況：低地帯に放置されている
築造者：２基は慶佐次住民が構築
築造年月日：1944年
戦時中の使用状況：２基は慶佐次住民が防空壕として利用
主な遺構：陣地壕、爆風除け（石塀）等



概　要

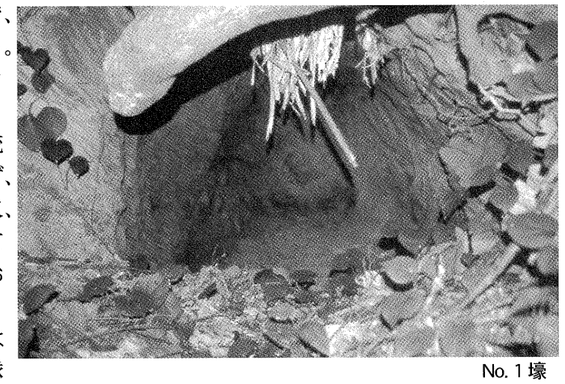
慶佐次旧公民館に隣接する「お宮」と呼ばれている拝所の南南西崖下の低地帯部に壕群が所在する。この低地帯部にはカミガーと称される井戸があり、慶佐次の神人（カミンチュ）によって神事が行われている。旧公民館を含むこの一帯は古くから慶佐次の行政・信仰の中心地であったことがわかる。

お宮

低地帯部は標高約10mの丘陵に囲まれており、丘陵の矩面に構築した壕群が所在する。現在、伐採及び踏査により確認できるのはカミガーに近い壕口より南側に向かってNo.１からNo.５まで所在する。それぞれ壕口は単体で存在し、奥行きは約190㎝～810㎝と統一された規模ではないことがわかる。又、構造上もNo.１とNo.２は１～２人が進入できる程の軽易なものであるが、No.３～No.５は坑木跡がみられ陣地壕のていをなしている。

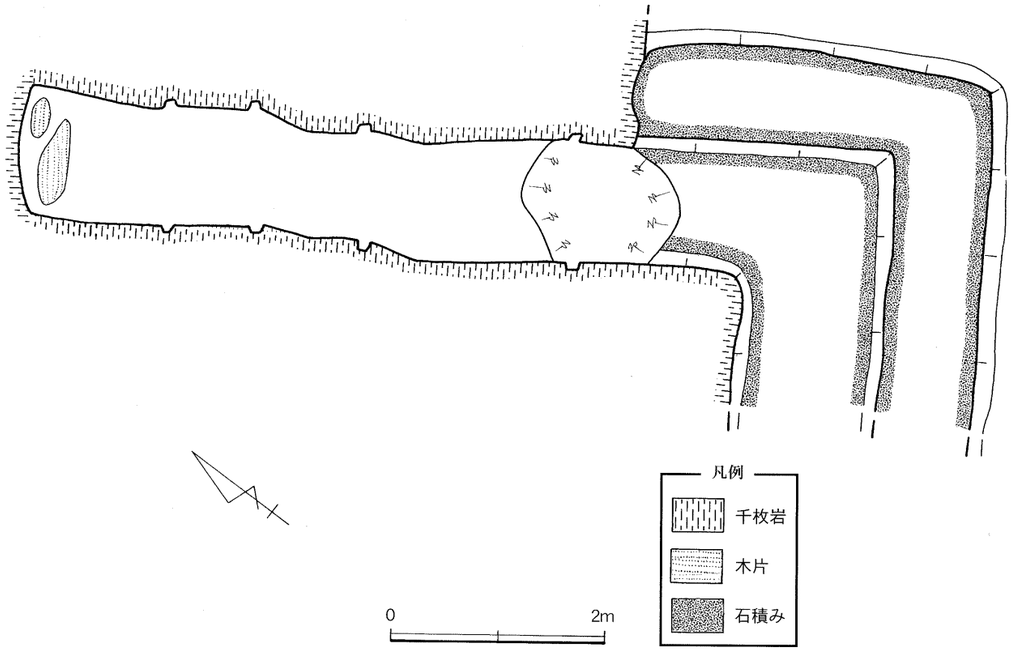
東村史第三巻資料編２の戦時体験記録では、慶佐次の住民が十・十空襲後にお宮の下に防空壕を２つ掘ったことが記されている。聞き取り調査による現場確認においても２基の壕については、確認が得られているが、No.３～No.５の「陣地壕」についてはよく知られていない。

５基の壕の内、遺構の残り具合が最も良好で、陣地壕の形態が明らかなものは、No.５である。壕口前面には爆風避けの石積みが見られ、Ｌ字クランクのような通路も確認できる。


No.１壕

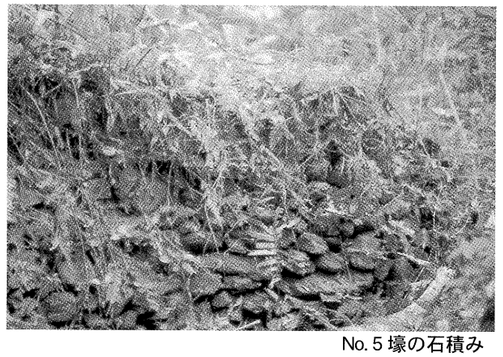
坑道部に一部国頭マージ（赤土）による土砂流入が見られるが、壕先端部までは土砂が流入せず、先端部の表土は当時の地山であると思われる。又、坑木に使用したであろう木片も先端部に散乱している。名護層砂岩と千枚岩の混合層を掘削しており、ツルハシの掘削跡が壁面に無数に見られる。

慶佐次に日本軍が長期駐留したという公文書は確認できていないが、1945年4月中旬国頭支隊



第６図　カミガーの壕No.５平面図

（宇土部隊）残存兵等は転進を繰り返す中で慶佐次にたどり着いている。宇土隊長は慶佐次において敗戦までここを拠点として行動する。その頃、慶佐次の住民は山中に避難し集落に残るものは少なかった。


No.５壕の石積み

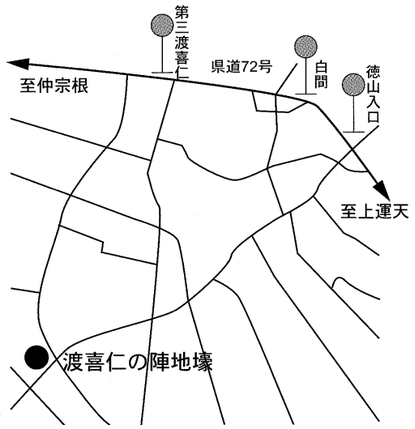
構築された壕口

（参考文献）
東村史編集委員会『東村史第三巻資料編２』東村役場　1984年
東村史編集委員会『東村史第１巻通史編』東村役場　1987年

第 4 節. 今帰仁村

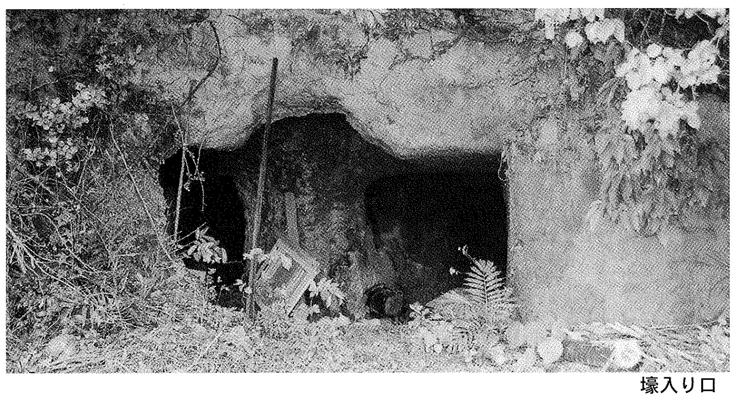
a. 渡喜仁の陣地壕

所在地：今帰仁村字渡喜仁826-3　その他
立地（標高）：丘陵（約10m）
形態：構築壕
種別：陣地
現状：倉庫として使用されている
保存状況：農道の整備により壕の一部が削られていると考えられる
築造者：白石部隊
築造年月日：1944年８月
戦時中の使用状況：魚雷倉庫等
主な遺構：陣地壕内を仕切っていたと思われる扉の跡等



概　要

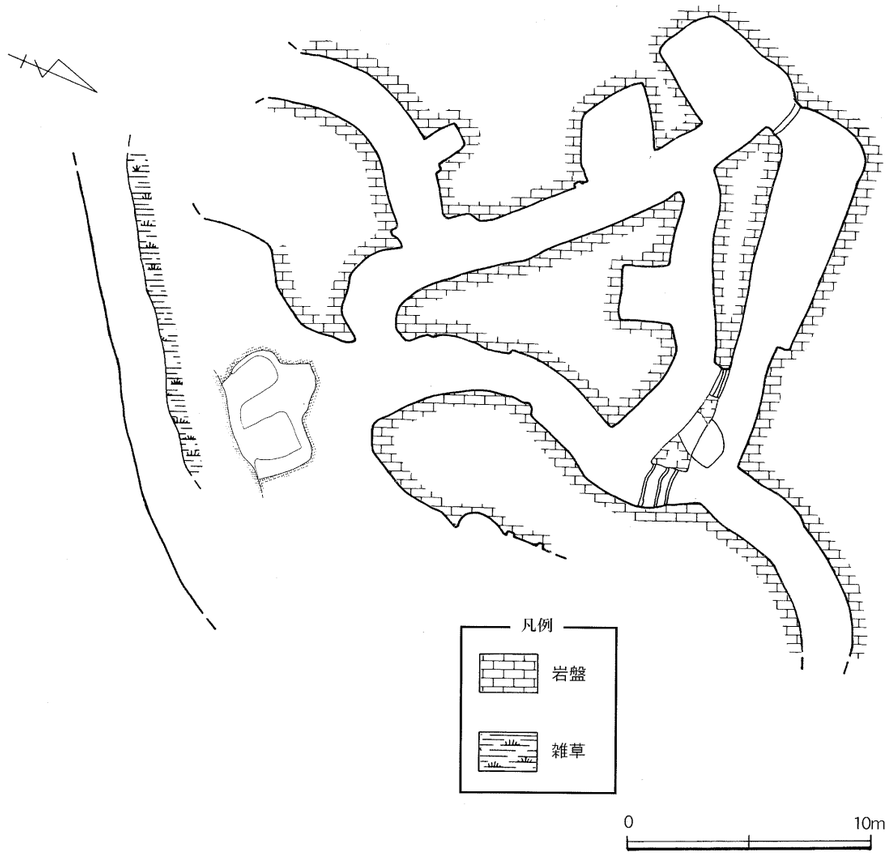
字渡喜仁の丘陵に蛟龍秘匿壕と呼ばれている陣地壕が所在する。この壕は南側に全長約200mの迷路状の構築壕と北側に全長約40mの直線に貫通した構築壕である。しかし、南側の構築壕は構造上全長約30mの蛟龍を格納する事は不可能である。また、北側の壕は全長は十分にあるが壕の高さが足りないため蛟龍が秘匿されていたいう事には疑問が残る。


壕入り口

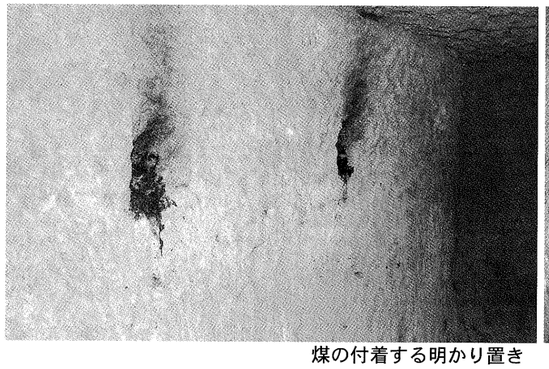
1944年８月から運天港には蛟龍隊と第27魚雷艇隊が配備された。その時期とほぼ同時に地域の住民を徴用して当壕の構築が開始された。また、当壕の構築目的は魚雷の保管であったとも言われている。南側の壕の構造を見てみると、現在残っている３カ所の出入り口から入って最奥部に壁に掘り込みのあるところがある。通常坑木をはめ込む為の掘り込みでは天井にも掘り込みがあるが、この部分に関しては天井に掘り込みは存在しない。このことからこの場所には扉が設置されていたと考えられる。また、壕の構造上出入り口からもっとも奥にあることからも、この場所に魚雷が保管されていたと思われる。

当壕は現在、字渡喜仁の畑地内において倉庫として使用されている。

ゴミが散乱する内部



第７図　陣地壕平面図及び壕口立面図

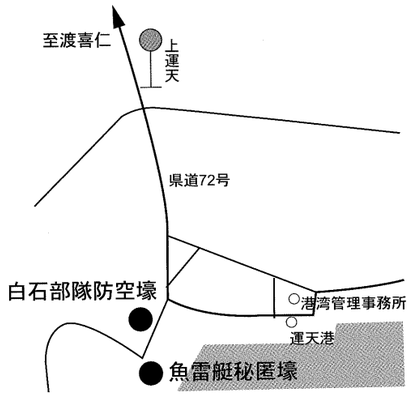

煤の付着する明かり置き

段差のある部屋

（参考文献）
防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書　沖縄方面陸軍作戦』朝雲新聞社　1968年
今帰仁村史編纂委員会『今帰仁村史』今帰仁村役場　1975年
高江洲洋子「戦跡は語る　10」琉球新報　1998年６月27日

b. 運天の魚雷艇隊の壕

所在地：今帰仁村字上運天541　その他
立地（標高）：海岸線沿い（0～5m）
形態：秘匿壕は構築壕と一部自然壕、防空壕は人工壕
種別：陣地
現状：運天港横と民家裏に放置されている
保存状況：原野に放置されている
築造者：第27魚雷艇隊
築造年月日：1944年8月から
戦時中の使用状況：魚雷艇の秘匿壕および防空壕
主な遺構：構築された壕の跡



概　要

運天港岸壁西側と若干内陸に入った家屋の裏に構築壕が残っている。これが第27魚雷艇隊の壕である。運天港岸壁西側の壕は魚雷艇の秘匿壕と言われている。また、民家裏の壕はその東側広場にあった第27魚雷艇隊本部の防空壕として構築されたと言われている。

魚雷艇秘匿壕　壕口

第27魚雷艇隊は1944年8月から9月にかけて運天に移動してきた。その後、多数の地域住民を動員して基地設営が進められたようである。魚雷艇18隻隊員360名の部隊であった。十・十空襲で13隻の魚雷艇を失うが、魚雷艇を補充し1945年3月末までには15隻保有していた。1945年3月27日の空襲で3隻の魚雷艇を失うが、その夜から魚雷艇隊は攻撃のため出撃を開始する。しかし、30日の空襲において魚雷艇が使用不能となった。

4月6日夜、米軍侵攻に伴い沖縄方面根拠地隊へ「当隊は今より陸上戦闘に移行、国頭支隊長の指揮下に入る」という電報を送り、一部の残留隊を運天港に残し国頭支隊の指揮下に入った。

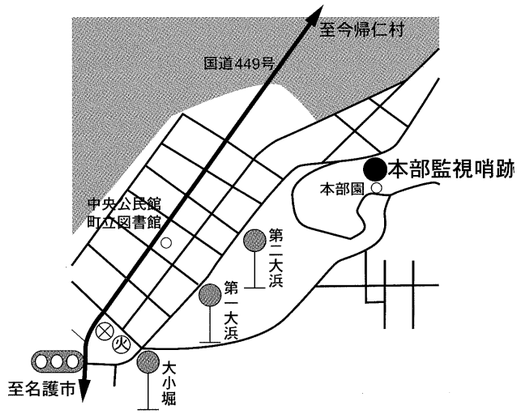
抗木跡が残る白石部隊防空壕内部

（参考文献）
防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書　沖縄方面陸軍作戦』朝雲新聞社　1968年
防衛庁防衛研究所図書館蔵『大東亜戦争　戦時日誌第二十七魚雷艇隊』1944年7月～1945年1月

第5節．本部町

a. 本部監視哨跡

所在地：本部町字谷茶205番地
立地（標高）：丘陵（50～55m）
形態：構築物
種別：監視哨
現状：１階部が造成土で埋まっており、表土上にあるのは当時の２階部
保存状況：お年寄りの休憩場所として一部整備していた
築造者：不明
築造年月日：1943年
戦時中の使用状況：防空監視として利用
主な遺構：監視哨１棟



概　要

本部監視哨跡は、本部半島の西側の字谷茶にあり、東シナ海を一望できる標高50～55mの丘陵中に所在する。

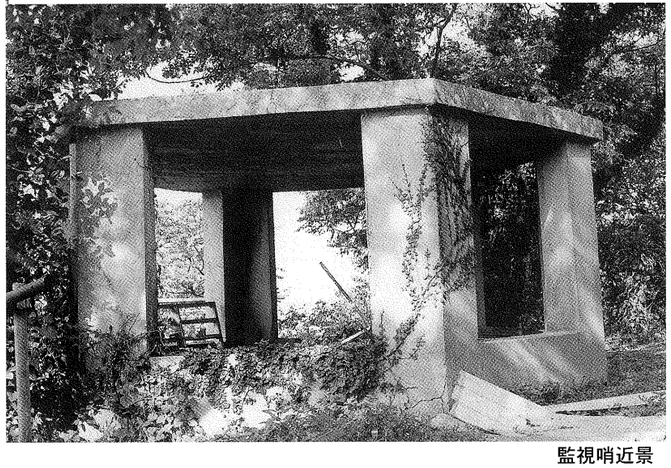
現在、特養老人ホーム本部園隣接地にあり、1997年頃にお年寄りの休憩場所として、監視哨跡の柱部などをモルタルですべて塗り直した。その際、老人ホーム施設から監視哨跡までの小道をセメントで敷設するなど整備している。

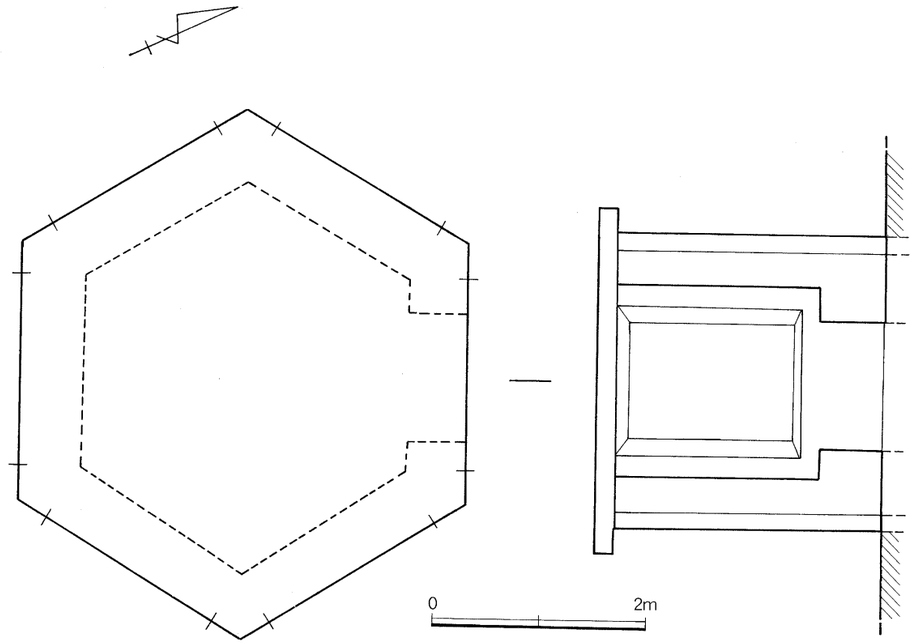
監視哨とは、航空機を早期に発見し敵味方を識別して防空機関に知らせるための施設である。1941年の「防空監視隊令」により、それまでの臨時立哨が常時立哨へと替わり、設備・人員なども強化された。本部監視哨はこの動きと連動して1943年に設置された。

この監視哨が、民間防空監視哨と呼ばれることがあるが、これは軍の監視施設と区別するためである。県警防課管轄の監視哨は県内において、本部の他に那覇、糸満、金武、国頭、嘉手納、与那城、宮古、八重山、西表、久米島と11ヶ所に設置されており統括本部は当時の沖縄県庁にあった。

本部の監視哨の構造は、平面にお

監視哨遠景


監視哨近景

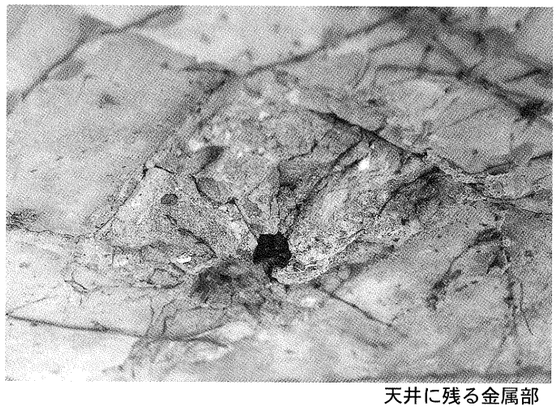


第８図　監視哨跡平面図及び立面図

いて一辺約180㎝ほぼ正６角形を呈し、高さは屋根の厚さも含め約200㎝を測る。入口部を含む６面に約130㎝規格の窓枠が施されており、多角的に監視できる造りになっている。

証言によると、当時は２階建てで、１階には監視要員が２～３名待機していた。現在１階部は造成土により埋まっている状況である。また、内部には有線電話が設置されており、統括本部との連絡を行っていたが、谷茶の集落まで伝令できるような小道（下り道）も現存している。監視哨員は各字から選出された青年団を中心に構成されていた。

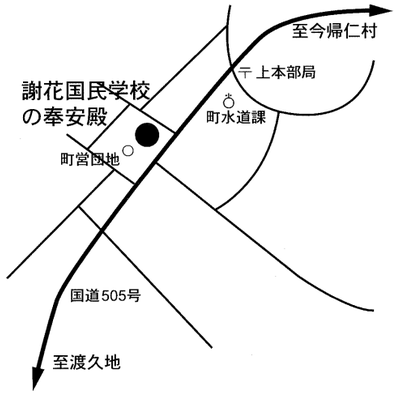
入り口


天井に残る金属部

（参考文献）
沖縄県沖縄史料編集所『沖縄県史料近代Ⅰ昭和十八年知事事務引継書類』沖縄県教育委員会　1978年
町民の戦時体験記編集委員会『町民の戦時体験記』本部町教育委員会　1996年
（証言者）
島袋貞吉さん

b. 謝花国民学校の奉安殿

所在地：本部町字謝花１番地
立地（標高）：平地（35m）
形態：建造物
種別：その他
現状：一部落書きが見られるが比較的良好
保存状況：町営団地の敷地内に放置されている
築造者：不明（謝花国民学校の委託）
築造年月日：1932年
戦時中の使用状況：学校行事に利用された
主な遺構：奉安殿



概　要

謝花の奉安殿は、町営住宅謝花団地の敷地内に所在する。団地の棟と棟の間の芝生地に放置されている現状である。団地の敷地は、旧謝花国民学校跡地であり当時から現在にいたるまで同位置にある。

町営団地建設の際の造成土で、犬走りや正面部に数段あった階段は地表下にあると思われるが、現状では芝生で覆われており階段の最上段部のみ確認することができた。

奉安殿の表面はセメントで塗り固めて、貝殻等の破片をちりばめた模様を呈している。また、本体部と屋根を繋ぐエンタブリチュアには菱形模様が３基づつ並んで装飾されている。

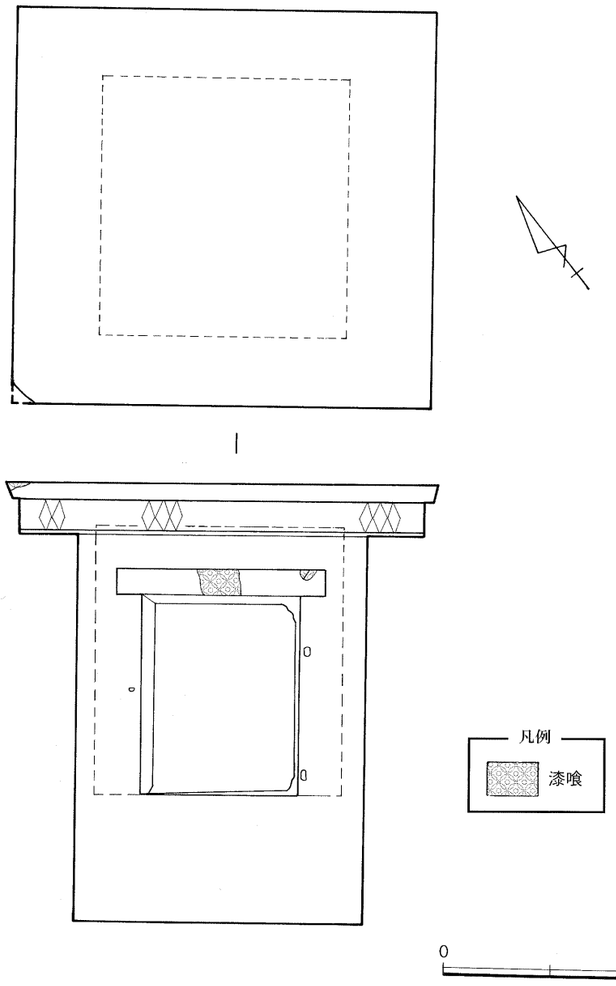
正面

基礎部の平面は、正面幅194㎝、奥行き186㎝を測り、若干幅の長い方形を呈している。地表面から屋根までは226㎝の高さであるが、この高さに、屋上部の旗立台は含まれていない。これは旗立台が戦後造られたもので高さとして付加していないためである。旧謝花国民学校は戦後、1946年謝花小学校と改称し1965年に上本部小学校に統廃合されるまで当敷地にあったことから、小学校の旗立台として利用したものであろう。

当時、奉安殿の内部には天皇・皇后両陛下の写真（御真影）、教育勅語謄本、戊申詔書謄本が安置されていた。その奉安殿の前面において、祝祭日の諸儀式には校長先生が先頭になり、全校生徒の前で拝賀（御真影への最敬礼）や独特のリズムでの勅語奉読が義務づけられていた。また、校舎から奉安殿へ通ずる小道には砂利が敷き詰められていたが、この砂利は、築造当時の国民学校生が大浜（本部町字大浜）海岸から運搬したものである。

横線が入る脇面

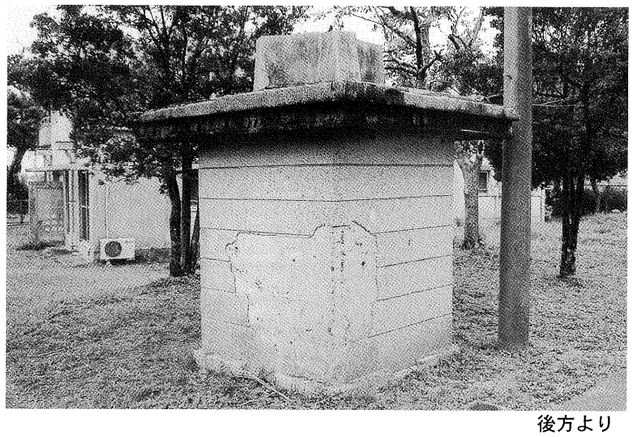
この御真影等は、1945年の本島内に米軍が上陸する前に、名護市源河の御真影奉護壕（38



第９図　奉安殿平面図及び立面図

頁）に隠し収められることになった。

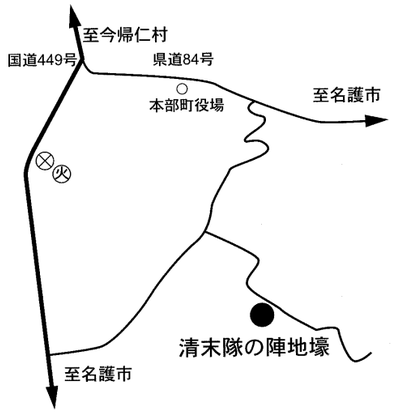
（参考文献）
町民の戦時体験記編集委員会『町民の戦時体験記』本部町教育委員会　1996年
財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室『沖縄戦研究（I）』沖縄県教育委員会　1998年
（証言者）
与那覇清吉さん


後方より

片扉接続部

c. 清末隊の陣地壕

所在地：本部町字大嘉陽
立地（標高）：山腹（約280m）
形態：人工壕
種別：陣地
現状：陣地壕附近に清末隊慰霊碑がある
保存状況：山中に放置されている
築造者：国頭支隊
築造年月日：1944年7月以降
戦時中の使用状況：陣地
主な遺構：陣地壕の跡と石積み



概　要

国頭地区の防備を受け持ったのは、独立混成第44旅団第２歩兵隊（隊長　宇土武彦大佐）を中心とする国頭支隊である。しかし、独立混成旅団は沖縄への配備のため、鹿児島から乗り込んでいた富山丸が、1944年6月29日に米軍潜水艦による魚雷攻撃を受け、徳之島沖にて沈没したため、人員・装備に多大な損害を被った。

草木に被われた入り口

配備当初の国頭支隊は伊豆味国民学校に司令部を置き、伊江島を含む恩納岳以北の沖縄北部各地に、部隊を配置して陣地を構築し、戦闘準備を行った。米軍の進攻が始まった３月末、支隊本部を八重岳に移し、八重岳を含む本部半島一帯を支隊直属部隊と真部山に陣地を築いた第２歩兵隊第２大隊（隊長　佐藤富夫少佐以下670名余）によって、防備した。

清末隊は支隊直属部隊に編成された第２歩兵隊の砲中隊（隊長　清末一義中尉以下120名余）で、陸軍の連隊砲である四一式山砲４門を備えていた。八重岳の支隊本部と真部山の第二大隊本部の中間地点に位置する大嘉陽の標高280mほどの山中に主陣地を構え、渡久地や崎本部方面からの米軍の進攻に対して、これを牽制した。しかし、４月16日に至り、歩兵砲がすべて破壊され、中隊長清末中尉はじめ小隊長蔦井對馬中尉、同亀田登盛曹長以下約20名が壕外への攻撃を試み、全滅した。

清末隊の壕は中隊主陣地と各小隊によるいくつかの壕で構成されていたと考えられ、現在、大嘉陽には中隊主陣地壕の入り口らしき石積みと、蔦井小隊の壕跡が確認される。また、中隊主陣地近くには1959年11月7日に建立された清末隊慰霊碑、蔦井小隊の壕跡には関係者による供養塔が設けられている。

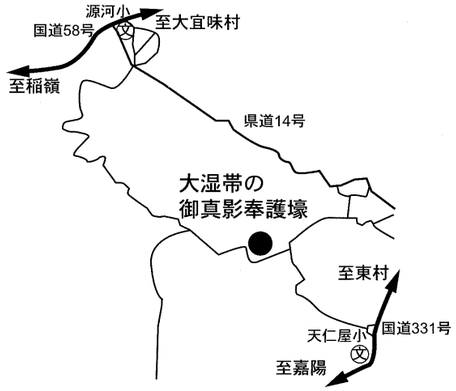
内部に残る瓶

（参考文献）
防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書　沖縄方面陸軍作戦』朝雲新聞社　1968年
本部町史編集委員会『本部町史　資料編Ⅰ』本部町役場　1979年

第６節．名護市

a. 大湿帯の御真影奉護壕

所在地：名護市源河大湿帯
立地（標高）：山腹（標高210m）
形態：人工壕
種別：御真影奉護壕
現状：こうもりの生息地となっている
保存状況：以前地震観測器が設置されていた
築造者：不明
築造年月日：不明
戦時中の使用状況：御真影の奉護壕として
主な遺構：坑木跡

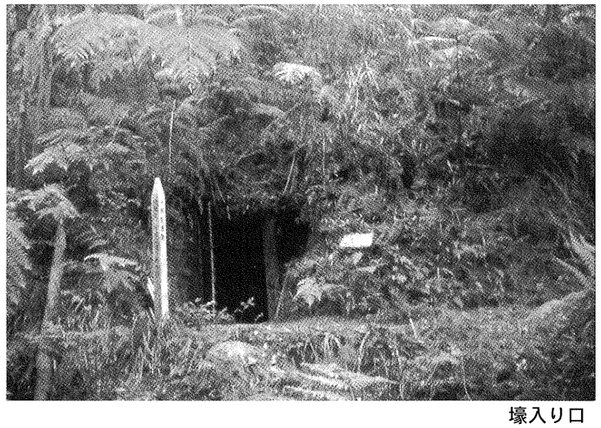


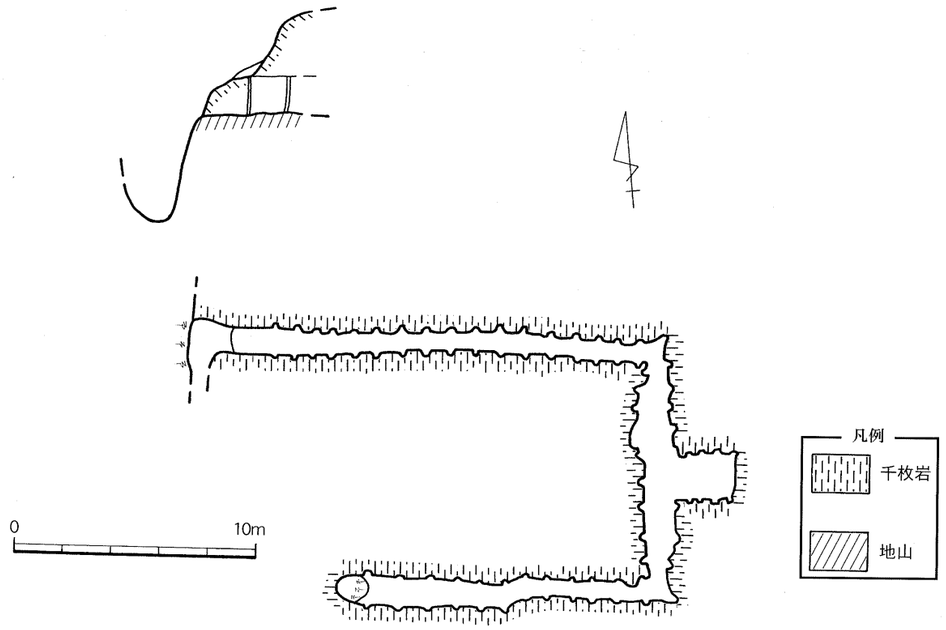
概　要

名護市源河の大湿帯、源河・有銘林道沿いに所在する。沖縄戦の最中、時局の緊迫化に伴って奉護所設置の声が高まり、1945年１月に国頭郡羽地村（現、名護市）源河の大湿帯部落にあった沖縄県有林事務所に沖縄本島及び周辺離島の御真影が奉遷された。しかし、県有林事務所には堅固な奉安施設がないため、女子師範学校の大奉安庫を稲嶺国民学校に移し、同年２月中旬から大湿帯分の他、未奉遷の学校からも御真影を奉遷することになった。さらに、３月には稲嶺国民学校一帯にも米軍の攻撃が迫ってきたため、同月８日、９日の２日間をかけて再び大湿帯の県有林事務所に奉遷された。その際、事務所近傍にある県有林神社（現存、山をつかさどる大山祇尊を祀る）の東側斜面（現在では、林道を挟む道向こう側）の中腹に構築されたのが奉護壕である。３月23日から開始された米軍上陸に伴う艦砲射撃の後は、毎早朝に御真影を奉護壕に移し、日没に事務所奉安室に安置したようだ。４月８日頃、米軍の進撃が確認されたため、天皇・皇后を除く明治天皇や昭憲皇太后等の御真影を焼却、６月下旬にいたって南部の戦況が不利なことが伝わったため、30日、宮城遙拝等の儀式を執り行ったあと、天皇・皇后の御真影を焼却したという。

林道入り口

林道から脇道を５分ほど歩くと道は途切れ、そこの右手に壕は存在する。一帯の地形は「V」の字型をなし、谷底からの斜距離4.5mほどの中腹に入り口はある。壕は出入り口が２カ所設けられていると思われる「コ」の字型をなし、先端部は再び脇道に出ると予想されるが、土砂で埋まり確認できない。入り口には鉄パイプの扉があり、続いて坑木丸太１本と角柱２本ずつが坑道の左右に並ぶ。入り口の幅は110㎝、高さ180㎝で、坑道全長は


壕入り口



第10図　奉安壕平面図及び壕口断面図

約40mを測る。坑道の壁面には左右合わせて50個弱の坑木をはめ込んだ跡が約60㎝間隔で並んでいる。壕は岩盤（千枚岩）をくり抜いて作られ、壁や天井に無数のツルハシの跡が残る。

壕の最奥中央部には幅1.7m、奥行き2.4mの奉安室とされる施設があり、坑木のハメ跡が左右に４カ所ずつある。天井や壁面には御真影を焼いた際のものと思われるススが今でも付着している。

ちなみに、壕は天然記念物「オキナワコキガシラコウモリ」の生息地にもなっている。

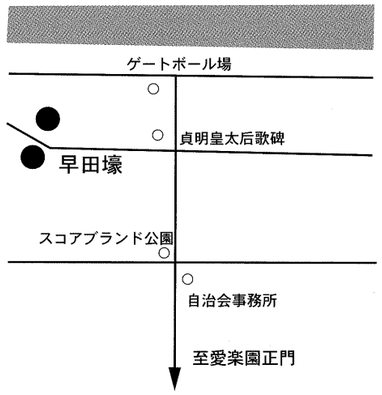
坑道内部

奉安室

（参考文献）
沖縄市町村長会『地方自治七周年記念誌』沖縄市長村長会　1995年
安仁屋政昭『沖縄戦のはなし』沖縄文化社　1997年
上勢頭誌編集委員会『上勢頭誌中巻通史編（Ⅱ）』旧字上勢頭郷友会　1993年
沖縄県教育委員会『沖縄県史別巻沖縄近代史辞典』沖縄県教育委員会　1977年

b. 早田壕（はやたごう）

所在地：名護市済井出1192
立地（標高）：丘陵（標高３m）
形態：人工壕
種別：その他
現状：当時の壕の半数はなくなり、現存している物も、壕口が削られるなどしているが、内部は比較的良好。平和学習に活用されている。
保存状況：壕口に柵、案内板が設置されている。鍵を開けて入壕できる壕もある。
築造者：入園者・職員
築造年月日：1944年７月～1945年３月
戦時中の使用状況：入園者・職員が避難した
主な遺構：避難壕、内部の柵



概　要

扉の設置された壕入り口

名護市から北へ約10kmの所にある屋我地（やがじ）島の北端に、国立ハンセン病療養所沖縄愛楽園が所在する。園内の中央には、高さ20ｍほどの丘が南北に連なっており、この丘のいたるところに、沖縄戦当時構築された避難壕が今も残っている。壕口をはっきりと確認できるのは14カ所、一部残存している物や埋戻し・落盤でかろうじて口が確認できるものを含めると、全部で約24カ所に及ぶ。

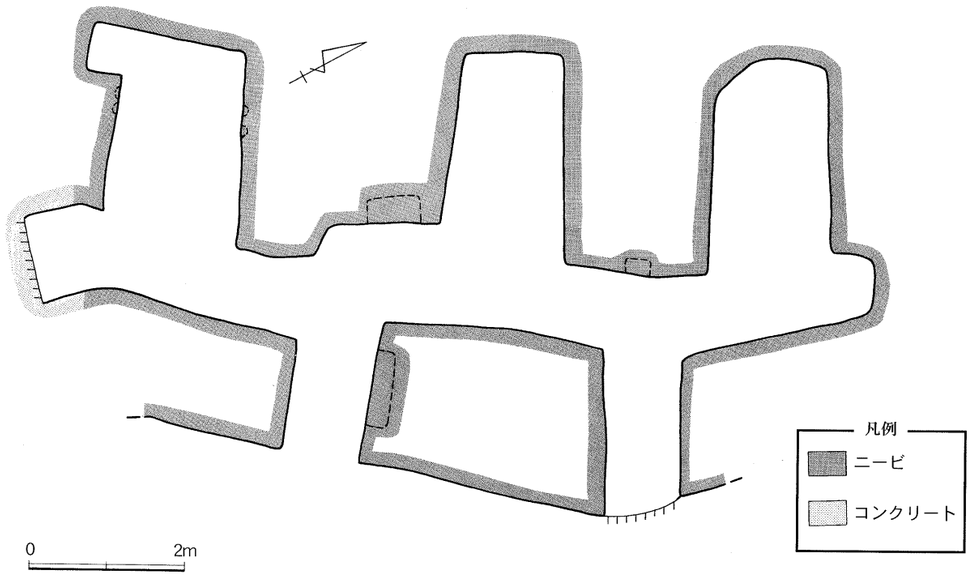
これらの避難壕は1944年３月に愛楽園に就任した第２代園長早田皓（はやたひろし）の名にちなんで「早田壕」と呼ばれている。早田は、当時すでに出来上がっていた縦穴避難壕では、米軍による波状攻撃（はじょうこうげき）に耐えられないと考え、園内の砂岩（さがん）でできた丘に横穴壕を掘ることを指示した。壕の設計は早田が自ら行い、「働かざる者喰うべからず」の号令のもと、比較的健康な入園者を掘削作業にかり出したという。壕の構造は、まず幅90㎝・高さ1.5mの出入り口になる穴を４m間隔で丘に掘り込み、これらの穴を奥で幅90㎝の通路で結び、その通路の奥の方（２つの出入り口の中間）に２m四方の部屋を設けるというものであった。丘の反対側へ貫通する壕も構築した。壕口を多くすることで900名を越える入園者が短時間で避難できるよう工夫し、壕内に部屋を設けて長時間の避難を可能にした。

説明板

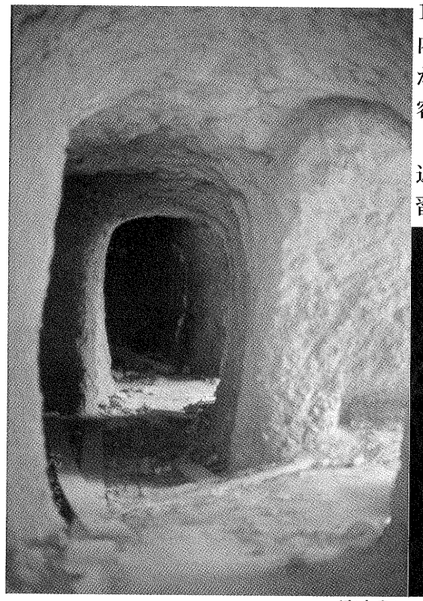
十・十空襲で愛楽園は壊滅的な被害を受けるが、壕構築が進んでいたため被弾による死者はおらず、沖縄戦終結までででも米軍の機銃掃射による死者１名に止まった。

しかし、ハンセン病を患っている入園者は、末梢神経（まっしょうしんけい）が麻痺している者が多いため、掘削作業の過程で体に傷を負っても気付かず、病状を悪化させる結果を招いた。また、1945年に入ると断続的に空襲が繰り返されたため、不衛生な壕内での生活や栄養不足が原因で死者が続出した。1944年10月から1945年12月までの死者は288名を数える。これは、当時収容されていた入園者の約３割にあたる。

戦後の土地改良で、園内の多くの丘が潰され当時の壕も半数近くは消えたが、現在残っている壕は、訪れる人々の沖縄戦学習に活用されている。



第11図　早田壕平面図


壕内部

掘削の跡

(参考文献)
早田皓「戦時と敗戦直後の沖縄のらい～沖縄本島と愛楽園の周辺」日本癩学会『レプラ』42巻２号　1973年
上原信雄『沖縄救癩史』（財）沖縄らい予防協会　1964年
沖縄県教育委員会編『沖縄県史10巻沖縄戦記録２』沖縄県教育委員会　1974年
沖縄愛楽園自治会資料室所蔵「昭和19年６月～昭和22年８月　翼賛会日誌　人事部」

沖縄愛楽園の戦争遺跡

1938年11月に「国頭愛楽園」として開園した現沖縄愛楽園（以下、愛楽園とする）は、ハンセン病療養所として60余年の歴史を有する。この間愛楽園は、沖縄戦で壊滅的な被害を受けたのち、米軍統治下おける園の運営を経て、復帰とともに厚生省の管轄下へ戻るという変遷をたどった。園内は土地改良が進み、専有面積は開園当初の２倍以上となり、いたるところにあった丘は切り崩され平坦地になっているが、現在でも園内各所に沖縄戦の傷痕を見ることが出来る。

愛楽園に残る沖縄戦当時の遺跡は「早田壕」に止まらない。おびただしい数の弾痕が残る給水タンクや職員居住地域の壁、波よけの壁がある。これは、愛楽園が米軍による猛攻撃を受けた証である。当時の園長早田皓による戦後の記録には「爆弾約600、ロケット砲約400、艦砲約100、22㎜機銃弾約10万発の洗礼を受けた」とあるが、米軍が執拗に愛楽園を攻撃した理由は定かではない。一説には、愛楽園の対岸にある運天港に、当時は海軍部隊が配置されていたため、整然と並ぶ園の病棟が兵舎と間違われたためではないかと言われている。1945年４月21日（22日・23日説あり）、米軍は、愛楽園内に侵攻して初めてハンセン病療養所と知り、空爆をやめさせたとのことである。

弾痕の残る水タンク

当時の愛楽園には収容可能人数の２倍以上の入園者が収容されていた。1944年３月、沖縄に第32軍が創設され、在野のハンセン病患者を強制的に愛楽園へ収容する動きがとられたためである。急ピッチで地上戦準備が進められる中、民家までもが兵舎として徴発されたため、住民と混在する兵士にハンセン病が感染するのを気にした軍当局の組織的な動きであったと思われる。収容設備の整わない園内では、「翼賛会」なる自治会組織が発足し、入園者総動員の戦時体制強化がはかられた。

愛楽園自治会のデータによると、現在の入園者は約380名、そのうち戦前からの入園者は６割を越えるという。現在愛楽園は、生存者の沖縄戦体験談を聞くとともに、自らの意志で戦場彷徨すらできなかった、ハンセン病患者に対する人権侵害の歴史を学ぶ場にもなっている。

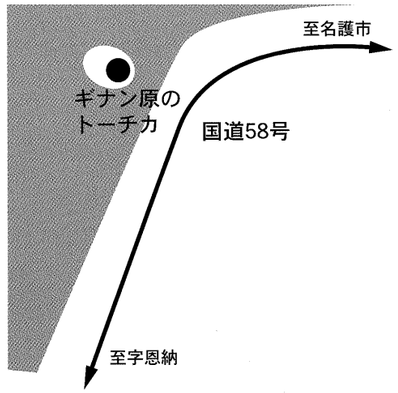
弾痕の残る塀

（参考文献）
早田皓「戦時と敗戦直後の沖縄のらい～沖縄本島と愛楽園の周辺」日本癩学会『レプラ』42巻２号　1973年
上原信雄『沖縄救癩史』（財）沖縄らい予防協会　1964年
沖縄県教育委員会編『沖縄県史10巻沖縄戦記録２』沖縄県教育委員会　1974年
沖縄愛楽園自治会資料室所蔵「昭和19年６月～昭和22年８月　翼賛会日誌　人事部」

第７節．恩納村

a. ギナン原（ばる）のトーチカ

所在地：恩納村瀬良垣1682
立地（標高）：島（0m）
形態：自然壕、一部構築物
種別：トーチカ
現状：天井部分の土石の一部が落下している
　が比較的良好
保存状況：放置されている
築造者：不明
築造年月日：不明
戦時中の使用状況：不明
主な遺構：銃眼



概　要

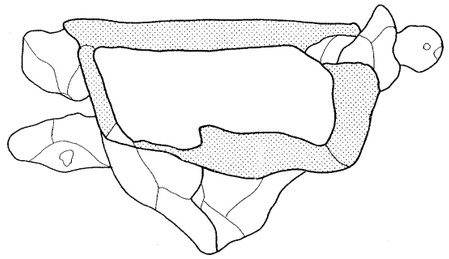
このトーチカは、瀬良垣（せらがき）ビーチの南西約700mに位置する小島の一角に構築されている。地元でギナン原と呼ばれる地域の、沖合約70mに小島があることからこのように呼ばれており、干潮時には島まで歩いてわたることができる。一周約400mのこの島に、トーチカ以外陣地らしい構築物はなく、古墓（こぼ）が点在している。このトーチカの築造者は不明である。

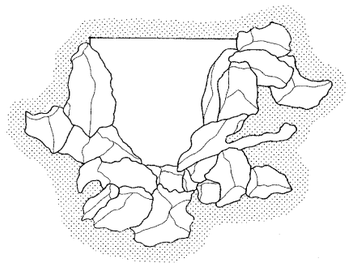
遠景

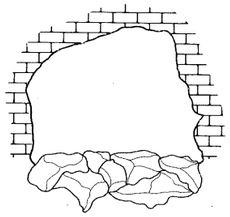
1944年８月以降この地には第24師団が駐屯しているが、指揮下の３個連隊は読谷・嘉手納・具志川に中心が置かれており、瀬良垣における配備については不明な点が多い。当時国民学校の生徒だった當山安信（とうやまあんしん）氏は「山部隊の機関銃隊がいて本部は恩納部落にあった。瀬良垣には７～８名の兵隊が駐屯していた。瀬良垣から恩納国民学校までの登下校の際、陣地構築の様子をよく見た」と語る。そして、日本軍が多く壕を構築したのは恩納岳中腹あたりであり、このトーチカについては、いつ頃誰が築造したか、全くわからないという。

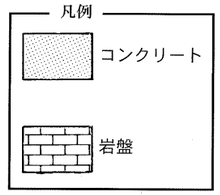
トーチカ近景

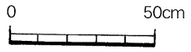
トーチカは、寄り合ったいくつかの岩の前面に、珊瑚の死骸を積み上げコンクリートで固めて壁を作り、この過程の中で２つの銃眼（第12図１,２）と出入り口らしき１つの口（同３）を開け築造したと考えられる。内部は３畳ほどの広さがあり、銃眼の反対側には連絡通路のようなすき間があいている。天井は、銃眼のある前面部分はコンクリートを使用し


銃眼　1


銃眼　2


壕口　3

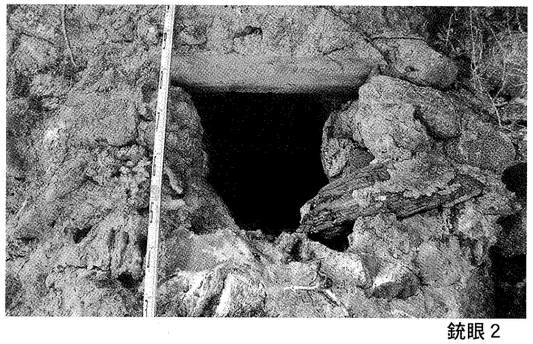


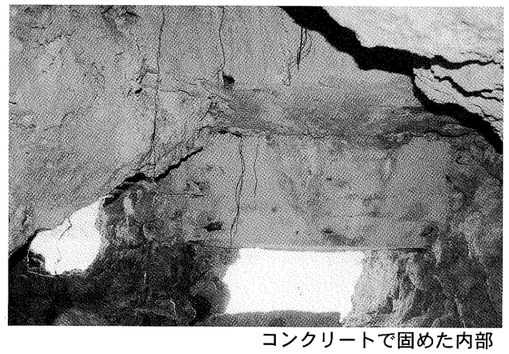


第12図　銃眼1,2及び壕口立面図

て整形しているが、それ以外の部分は土と草木で塞（ふさ）いでいる。攻撃を受けた跡は見られず、残存状況は良好である。

トーチカ内部に入ると、２つの銃眼から国道58号線を見ることができる。海岸線の防備としては、銃眼の向きが海上を向いていないため不自然である。米軍が沿岸道を北上することを予測して構築された壕であるのか、目的は不明である。

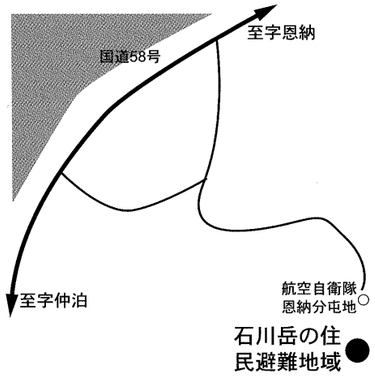

銃眼２


コンクリートで固めた内部

（参考文献）
防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書　沖縄方面陸軍作戦』朝雲新聞社　1968年
（証言者）
當山安信さん

b. 石川岳の住民避難地域

所在地：恩納村字冨着1043-63
立地（標高）：山麓（約130m）
形態：人工壕他
種別：住民避難
現状：当時の状況のまま放置されている
保存状況：石川少年自然の家の散策道として
　　周辺は整備されている
築造者：石川市字石川住民
築造年月日：1945年３月
戦時中の使用状況：字石川の住民が避難地とした
主な遺構：茅葺き避難小屋跡、避難壕



概　要

石川岳の住民避難地は、「石川少年自然の家」の石川岳周辺散策道沿いに所在する。石川岳は山頂から尾根伝いに南側は石川市、北東側は金武町、北西側は恩納村と市町村境になっているが、住民避難地域は石川岳の北西側に位置し地籍上は恩納村冨着幸地原となっている。谷底の小川沿いのこの地域のことを川原小（カーラングワァー）と地元では呼称している。

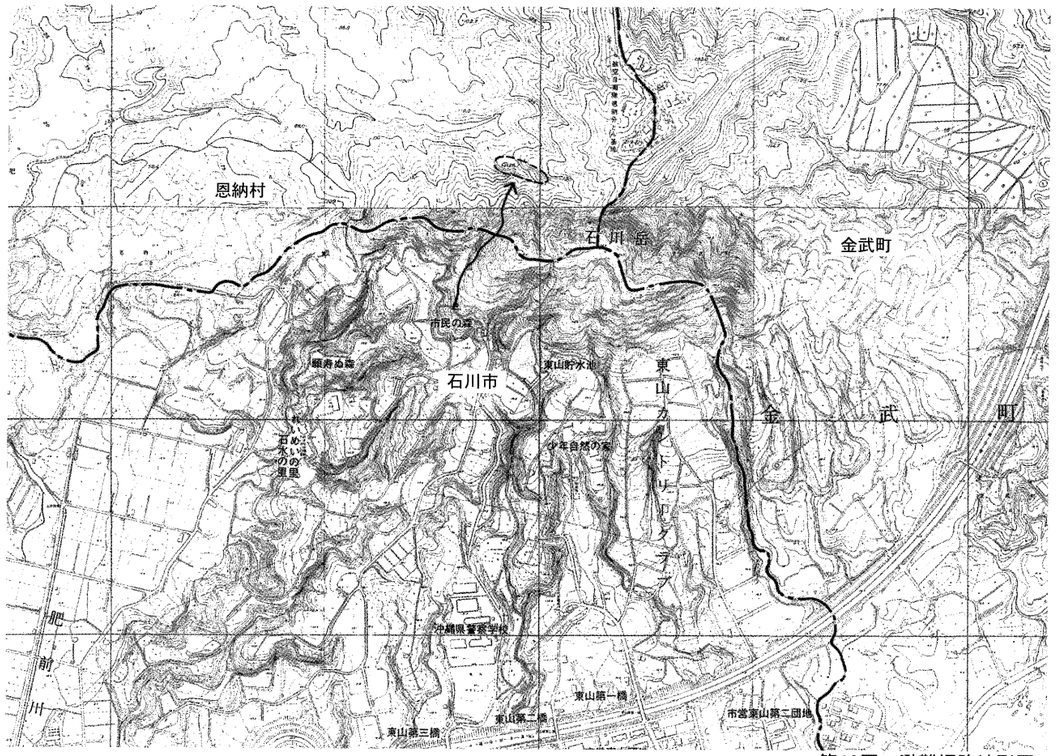
「住民避難地」と名称していることについては、避難地の主な遺構が茅葺き避難小屋跡であり、避難壕は確認できるもので２基のみであることから避難壕群という通常の名称を使用しないことにした。

遺構が、茅葺き避難小屋跡であることが確認できたのは、当時そこに避難していた方の証言によるものである。次頁写真の避難小屋跡は、平面において約220㎝×240㎝の長方形を呈する遺構である。表土には雑草が覆い茂り現状では支柱穴、排水溝等の跡は確認できない。表土から立ち上がりの最長高まで約80㎝を測る。周辺表土から砥部焼（スンカンマカイ）の破片が３片得られた。

このような避難小屋跡だと思われる遺構が現在確認されているだけで４基

避難地域周辺

半分埋まった壕口



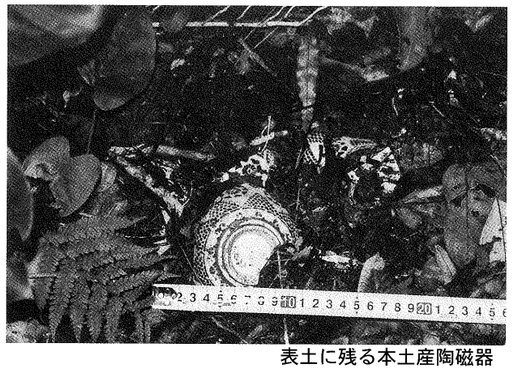
第13図　避難経路地形図

ある。それぞれ同程度の規模を有し、３畳半ほどの広さであることから、家族用の小規模な避難小屋であったことが想定される。

また、避難壕については、壕口の落盤が激しく現状では入壕も不可能であり、その規模を確認することは出来ない。写真の壕の２m程真西に同様の壕が見られるが、さらに落盤が激しく現状として良好であるとは言えない。

この住民避難地には字石川の住民が避難していた。1945年３月23日、米軍機の激しい空襲が石川の空を覆った。その日を境としてこの地に避難したといわれている。

避難小屋基礎跡

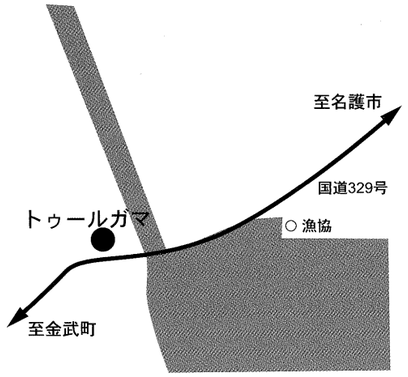

表土に残る本土産陶磁器

(参考文献)
伊波信光 『石川市史』 石川市役所 1989年
伊波静子 「遠い少女」 『文化の窓 №17』沖縄市文化協会 1995年
(証言者)
伊波静子さん

第８節．宜野座村

a. トゥールガマ

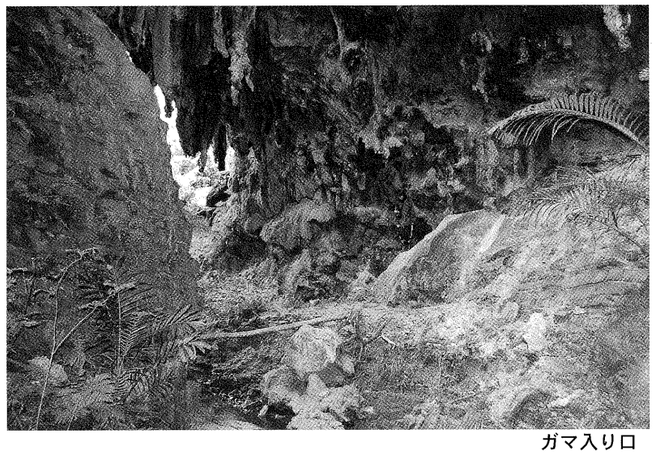
所在地：宜野座村字漢那2135他
立地（標高）：丘陵中腹～麓（約25m）
形態：自然壕
種別：住民避難
現状：壕口部に一部土砂流入がみられるが比較的良好
保存状況：雑林の中にあり未整備
築造者：不明
築造年月日：不明
戦時中の使用状況：字漢那（城原）の住民が避難。その後中南部の避難民が使用した
主な遺構：埋土により詳細不明



概　要

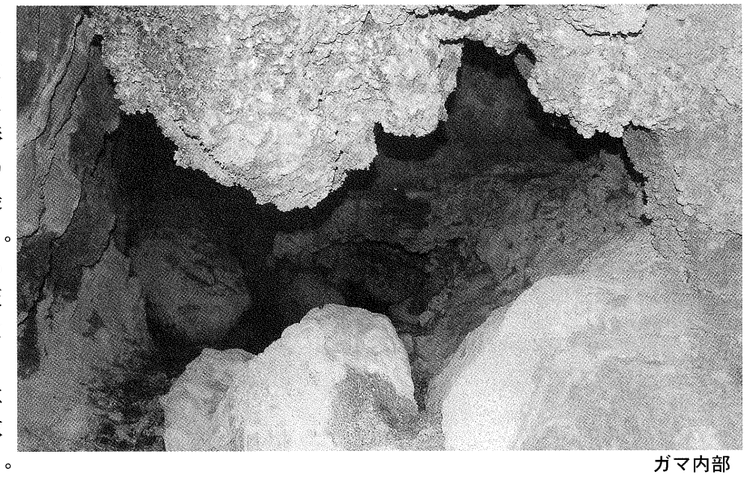
国道329号線を金武町から宜野座村へ向けて北上し、漢那橋を渡る手前の丘陵中腹にトゥールガマが所在する。

この丘陵はグシク原（ばる）石灰岩地帯と呼ばれ、金武町北部より宜野座村へ向けての東海岸側に断続的に延びる石灰岩地帯である。グシク原石灰岩地帯は南北に約400m、東西に250m程の範囲にわたる。平均標高30m前後のこの丘陵地において厚い石灰岩層を確認することができる。

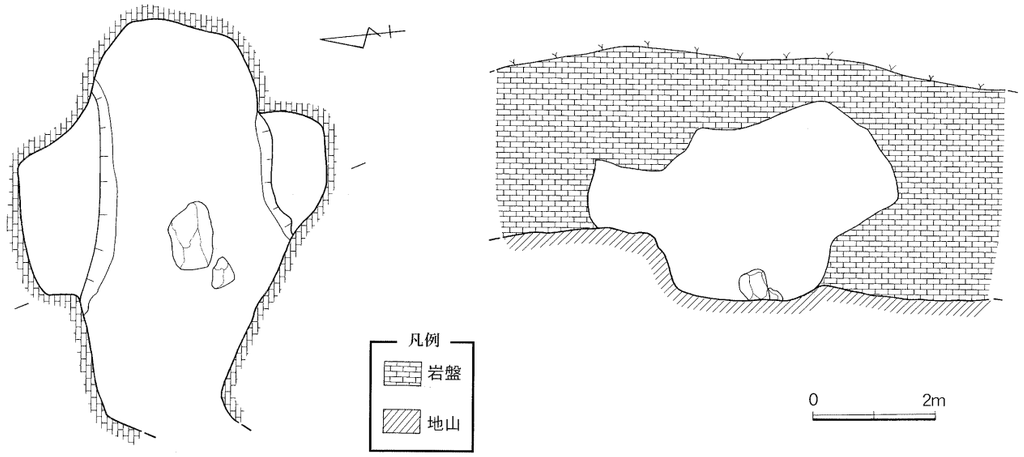

ガマ入り口

石灰岩地帯の南西端にトゥールガマの口が開いている。このガマは城原（ぐしくばる）洞穴遺跡と呼ばれ遺物散布地（時代不明）として周知されている。

大雨になると小川が形成されると思われる谷間の窪地に石灰岩露頭（ろとう）地があり、下流にぶつかるため、橋状（きょうじょう）洞穴を形成している。洞穴の現状での奥行きは約７ｍで、高さは最長部で２ｍ程の規模である。埋土を除けば更に広がりをもつ遺構が現れると思うが、天井の石灰岩岩盤の自然崩壊により土砂は増える傾向にある。


ガマ内部

トゥールガマの所在地籍は字漢那となっているが、行政区でいうと城原に位置する。

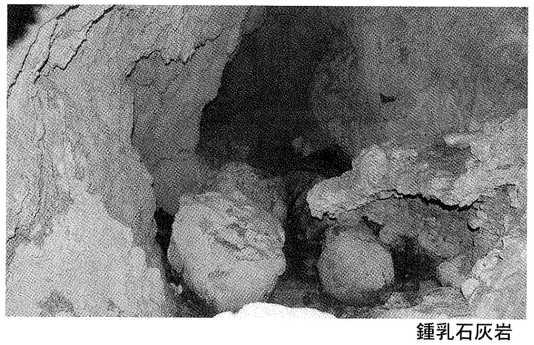


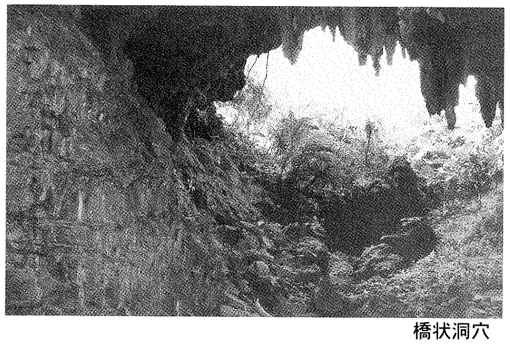
第14図　トゥールガマ平面図及び断面図

廃藩置県後、グシク原の丘陵地に寄留士族（きりゅうしぞく）が移住、散村集落を形成していた。1939年、沖縄県は食糧増産という国策に基づき自作農創設未開地開発事業を旧金武村で開始した。城原では69戸の入植応募があり事業が進められたが、沖縄戦により事業は途中で中断することになる。

トゥールガマを含むグシク原石灰岩地帯には、当初城原の住民が避難していたが、1945年３月以降、住民はさらに山中である安仁堂（現キャンプハンセン地内）へ避難した。

その後、ここへ避難してきたのは中南部の避難民達であったが、その中でも旧南風原村からの避難民が多くいた。避難民は1945年４月５日頃に米軍に保護されて、古知屋（こちや）（現宜野座村字松田）の収容所に収容された。


鍾乳石灰岩

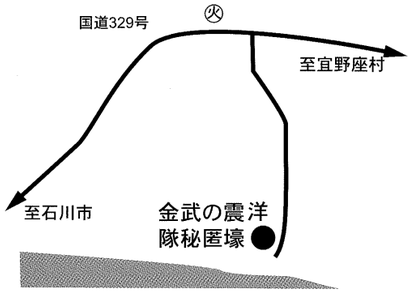

橋状洞穴

（参考文献）
宜野座村教育委員会『宜野座村乃文化財Ⅰ－遺跡詳細分布調査報告書－』宜野座村教育委員会　1984年
宜野座村誌編集委員会『宜野座村誌第二巻資料編１移民・開墾戦争体験』宜野座村役場　1987年

第９節．金武町

a. 金武の震洋隊秘匿壕

所在地：金町字金武4359番地他
立地（標高）：原野（20～30m）
形態：人工壕
種別：陣地
現状：壕口の一部と他地域に所在した壕は破壊されたが現存部分は良好
保存状況：発電所敷地内に放置されている
築造者：第22震洋隊と地元住民
築造年月日：1945年１月末から
戦時中の使用状況：震洋の秘匿壕
主な遺構：秘匿壕



概　要

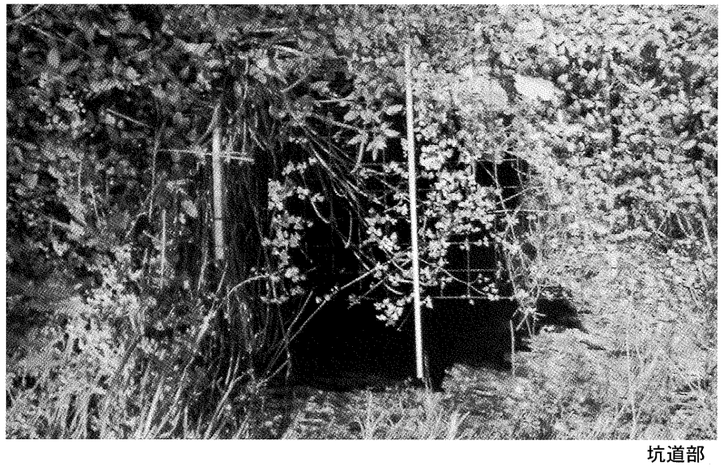
金武の震洋秘匿壕は、金武発電所近くのメーヌ浜に所在する。沖縄戦当時金武町には第22震洋隊と第42震洋隊が配備された。震洋隊は震洋という船首に250kgの爆装をした船を使い敵艦船への特攻を行う部隊であった。

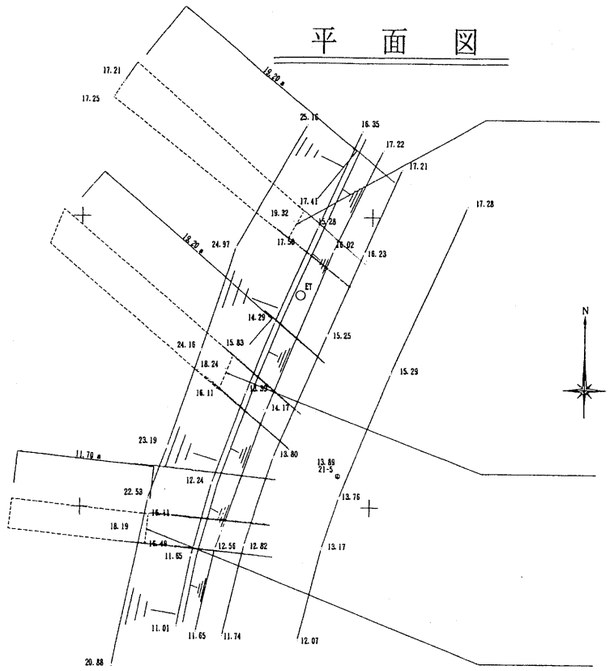
現在確認できる秘匿壕は３ヵ所のみとなっている。壕の規模は幅約３m、高さ約２～３mである。奥行きに関しては約11mのもが１カ所、約20mのものが２カ所残っている。そのいずれもが第22震洋隊の秘匿壕である。

第22震洋隊は1944年10月25日、長崎県で編成された。翌年１月12日に鹿児島県から豊栄丸で出向し、23日那覇港へ上陸する。金武町へ到着したのは翌日になってからであった。金武町へ到着してからはさまざまな施設を接収し部隊の施設として使用しながら震洋の秘匿壕の構築に取り掛かった。秘匿壕の構築には大宜味出身の防衛隊や地元の婦女子青年団などが動員されて作業が進められた。その間、震洋はアダン林の中などに秘匿されていたようである。

1945年３月27日、第22震洋

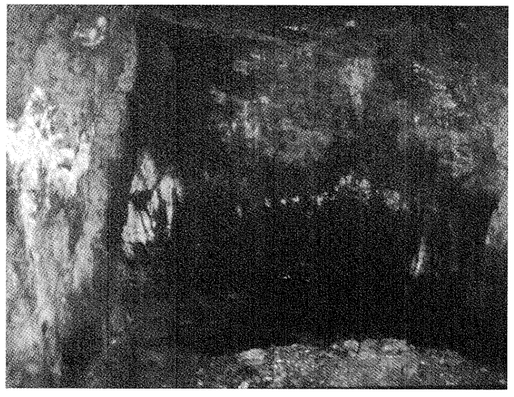
遠景

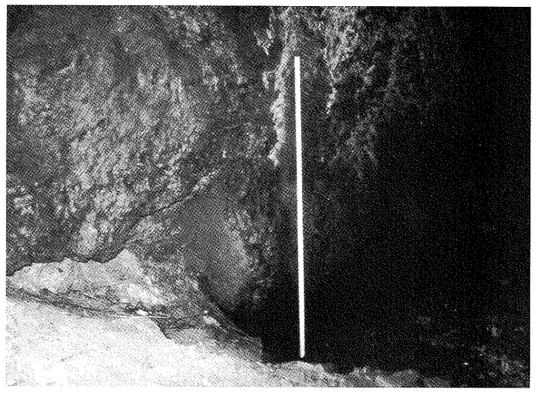

坑道部



第15図　秘匿壕平面図

隊に第１回目の出撃命令が沖縄根拠地隊司令部から下された。この時には６隻出撃するが敵影を発見できずに帰還することとなる。３月30日の出撃の時も12隻出撃するが敵影を発見できずに帰還した。この時は夜明けが近かったために震洋を秘匿壕に格納せずにアダンの葉を被せて秘匿していたため、空襲により震洋12隻を焼失してしまう。４月３日には５隻出撃し、１隻特攻を成功させるが他は帰還する。しかし、米軍の攻撃により基地隊は名嘉真岳へ撤退しており、震洋および秘匿壕は放棄されることとなる。その後、第22震洋隊は、1945年８月28日下山、中川において武装解除を行った。



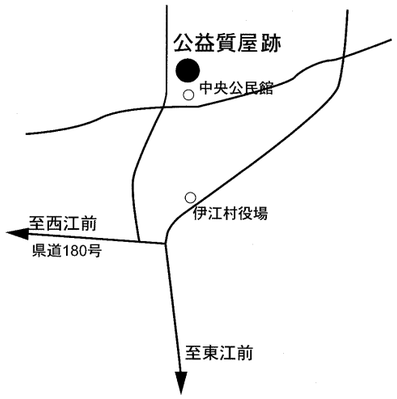


(参考文献)
金武町史編さん委員会『金武町史　第二巻　戦争・本編』金武町教育委員会　2002年
金武町史編さん委員会『金武町史　第二巻　戦争・証言編』金武町教育委員会　2002年

第10節．伊江村

a. 公益質屋跡（こうえきしちやあと）

所在地：伊江村字東江上75
立地（標高）：台地（約55m）
形態：建造物
種別：その他
現状：平和学習に利用されている
保存状況：1977年12月14日村史跡指定
築造者：国頭郡役所建築技手他
築造年月日：1929年起工
戦時中の使用状況：米軍砲弾の的となった
主な遺構：



概　要

公益質屋とは、昭和初期に市町村または社会福祉法人によって設立された庶民金融機関である。

伊江村の公益質屋は1929年に国頭郡役所建築技手らによって起工された。伊江村役場が実質的に質屋の管理運営を行うため、役場（現中央公民館）の東側に隣接して建設する計画が進められた。

設置されている説明版

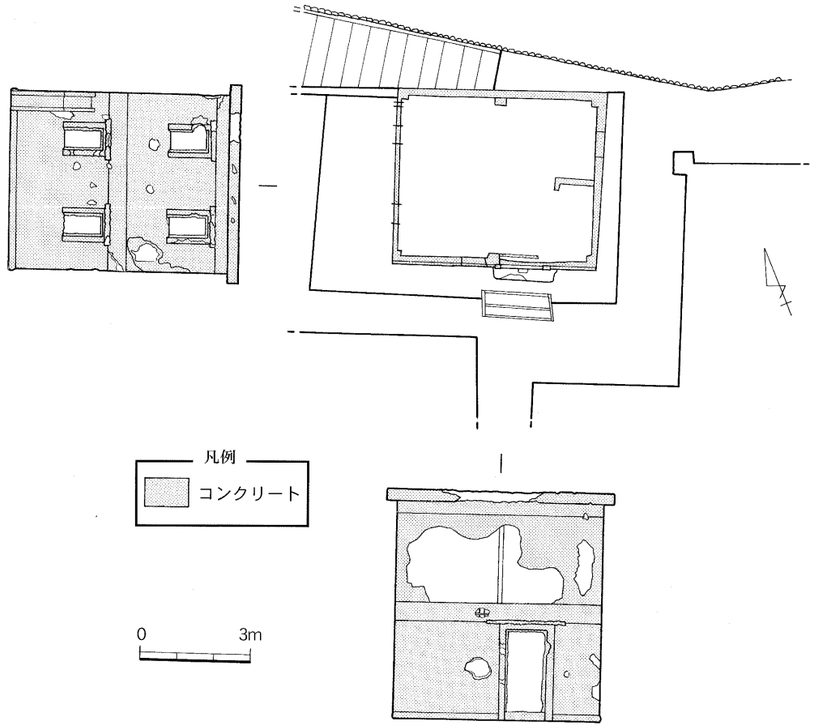
質屋本体は、建て面積約26.4㎡の長方形を呈し、１階・２階部ともに高さ約３ｍの鉄筋コンクリート造りである。公益質屋は、公益質屋法及びその関連法規に基づき、質物の管理・保存のため耐火性の強い構造であることが求められていたため、鉄筋コンクリート造りという強固な構造となった。

主に１階は質屋の事務室として使用し、質物の保管・陳列は２階に設けた。階の往復には入口直ぐ右の仮設式階段を利用した。また、窓は採光・通風等を考慮し、隣接する役場と反対の西側面を中心に設けられている。

1945年４月１日、沖縄本島に上陸した米軍は、同月16日、伊江島上陸作戦を開始した。島には伊江島地区隊（隊長井川正少佐）を中心に約２700名の隊員が存し、島から疎開に行かなかった村民約3000人も残留していた。守備隊は城山（伊江島タッチュー）に陣地壕を構築し、６日間に及ぶ激しい攻防戦が展開されたが、守備隊は壊滅、日本側戦死者3500余名の内、その多くは伊江島住民であった。

正面

米軍が城山を目指す道程において、



第16図　公益質屋跡平面図及び平面図

西南西側から島中央部に向けて進軍してきているが、その侵攻方向に公益質屋があるため、多数の砲弾が質屋に撃ち込まれた。弾痕の方角、質屋の外壁面による弾痕数の差異から考察すると、そのほとんどが米軍の砲弾であったことがわかる。

終戦直後の公益質屋は、全壊した学校校舎の代わりに、伊江中学校の教室としても利用された。

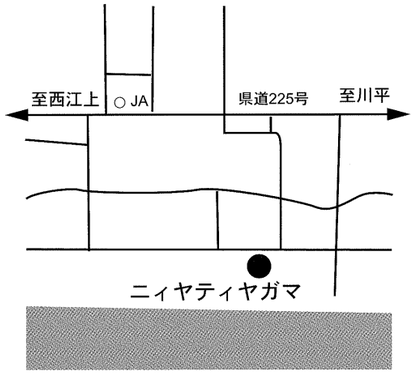
最近置かれた御殿型厨子

内部から見る窓枠

（参考文献）
沖縄県『沖縄県史 第10巻各論編９ 沖縄戦記録二』沖縄県　1975年
伊江村史編集委員会『伊江村史 下巻』伊江村役場　1980年

b. ニィヤティヤガマ

所在地：伊江村字川平1355番地
立地（標高）：海岸線（0m）
形態：自然壕
種別：住民避難壕
現状：落盤や崩落等はなく極めて良好である
保存状況：伊江島の観光地として階段や掲示板、トイレ等が設置されている。また、修学旅行等の平和学習にも活用されている
築造年月日：不明
主な遺構：主に空襲時の避難場所として使用された海食洞



概　要

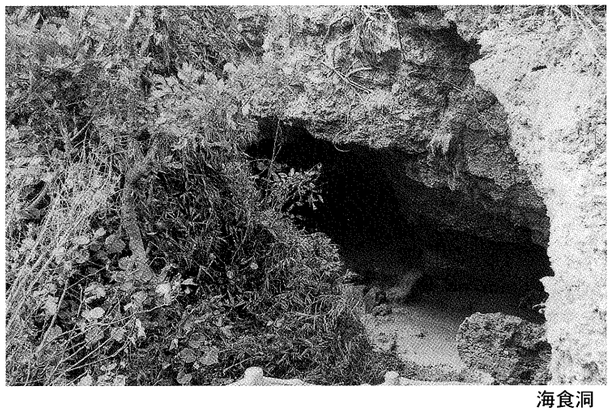
伊江村川平集落西側海岸にニィヤティヤガマがある。全長90mの海食洞であるニィヤティヤガマは昔から子宝に恵まれない女性がこの洞窟を訪れ洞窟内にある力石を持ち上げるとその年から願いがかなえられるという伝説のある洞穴である。

伊江島には日本軍の建設した飛行場があり、1944年の十・十空襲や米軍の上陸直前の1945年３月末の空襲などでも攻撃を受けた。この時にニィヤティヤガマには飛行場設営をしていた兵隊や徴用人夫が多数避難してきていた。しかし、ニィヤティヤガマには生活の場とはならず空襲の度に飛行場設営をしていた兵隊や徴用人夫などと周辺の人々が避難をする場所として使われていたようである。

1945年４月１日に沖縄本島に上陸した米軍は、４月16日に伊江島に上陸した。伊江島での戦闘はタッチューと呼ばれる城山を中心に兵隊や地元住民を配置し爆雷、手榴弾、槍などで上陸してきた米軍に対抗したのである。米軍上陸後はアハシャガマのように地元住民が集団死を行った場所も多数ある。

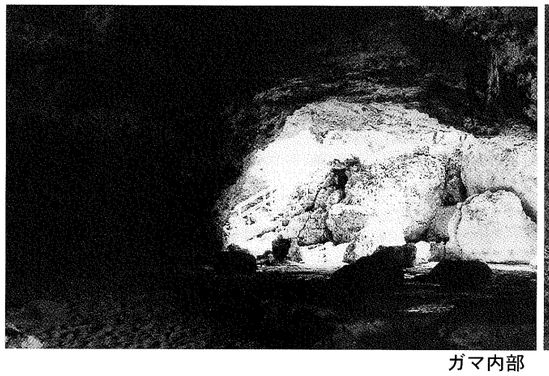
ニィヤティヤガマに米軍上陸後避難していた人々がいたかは不明である。しかし、

入り口までのスロープ


海食洞

第17図　ニィヤティヤガマ周辺遺跡分布図

米軍の空襲時に、海上からは大きな岩があり、地上からは崖下にあるために戦中村民の中で防空壕に利用され、多くの命を戦火からまもったことから千人ガマともいわれている。

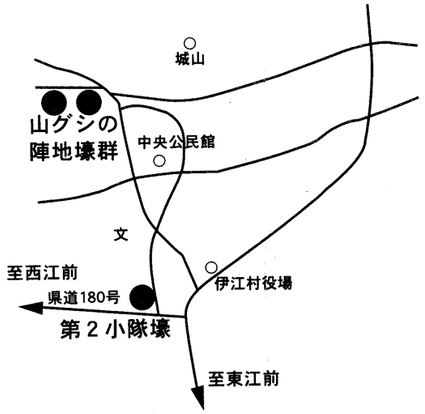

ガマ内部

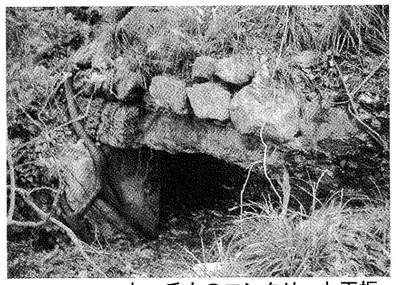
戦後設置された拝所

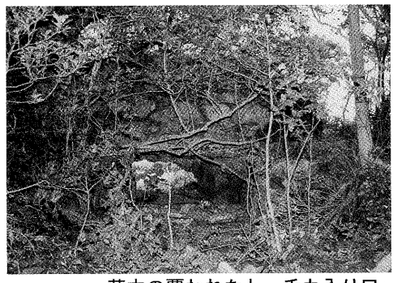
(参考文献)
伊江村婦人会『子ども達への約束』伊江村婦人会　1985年
滝本匠『戦跡は語る9』琉球新報　1998年6月26日

c. 独立混成第44旅団第2歩兵隊第3中隊関連の壕

(山グシの陣地壕群)
所在地：伊江村字東江上ほか
立地（標高）：丘陵麓（65m）
形態：（トーチカ）構築物＋自然壕（陣地壕）
　人工壕
種別：陣地
現状：（トーチカ）天井部分が風化により崩れ
　かけているが概ね良好（陣地壕）概ね良好
保存状況：放置されている
築造者：不明
築造年月日：不明
戦時中の使用状況：独立混成第44旅団第２歩兵
　隊第３中隊が使用したと思われる
主な遺構：トーチカ、陣地壕




トーチカのコンクリート天板


草木の覆われたトーチカ入り口

(川平の第３中隊第２小隊壕)
所在地：伊江村字川平54
立地（標高）：丘陵中腹（約30m）
形態：人工壕
種別：陣地
現状：一部外側から埋め戻されているが、比較的良好。壕奥部は
　約50㎝の水が溜まっている
保存状況：入り口がコンクリートで整備され鍵付きの鉄柵と階段
　が設置されている。壕内は照明が設置されている
築造者：不明
築造年月日：1945年１月
戦時中の使用状況：独立混成第44旅団第２歩兵隊第３中隊第２小
　隊が使用した
主な遺構：陣地壕

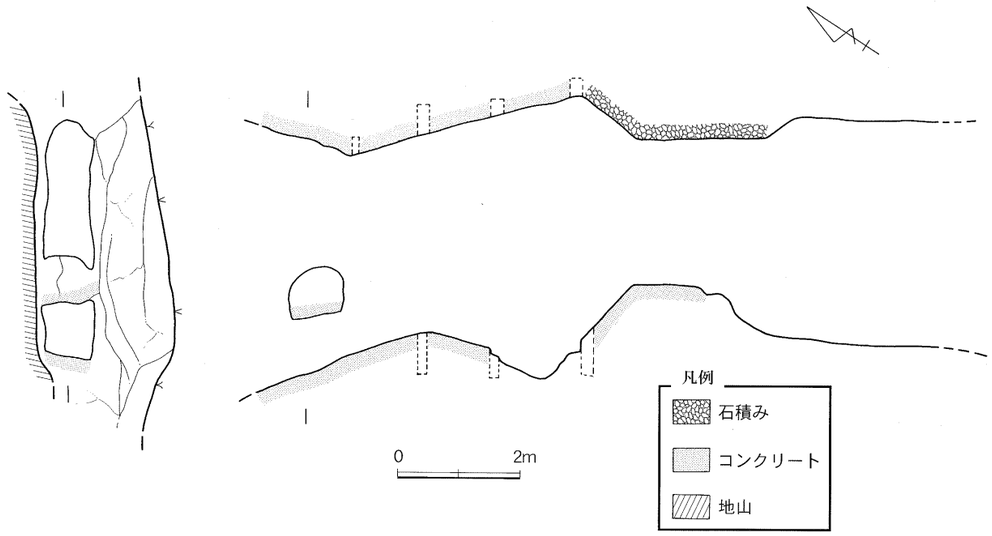
概　要

米軍が「血塗られた丘」と呼んだ城山（伊江島タッチュー）は、文字通り北部離島における最大の激戦場であった。独混第44旅団の３個中隊からなる第２歩兵大隊が配置され、速射砲１個中隊と独立機関銃中隊が併置されていた。地元からの防衛隊や少年義勇隊にあわせ、婦女子までも救護班や炊事班として動員されていた。島民の約半数は、本島などへ疎開していたが、最後まで闘い抜くという玉砕作戦がとられたため、軍人の2,000名と民間人1,500名のあわせて3,500名が戦没した。

城山周辺には、縦横に連なる地下陣地が築かれ、３群のトーチカ群が取り囲み全山が砲座と化していた。第１中隊は山の北側に、第２中隊と第３中隊は南側に、それぞれ東西に配置されていた。今回調査できた陣地壕群は、第３中隊が配置されていたと思われる川平区と東江上区に存在した。1983年からの収骨作業の後、警察の警備上の都合により陣地壕の多くは埋められてしまったため、現在入れる壕はほとんど残っていない。

(山グシの陣地壕群)

山グシとは、城山とこの地域との間が、位置関係上池などを掘って地域を切らないとよくない土地だと



第18図　山グシの陣地壕平面図及び壕口立面図

いう意味で呼び慣わされたことからついた名称だそうである。現在も灌漑用水が掘られている。

公益質屋跡から城山へ登って行き、左へ折れるとがっしりとコンクリートで固められたトーチカ状の陣地壕がある。南東すなわち港の方向を向いて作られている。入り口らしい状況が反対の北西側に残っている。現在の高さは１m50㎝ほどしかなく、立って歩くことはできない。40㎝以上の厚さのあるコンクリートスラブの上に石積みをして土をかぶせてあったようだ。スラブの保持のために入っていた軽量鉄骨のようなものの跡が30㎝ピッチで残っている。下端のコンクリートは剥がれ落ちている。鉄骨と直交する方向には丸太のようなもので横梁を入れていたのか120㎝間隔で穴が両方にあいている。銃眼らしい物は見られないので、砲身だけを銃眼から出して撃つといった小火器用の陣地ではなさそうだ。

このトーチカから西へ30mほど離れた位置にほぼ平行に、縦横２mほど、長さ約30mの陣地壕が掘られている。兵隊１個小隊単位の壕と思われる。

(川平の第３中隊第２小隊壕)

川平区の公園の一隅に、コンクリートで補強した壕入り口が保存されている。そこから階段を４m近く降りて行くと、手掘りの陣地壕がある。縦横２m、全長は30mほどの人工壕である。橋本勇二小隊長率いる１個小隊約50名が入っていたことを考えると、かなり狭い。本壕は、20mほど行くと先が「く」の字におれている。雨が降ると水がしみ出してくるらしく、中程から先は膝まで水が溜まっている。雨季は壕全体に水が溜まることが予測される。側壁に坑木を立てるくぼみがみられるが、奥へ行くとない。時間がなかったのであろう。中程まではいると、右側に高さ１m幅90㎝ほどの入り口へ通ずる抜け穴が掘られている。現在は道路下になるため先は埋まっているが、20mばかりの長さがあったものと考えられる。本壕向かい側にも同じような穴を掘ろうとした跡が２mほどの深さで残っていた。水没しており充分には判別できない。

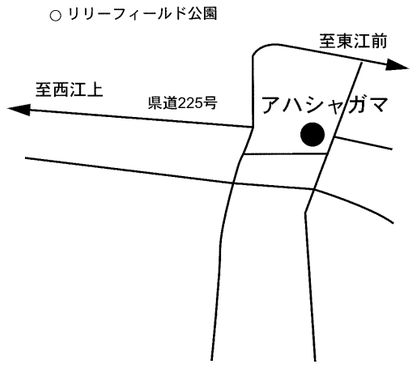
第3中隊第2小隊壕坑道部

第3中隊第2小隊壕実測風景

(参考文献)
伊江村史編集委員会『伊江村史　下巻』伊江村役場　1980年

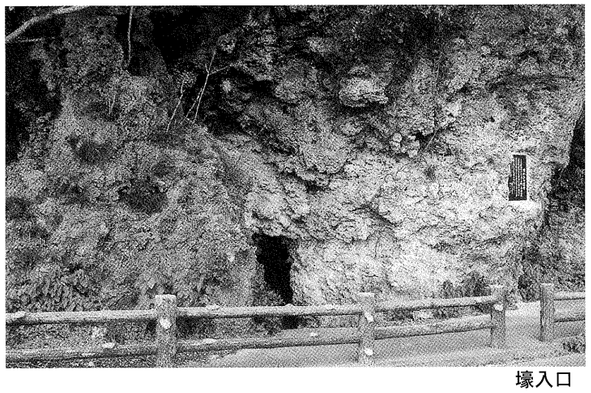
d. アハシャガマ

所在地：伊江村字東江前3344
立地（標高）：畑作地内（50m）
形態：自然壕
種別：住民避難
現状：畑作地内に放置されているが、修学旅行等の平和学習で活用されている
保存状況：戦時中の集団死の爆雷の爆発により崩落した土砂が壕内に堆積している
築造者：不明
築造年月日：不明
戦時中の使用状況：住民避難壕
主な遺構：集団死により崩落したと思われる壕天井の土砂や避難当時持ち込んだ瓶などの破片



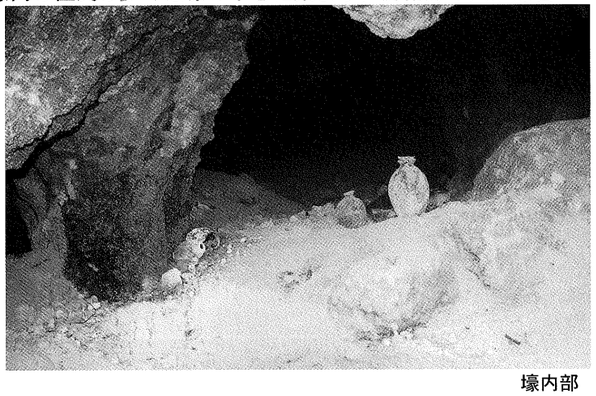
概　要

アハシャガマは東江上畑地内に所在する奥行き20mほどの袋状の自然洞穴である。アハシャガマは沖縄戦時東江上、東江前の住民や防衛隊の避難壕として使用された。このガマは米軍上陸前の艦砲射撃が始まる前から使用されていた。しかし、食糧をガマに運び込むなどの本格的な避難の準備をはじめたのは艦砲射撃が始まる直前になってからであった。


壕入口

壕内には120名とも150名ともいわれる住民が避難していた。しかし、アハシャガマには水が無く炊事用の水は外に汲みにいかなければならなかった。米軍上陸以前は家まで水汲みに行っていたようであるが、米軍上陸後は海岸の岩に溜まった塩混じりの水などを汲んで炊事を等をしていたようである。

米軍上陸後、防衛隊を追って米軍が壕口へ来た時、入り口を見張っていた青年２人は戦車砲の破片で死亡し、壕内にはガスが撒かれたようである。壕内の住民の多くは壕の中心に集まり、防衛隊の人が爆雷の信管を押し自殺を計った。爆雷が爆発すると壕の天井が崩れ首から下が埋まる程であった。生存者は20名程度であった。翌日伊江島の人が通訳をした米軍の呼びかけに応じて生存者は壕を出ていった。現在この壕は平和学習の場として活用されている。


壕内部

（参考文献）
伊江村教育委員会『証言・資料集成　伊江島の戦中・戦後体験記録－イーハッチャー魂で苦難を越えて－』伊江村教育委員会　1999年

第Ⅴ章　総括

2001～2002年度にかけて実施した、沖縄本島北部地区の戦争遺跡詳細分布調査において所在を確認した戦争遺跡は、133カ所であった。ただし、この遺跡数には戦争に関連すると思われる戦前期の記念碑等も戦争遺跡としてとりあげた。遺跡の市町村内訳を以下に記す。

市町村	遺跡数	市町村	遺跡数	市町村	遺跡数
国頭村	8カ所	大宜味村	9カ所	東村	3カ所
今帰仁村	15カ所	本部町	24カ所	名護市	16カ所
恩納村	21カ所	宜野座村	14カ所	金武町	15カ所
伊江村	8カ所				

国頭地方あるいは山原地域と俗称される本調査地区は、沖縄本島の約60％（対本島比のため伊江村を除く）を占める中山間地域である。

先に実施した、戦争遺跡詳細分布調査の中・南部地区とくらべ、遺跡数については現在確認できるものが比較的少ないという感が否めない。これは、地理的な環境や沖縄戦の戦闘状況の違いという側面が相応にあると思われる。ここでは、市町村別の分布状況について要旨を述べることにする。

国頭村では、字奥に住民避難壕群が見られた。現在、段々畑の壁面や、小川の斜面壁に壕口が開いている状況であるが、戦後は再利用されることはなく当時とほぼ同じ状況で放置されている。「伊地の鉱山跡」（16頁）は明治中期に掘られた銅山抗に、防空壕として伊地の住民が一時期避難していた経緯がある。地域の歴史を知るうえで生産遺跡としても貴重なものであろう。

大宜味村では、字根路銘と字津波の山中に避難壕群が見られた。いずれも山中に所在するが、それぞれ当時の状況を知る証言者がご健在であり、遺跡の情報の補填という意味からも貴重な踏査になった。特に「大宜味の住民避難壕群」（20頁）は、現在、大宜味小学校児童の平和学習に活用されており、遺跡の保存と活用を考えるうえで多くの示唆を与える戦争遺跡である。

東村は、確認した遺跡数こそ少なかったが、その中で「慶佐次カミガーの壕群」（24頁）は、住民避難壕と日本軍が構築したと考えられる構築壕が隣接して所在する遺跡群であった。構築した時期の詳細はそれぞれ不明であるが、千枚岩を丁寧に掘削した痕の残る手掘りの壕群の形態の差異は、今後発掘調査等の考古学的手法によってさらに明らかになっていくことと思う。

今帰仁村では、当時運天港に第27魚雷艇隊及び第２蛟龍隊という海軍部隊が駐屯していたため、海軍関連の戦争遺跡が字運天・上運天・渡喜仁などの運天港附近地に見られた。特に「渡喜仁の陣地壕」（28頁）は坑道総延長が約85mを測り、北部地区において所在の判明している人工壕の中で最も大規模なものである。

本部町は、北部地区10市町村の中で最も戦争遺跡数が多いという結果が得られた。これは、本部半島の南部が本部層石灰岩地帯で占められるため、他の北部地区に比べて住民が避難した自然洞穴が多く現存しているというのが大きな理由である。また、「清末隊の陣地壕」（36頁）や「山里の海軍砲台跡」のように陸海軍部隊に関わる陣地遺構が山中に残されていることも理由の一つであろう。さらに国頭支隊（宇土部隊）の本部があった八重岳山頂周辺から山腹にかけての踏査は困難であったが、山林伐採や林道新設等の開発行為に伴い新発見の戦争遺跡として陣地壕等が確認されることも充分に考えられる。

名護市は、北部地区の産業・交通の中心地であり戦後早くから市街地を形成したところであった。所在が確認されている戦争遺跡は市街地を取り囲むような分布状況を呈している。「大湿帯の御真影奉護壕」（38頁）は名護市と東村の境にある大湿帯と呼ばれる山中に所在する。県内の各国民学校に置かれていた御真影を護り安置するために構築した壕である。その歴史的背景や、市指定天然記念物であるオキナワコ

キクガシラコウモリの住処であることを鑑みて現状保存が望ましい戦争遺跡である。

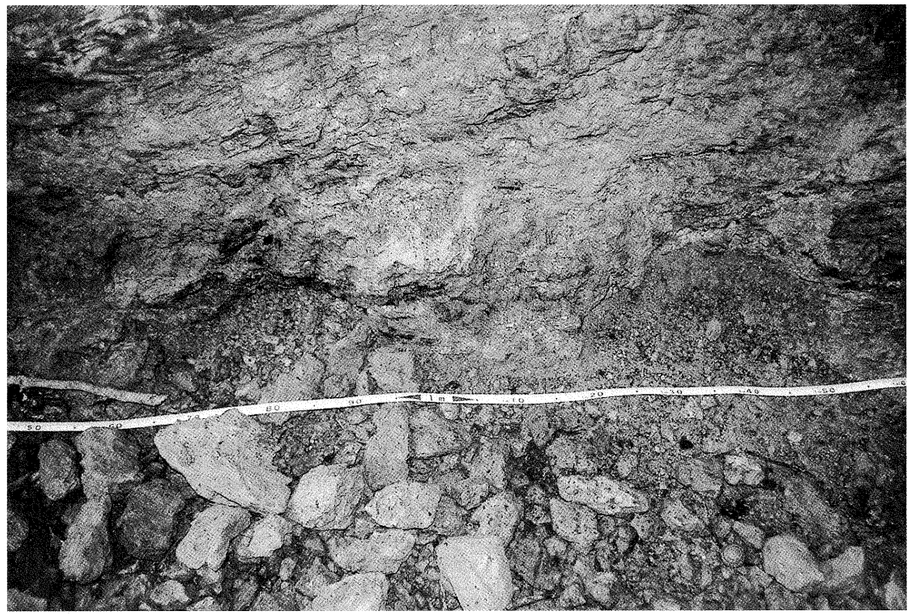
恩納村では、住民が避難した自然洞穴がよく見られた。特に恩納村南部は読谷層石灰岩地域になっており鍾乳洞が形成しやすいという地質的な影響が考えられるであろう。また、字恩納では、2001年度国道恩納バイパス新設工事に伴い山林内に所在した陣地壕の口が数基現れた。現在ではバイパスに係る陸橋接続部に開いている口を確認することができる。これは、所在が不明確であった戦争遺跡が開発行為によってその位置を特定できた事例として挙げられよう。

宜野座村で確認された戦争遺跡はすべて住民避難に係るものであった。ドリーネ地形による自然洞穴が多く、石灰岩地帯の岩盤に小川が衝突してできる橋梁洞穴にも中南部の住民が中心に避難していた。宜野座村教育委員会においては収容所跡の発掘調査成果報告があり、地域の近現代史を解明するうえでの埋蔵文化財行政の取り組みとして注目されている。収容所跡については附編Ⅰ（82頁）で詳述する。

金武町でも他地域と同様に住民避難壕が主であるが、軍事関連遺跡としては「金武の震洋隊秘匿壕」（54頁）が挙げられる。海軍の特攻艇隊である震洋隊の秘匿壕群は字金武にあるものの他に字屋嘉にも見られたが、道路改築により崩されており現状として確認できるのは沖縄本島において本遺跡のみである。バイパス道路に係り本来の壕口部は削られているが、稀少な戦争遺跡として特筆すべきものであろう。

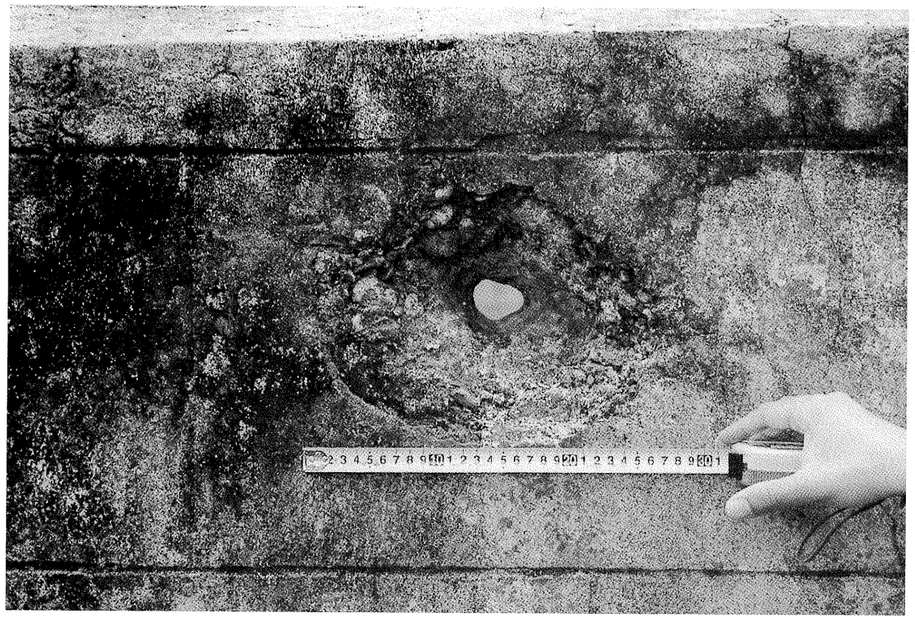
激戦地伊江村においては、確認された遺跡数こそ少なかったが沖縄戦を知るうえで欠かせない戦争遺跡が現存する。伊江島飛行場を守備する日本軍の陣地「独立混成第44旅団第２歩兵隊第3中隊関連の壕」（62頁）や、島民約150名が「集団自決」の犠牲となった「アハシャガマ」（64頁）などが「沖縄戦の縮図」伊江島に所在している。また、1977年に村指定史跡になった「公益質屋跡」の無数の弾痕も生々しい。これらの戦争遺跡は戦跡めぐりのコースとして訪れる島外者もおり、平和教育の場として活用されているものである。

図　　版

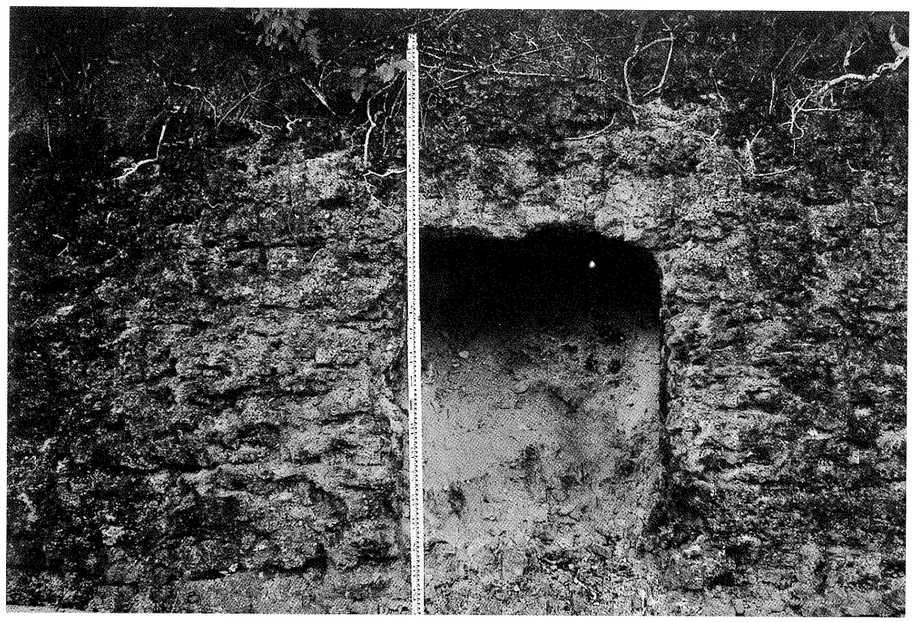


図版１　国頭村奥の避難壕

図版２　大宜味村津波の住民避難壕



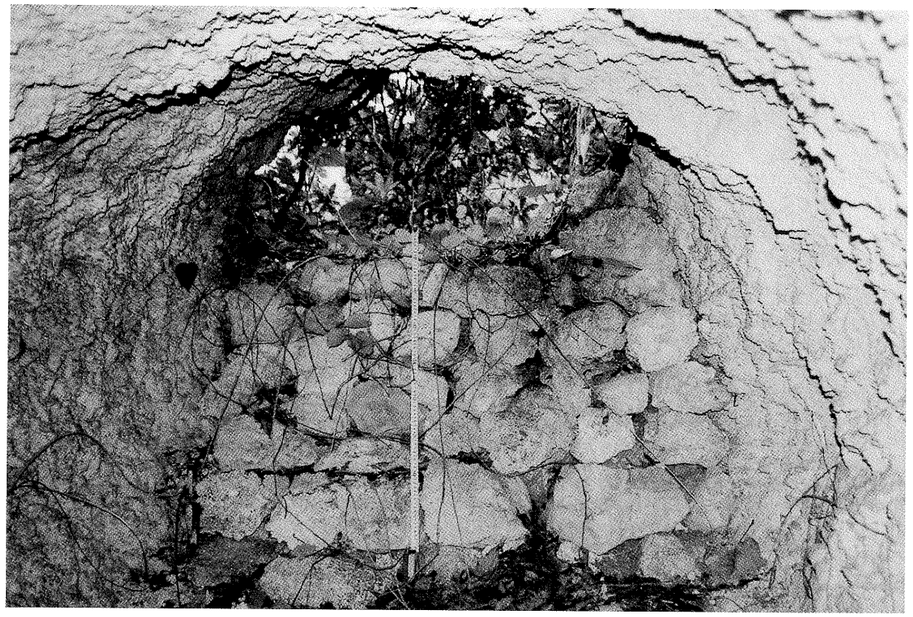
図版３　東村平良弾痕の残る塀



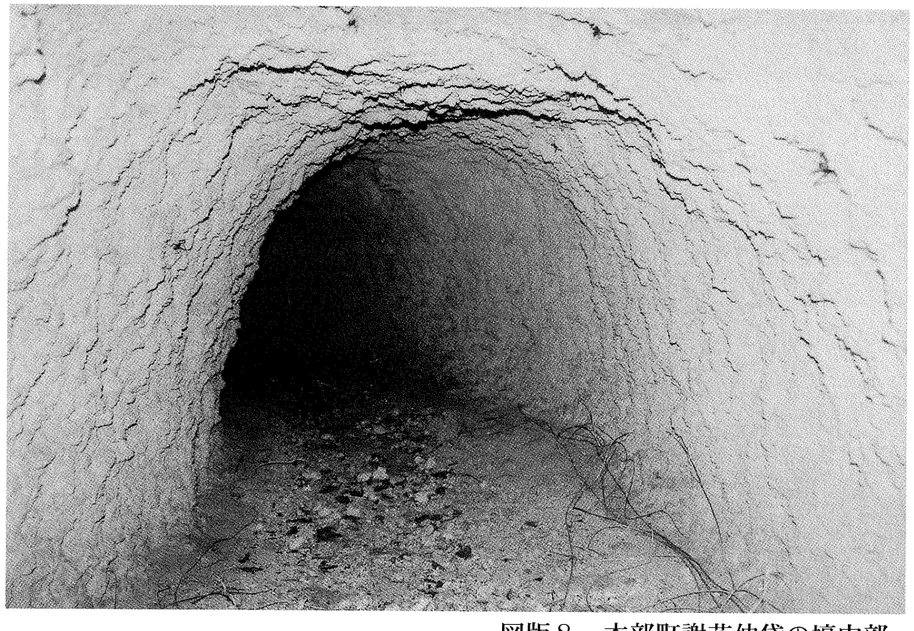
図版４　今帰仁村上運天安里組２班の壕

図版５　今帰仁村謝名の交通壕

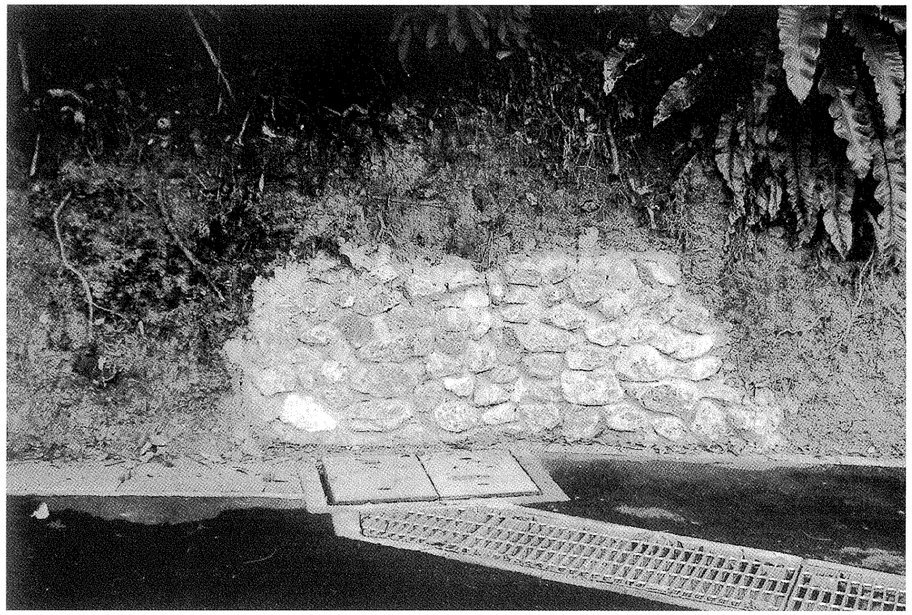
図版６　今帰仁村諸志の陣地壕群



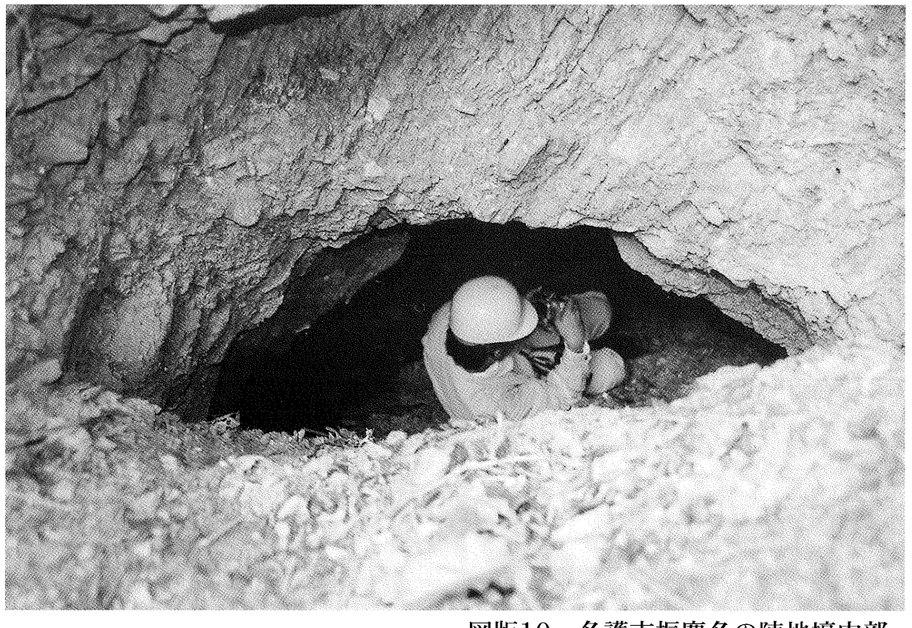
図版７　本部町謝花仲袋の壕口



図版８　本部町謝花仲袋の壕内部



図版９　名護市振慶名の陣地壕塞口



図版10　名護市振慶名の陣地壕内部

図版11　名護市喜瀬の炭焼き窯遠景

図版12　名護市喜瀬の炭焼き窯壁面

図版13　恩納村恩納バイパス接続部の壕

図版14　宜野座村惣慶マッタラクブガマ

図版15　金武町金武豊平隊陣地壕

図版16　伊江村特設警備工兵隊出撃の地

附編

Ⅰ．収容所

1945年３月26日に慶良間諸島、４月１日に沖縄本島に上陸した米軍は、占領地域に対してニミッツ布告を発して「日本帝国政府の総ての行政権の行使を停止」することを宣言し、軍政を布いていく。しかし、沖縄戦において地上戦にさらされた地域はすでに行政機構は崩壊していたのである。

米軍は地上戦を進めていくにあたり、膨大な数の戦場難民に対処しなければならなくなった。沖縄本島における米軍の保護住民の数は、４月末で11万人、５月末で14万人、６月末で28万人に急増し、７月末においては32万人にも達していた。

米軍は戦後の世界戦略の点からも戦闘と並行して基地建設を進めていた。主な基地建設予定地は本島中部地域であった。また、日本軍の主戦力は本島中南部に集中していた。そのため米軍は戦闘がはげしくなく且つ当面基地の建設予定のない地域に収容所を設置し保設した住民を隔離したのである。また、現地召集の軍属を含む日本兵は、金武町屋嘉等に設置された捕虜収容所へ収容された。その一部はハワイ等へも送られたようである。

収容所跡地（屋嘉）

日本軍屋嘉捕虜収容所跡の碑

北部地域と収容所

住民の収容所は沖縄本島に11カ所、周辺離島に５カ所の計16カ所設置された。収容所は適宜つくられ、また移転し、合併も行われた。沖縄本島に設置された収容所は、辺土名収容所、田井等収容所、瀬嵩収容所、大浦崎収容所、古知屋収容所、宜野座収容所、漢那収容所、石川収容所、前原収容所、コザ収容所、知念収容所であった。なかでも、辺土名地区、田井等地区、宜野座地区、石川地区、前原地区の収容所に戦場難民の大半が収容された。

収容所が北部に集中したのは日本軍の飛行場や陣地が中南部に集中していたため主な戦場が中南部となったことと、米軍が航空基地を建設し、中南部の平野部と港湾地帯を無人化するためであった。そのため北部地域の収容所は、1945年９月から10月の間には本島全域の収容所の人口の約３分の２以上の難民を収容することとなった。

収容所には中南部からの避難民をはじめ沖縄本島全域の住民が収容された。例えば、今帰仁村の住民は田井等収容所へ、国頭村の住民は辺土名収容所へというように地域ごとに収容された収容所がある程度区別できる。そのなかでも伊江村の住民は全員慶良間諸島に収容され、伊江島には戦後初期住民の姿が全くなくなったのである。

戦後の始まり

このように沖縄住民が収容されている状況において1945年９月に市議会と市長の選挙が行われた。この選挙で選ばれた市議会と市長は米軍の命令に逆らえないものであり実際は形だけのものであったが、これにより石川市、辺土名市、田井等市、漢那市、宜野座市、古知屋市、久志市、瀬嵩市、前原市、胡差市、知念市が沖縄本島に誕生した。この時期住民は自分の郷里に帰ることも許されず収容所での生活をよぎなくされていた。そのため、北部地域の人口は膨大な数となり宜野座地区（旧久志村と旧金武村）では一地

域に３つの市が誕生することになった。

1945年10月30日から地域の限定はあるが徐々に帰郷が許されるようになると、住民はそれぞれの郷里へと帰っていった。しかし、現在でも郷里が米軍基地となり自分の土地に立ち入ることができなかったり、字自体が消滅してしまった所なども多数ある。（中部編第Ⅱ章第３節「沖縄戦前後の市町村編成」を参照）

戦争遺跡としての収容所

収容所は沖縄県民の戦後の始まりの地であったと言える。それと同時に沖縄県民にとっては占領軍である米軍に生活の場や自由を奪われた戦争体験の一つの側面であったともいえる。

宜野座村は1983年収容所の墓地跡の発掘調査を行い、その報告書を作成している。戦中多数の避難民が収容所に収容され戦場から隔離されたわけであるが、それ以前に負った傷や栄養失調、マラリアなどで多数の死者がでている。収容所の集中していた宜野座村にはその墓地跡が残っていたのである。

収容所はガマや他の戦争遺跡とは異なり収容所が解体された後は住民の居住地や田畑として利用されていった。そのため戦後建てられた記念碑を除き、その多くが跡形もなく破壊され収容所であった跡自体が殆ど残されていない。

しかし、わずかではあるが残っている収容所跡を調査することは、戦場を逃げまどう県民の戦場体験とは違った側面の戦争体験を明らかにすることとなるといえる。

（参考文献）
名護市戦争記録の会、名護市史編さん委員会（戦争部会）、名護市史編さん室『名護市史叢書・１　語りつぐ戦争－市民の戦時・戦後体験記録－第1集』名護市役所　1985年
沖縄市町村三十周年史編集委員会『沖縄市町村三十年史』沖縄市町村三十周年史編集委員会、沖縄県市長会、沖縄県町村会、沖縄県市議会議長会、沖縄県町村議会議長会　1983年
金武町史編さん委員会『金武町史　第二巻　戦争・本編』金武町教育委員会　2002年
宜野座村誌編集委員会『宜野座米軍野戦病院集団埋葬地収骨報告書』宜野座村　1985年
伊江村教育委員会『証言資料集成　伊江島の戦中・戦後体験記録　イーハッチャー魂で苦難を越えて』伊江村教育委員会　1999年

Ⅱ．記念碑

天皇制の国家であった戦前の日本には、天皇の即位や皇太子の誕生・成婚あるいは紀元二千六百年などを記念した「記念碑」「記念物」が全国的に建立・建設された。このことは沖縄も例外ではなかった。ちなみに昭和天皇の即位（御大典あるいは御大礼とよばれていた）を奉祝する記念事業は全国で１万2447件にのぼった。ここでは現存している記念碑・記念物について、現在確認されている範囲で紹介する。

御大典関係

御大典とは天皇の即位儀礼であり、戦前は1915（大正４）年の大正天皇即位と1928（昭和３）年の昭和天皇即位の２回あった。

昭和天皇の即位には、高齢者に「養老賑憮」として木杯と酒肴料が全国で45万9597人（沖縄は3554人）に下賜され、さらに特別減刑・特赦、国家への功労者に対する叙位叙勲や表彰も行われ、天皇の「聖恩」を国民に与えた。国民は「聖恩」に応えるため奉祝行事と記念事業を全国各地で催した。那覇市は海水浴場開設と奉安所設置、首里市は道路改修、町村では奉安所設置６カ所・小学校校舎建築３校・道路改修・橋梁架設９カ所や造林・公園・消防設備拡充、また昭和会館の建設や那覇駅構内に時計が設置された（田中伸尚『一九二八年。「御大典」の裏側で』）。

また、沖縄県は御大典記念事業として、勤倹貯蓄の民謡を広く県民に募集し、その結果選ばれたのが具志頭村出身の仲本稔が作詞した「汗水節」（宮良長包作曲）である。現存している記念碑・記念物は以下の通りである。

大宜味村字喜如嘉「御大典記念碑」

東村字高江「御大典祈念造林地」（大正５年）沖縄小林区署が樟を４町歩余りに植林。

大宜味村字喜如嘉「御大典記念碑」（昭和３年）橋の改修。

本部町字伊豆味「御大禮記念」（昭和５年）伊豆味神社を改築。

本部町字崎本部「御大典紀念碑」（昭和３年）崎本部青年会。

名護市字安和「御大典紀念道路碑」（昭和３年）勝山区民が道路を改修。

糸満市字糸満「御大典記念改築碑」（昭和７年）白銀神社の改築。

糸満市字糸満「御大典記念山巓毛改修碑」（年代なし）山巓毛の改修。

豊見城市字保栄茂「御大典記念」（昭和３年）字運動場建設。

玉城村字冨里「水道工事竣工祈念碑」（大正10年）字が御大典記念として正泉井の改修費を大正４年から積み立てた。

久米島町字比屋定「御大典祈念井泉」（昭和３年）井泉に刻まれている。

紀元二千六百年関係

太平洋戦争が始まる前年の1940（昭和15）年11月10日に紀元二千六百年の祝賀式典が皇居前広場で催された。式典には近衛文麿首相ほか各大臣、外国使節、それに全国代表５万人（沖縄からも淵上知事以下百余名）が参列した。1940年は神武天皇即位の紀元前660年から数えて2600年の節目ということで、国家行事が展開された。全国各地では前述した御大典記念事業と同じように奉祝行事や記念事業（記念碑建立）が行われた。宮崎県で建立された「八紘一宇之塔」はこの象徴であった。

沖縄は、護国神社の建設、那覇市が奥武山公園運動場の整備、県が記念造林（羽地村嵐山）、中頭郡教

育部会が教育会館、波之上宮が修養道場、県警防団が本部建物、そして大里村・座間味村などが忠魂碑の建立、奉安殿の建設や御嶽の改修などが行われた。現存している記念碑・記念物は次の通りである。

伊江村字川平「ミンカザント」

名護市字嘉陽「上城　紀元二千六百年祭記念」（昭和14年）本殿の改修と鳥居新築。

伊江村字川平「ミンカザント」水を貯める装置で「紀元二千六百年記念」と刻まれている。

豊見城市字平良「紀元二千六百年記念改修」井泉の改修。

豊見城市字宜保「紀元二千六百年記念改修」ビジュンの改修。

豊見城市字保栄茂「紀元二千六百年記念」と刻まれた掲揚台の建設。

皇太子御誕生・御成婚関係

皇太子の誕生や結婚を記念しての事業も全国的に行われた。沖縄県でも例外ではない。現存する記念碑・記念物は次の通りである。

名護市字仲尾次「簡易水道　皇太子殿下御誕生記念碑」（昭和９年）字民が築造。

名護市字安和「皇太子殿下御誕生記念改築」の碑（昭和９年）安和神社を字民が築造。

玉城村字前川「皇太子殿下御成婚祈念碑」（大正３年）在郷軍人・青年会・処女会が御宮を新築。

糸満市字糸満「皇太子殿下御誕生記念」（昭和９年）山巓毛に建てられた国旗掲揚台。

Ⅲ．沖縄戦関係文献目録

県市町村史編集部署の発刊した沖縄戦関係文献の目録を年代別に記載した。尚タイトル後の刊行機関名は編集・発行の順であるが、それぞれ同一機関の場合は重複して記さない。

1971年
『沖縄県史第８巻　各論編７　沖縄戦通史』琉球政府
『沖縄県史第９巻　各論編８　沖縄戦記録１』琉球政府
『市民の戦時体験記録　第１集』那覇市企画部市史編集室編　那覇市役所

1972年
『市民の戦時体験記録　第２集』那覇市企画部市史編集室編　那覇市役所

1978年
『忘れられぬ体験　市民の戦時・戦後体験記録　第１集』戦時・戦後体験記録委員会
『忘れられぬ体験　市民の戦時・戦後体験記録　第２集』戦時・戦後体験記録委員会
『本部町史（上下）』本部町史編集委員会　本部町役場

1980年
『伊江村史　下巻』 伊江村史編集委員会編　伊江村役場
『今、平和のために　戦災空襲を記録する会全国連絡会議　第10回記念那覇大会報告書』那覇市企画部市史編集室編

1981年
『那覇市史　資料編第２巻７　市民の戦時・戦後体験記録１』那覇市企画部市史編集室編『那覇市史　資料編第３巻８市民の
戦時・戦後体験記録２』那覇市企画部市史編集室編

1982年
『宜野湾市史　第３巻資料編２　市民の戦争体験記録』宜野湾市史史編集委員会

1984年
『浦添市史　第５巻資料編４　戦争体験記録』浦添市史編集委員会　浦添市教育委員会
『南風原町沖縄戦戦災調査１　喜屋武が語る沖縄戦』南風原町教育委員会
『市民の戦時戦後体験記録　あのころのわたしは（第二集）』石垣市史編集室

1985年
『宜野座米軍野戦病院集団埋葬地集骨報告書』宜野座村史編集委員会編
『南風原町沖縄戦戦災調査２　兼城が語る沖縄戦』南風原町教育委員会編
『北谷町民の戦時体験記録集　第一集　沖縄戦　語てぃいかな何時ぬ世までぃん』北谷町史編集事務局編　北谷町役場
『市民の戦時戦後体験記録　あのころわたしは（第三集）』石垣市史編集室
『語りつぐ戦争　第１集』名護市戦争記録の会・名護市史編さん委員会（戦争部会）・名護市編さん室編　名護市役所

1986年
『沖縄軍事関係事典（１）』北谷町史編集事務局編　北谷町役場

1987年
『西原町史　第３巻』西原町史編集委員会編　西原町役場
『宜野座村誌　第二巻　資料編１　移民・開墾・戦争体験』宜野座村誌編集委員会　宜野座村役場
『市民の戦争体験記録』具志川市教育委員会編
『南風原町沖縄戦戦災調査３　宮城が語る沖縄戦』南風原町教育委員会編
『南風原陸軍病院壕』南風原町教育委員会編
『沖縄軍事関係事典（２）』北谷町史編集事務局編　北谷町役場

1988年
『座間味村史　下巻　戦争体験記』座間味村史編集委員会編　座間味村役場
『石垣市史　資料編近代３　マラリア資料集成』石垣史総務部市史編集室編
『戦争編　聞き取り調査報告書　戦争体制下の座喜味を中心に（読谷村史研究資料６）』読谷村史編集事務局編

1990年
『中城村史　第４巻　戦争体験編』中城村史編集委員会編　中城村役場
『渡嘉敷村史　通史編』渡嘉敷村史編集委員会編　渡嘉敷村役場
『南風原町沖縄戦戦災調査４　津嘉山が語る沖縄戦』南風原町教育委員会編
『戦争編　聞き取り調査報告書　第１回　沖縄戦当時の読谷山役場職員座談会（読谷村史研究資料７）』読谷村史編集事務局編
『戦争編　聞き取り調査報告書　第２回　沖縄戦当時の読谷山役場職員座談会（読谷村史研究資料８）』読谷村史編集事務局編

1991年
『南風原の学童疎開　もうひとつの沖縄戦』南風原町教育委員会　南風原町

『戦争編　宮崎県疎開地調査報告書１　諸塚村家代での座談会（読谷村史研究資料９）』読谷村史編集事務局編
『戦争編　宮崎県疎開地調査報告書２　えびの市での聞き取り調査（読谷村史研究資料10）』読谷村史編集事務局編
『戦争編　宮崎県疎開地調査報告書３　三股町三原での座談会（読谷村史研究資料11）』読谷村史編集事務局編
『戦争及び紛争関係収集図書目録１（読谷村史研究資料13）』読谷村史編集事務局編

1992年
『北谷町史　第５巻資料編４　北谷の戦時体験記録』北谷町史編集委員会編
『南風原町沖縄戦戦災調査５　与那覇が語る沖縄戦』南風原町史編集室編　南風原町教育委員会
『読谷村史戦争編聞き取り調査報告　特攻隊関係資料（読谷村史研究資料18）』読谷村史編集事務局編

1993年
『南風原町沖縄戦戦災調査６　大名が語る沖縄戦』南風原町史編集室編　南風原町教育委員会
『南風原町沖縄戦戦災調査７　宮平が語る沖縄戦』南風原町史編集室編　南風原町教育委員会

1994年
『知念村史　第３巻　戦争体験記録』知念村史編集委員会編　知念村役場
『検証障害者の沖縄戦　障害者は沖縄戦をどうくぐり抜けたか』南風原町史編集委員会編　南風原町教育委員会
『南風原町沖縄戦戦災調査８　山川が語る沖縄戦』南風原町史編集室編　南風原町教育委員会
『南風原町沖縄戦戦災調査９　照屋が語る沖縄戦』南風原町史編集室編　南風原町教育委員会

1995年
『戦時体験記録　北谷町』北谷町役場企画課町史編集室編　北谷町役場
『南風原町沖縄戦戦災調査10　新川が語る沖縄戦』南風原町史編集室編　南風原町教育委員会
『南風原町沖縄戦戦災調査11　本部が語る沖縄戦』南風原町史編集室編　南風原町教育委員会
『戦争遺跡（壕）の保存活用を考える　南風原町平和ウィークの記録』南風原町文化センター
『ムギメシヒトツ　ココフタツ　与那原の学童疎開第１部体験集』与那原町学童疎開史編集委員会　与那原町教育委員会
『沖縄のお友達へ　復刻版　昭和２１年９月３０日　大野国民学校』与那原町学童疎開史編集委員会　与那原町教育委員会
『島びとの硝煙記録　多良間村民の戦時・戦争体験記録』多良間村戦時・戦争体験記録編集委員会　多良間村教育委員会
『具志川市の慰霊塔』具志川市史編さん室編　具志川市教育委員会
『防衛庁資料目録　防衛庁防衛研修所図書館蔵』具志川市史編纂室編　具志川市教育委員会

1996年
『西原町史　第五巻　資料編四　西原の考古』西原町史編集委員会　西原町役場
『未来への誓い　戦後５０年記念名護市戦没者名簿』名護市史編さん室　名護市民生課
『沖縄県史　資料編２　琉球列島の沖縄人・他　沖縄戦２』財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室　沖縄県教育委員会
『南風原町沖縄戦戦災調査12　神里が語る沖縄戦』南風原町史編集室編　南風原町教育委員会
『南風原町陸軍病院壕　保存・活用についての答申書』南風原陸軍病院壕保存・活用調査研究委員会
『平和祈念ガイドブック　ひびけ平和の鐘』石垣市総務部市史編集室　石垣市
『町民の戦争体験記』町民の戦争体験記編集委員会　本部町役場
『太平洋戦争・沖縄戦西原町世帯別被災者記録』西原町役場
『竹富町史　第十一巻　資料編　戦争体験記録』竹富町史編集委員会・町史編集室編　竹富町役場

1997年
『沖縄県史　資料編４　アイスバーグ作戦　沖縄戦４　（原文編）』財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編　沖縄県教育委員会
『城辺町史　戦争沖縄史体験編』城辺町役場

1998年
『沖縄戦研究Ⅰ』財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編　沖縄県教育委員会
『一般疎開　安村静日記－天願から宮崎へ－』具志川市史編さん室　具志川市教育委員会
『沖縄の疎開資料目録　与那原の学童疎開　第２部資料集』与那原町学童疎開史編集委員会編　与那原町教育委員会
『糸満市史　資料編７　戦時資料下巻－戦災記録・体験談－』糸満市編集委員会編　糸満市役所
『美里から戦さ世　沖縄市史資料集』沖縄市企画部平和文化振興課　沖縄市役所
『第２回戦争遺跡保存全国シンポジウム報告集』南風原町・戦争遺跡保存全国ネットワーク・沖縄平和ネットワーク

1999年
『沖縄戦研究Ⅱ』財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編　沖縄県教育委員会
『東風平町史　－戦争体験記－』町史編集委員会　東風平町
『証言・資料集成　伊江島の戦中・戦後体験記録－イーハッチャー魂で苦難を越えて－』伊江島教育委員会編　伊江島教育委員会
『南風原が語る沖縄戦　南風原町史第３巻　戦争編ダイジェスト版』南風原町教育委員会南風原町
『客馬車の鑑札をめぐって～国市さんとバレットさんの出会い～読谷村史研究資料６－12（No.23）』読谷村史編集室編
『シベリア抑留者座談会　読谷村史研究資料６－13（No.24）』読谷村史編集室編

『満州での戦争体験　読谷村史研究資料６－14（No.25)』読谷村史編集室
『佐敷町史　四　戦争』佐敷町史編集委員会　佐敷町役場

2000年

『嘉手納町史　資料編５　戦時資料上』嘉手納町史編纂審議会編　嘉手納町教育委員会
『鉄田義司日記　船浮要塞重砲兵連隊の軌跡　竹富町史資料集』鉄田義司　竹富町役場
『沖縄県史ビジュアル版５　空から見た沖縄戦』財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編　沖縄県教育委員会

2001年

『豊見城村史　第６巻　戦争編』豊見城村史戦争編専門部会編　豊見城村役場
『沖縄県史　資料編12　アイスバーグ作戦　沖縄戦５　（和文編)』財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編　沖縄県教育委員会

2002年

『むかし南風原は　南風原町史　第5巻　考古編』南風原町史編集委員会　南風原町役場
『読谷村史　第４巻　資料編３』読谷村史編集委員会　読谷村役場
『金武町史　第２巻戦争　本編・証言編・資料編』金武町史編さん委員会編　金武町教育委員会

索引

あ
暁部隊　7、8
熱田　9
安富祖　8、9

い
伊江島　4、7、8、9、36、58、60、62、64、67、80
伊江島地区隊　10、58
伊江島飛行場　8、9、67
伊江村　58、60、62、64、66、67、80、83
伊地　16、17、66
石川　4、46、47、80
石川岳　9、46
伊豆味(国民学校)　9、36、82
糸満　32、84
稲嶺(国民学校)　9、38
西表　32
岩波隊長　9

う
浦添　7、8
運天　7、30、66
運天港　8、9、28、30、42、66

お
大嘉陽　36
大宜味　7、54、66
大宜味村　11、20、66、82
大湿帯　9、38、66
大浜　34
沖縄愛楽園　40、42
沖縄県庁　32
沖縄方面根拠地隊（沖縄根拠地隊）　30、55
乙羽岳　9
伊平屋島　7
恩納　7、9、44、67
恩納村　4、7、46、66、67
恩納岳　9、10、36、44、46

か
学徒隊　8、9
嘉手納　8、32、44
我部祖河　4
川田　9
川平　60、62、63、83
監視哨　32、33

き
ギナン原　44
宜野座村　11、50、51、66、67、81
キャンプ・シュワブ　4
キャンプ・ハンセン　4、51
義勇隊　8、10、62
教育勅語　34
金武　7、8、9、32、51、67
金武町　4、7、46、50、54、66、67、80

く
久志　7、80
久志岳　9、10
久志間切　7
城山（タッチュー）　10、58、60、62
国頭　4、7、9、16、24、32、36、38、58、66
国頭愛楽園　8、42
国頭支隊　9、10、24、30、36
国頭村　16、66、80
久米島　7、32、82

け
慶佐次　7、24、25、66
県警防課　32
県立第３高等女学校　9
県立第３中学校生　9
県立農林学校　9

こ
公益質屋　58、59、63、67
幸喜　9
鉱山跡　16、66
御真影　9、34、38、39、66
御真影奉護壕　9、34、38、66
古知屋　11、51、82

さ
崎本部　36、84
座間味島　10、85

し
塩屋　9、20
島尻　7
謝花（国民学校）　34
十・十空襲　8、20、24、30、40、60
集団死（「集団自決」）　10、60、64、67
収容所　4、10、11、51、80、81
宿道　7
首里　7、9、16、82
女子救護班　10

せ
青年団　33、54
瀬底島　8
瀬良垣　44

そ
疎開　9、11、58、62

た
第１護郷隊　8
第２２震洋隊　8、54、55
第２４師団　8、44
第２７魚雷艇隊　8、28、30、66
第２蛟龍隊　8、66
第２護郷隊　8
第２歩兵隊（宇土部隊）　8、36、62、67
第２歩兵隊第１大隊（井川隊）　10
第３２軍　8、10、42
第３遊撃隊　8、9、10
第４２震洋隊　8、54
第４遊撃隊　8、9、10
第５０飛行場大隊　8
第６２師団　8、9
第９師団　8
台湾　8、9
タニヨ（多野）岳　9、10

ち
谷茶　32、33
知念半島　9
北谷　8

て
挺進斬込隊　10
鉄血勤皇隊　9

と
トーチカ　44、45、62、63
渡嘉敷島　10
渡喜仁　28、66
特設第１連隊　9
渡久地　7、8、36
独立機関銃中隊　62
独立混成第１５連隊（美田部隊）　8、9
独立混成第４４旅団　8、9、10、36、62、67
独立歩兵第１２大隊（賀谷支隊）　9
渡野喜屋　11
富山丸　36

な
中川　55
名嘉真岳　55
中山　20、66
今帰仁　7
今帰仁村　7、28、30、66、80
今帰仁代官　7
名護　7、8、9、10、24
名護市　4、34、38、40、66、82、83
名護岳　9、10
那覇　7、32、38、40、82、83

に
肉迫攻撃　10

は
羽地　7、9、38、83
羽地大川　4
羽地内海　4
羽地平野　4

ひ
東村　7、24、66、82
避難小屋　11、20、46、47

ふ
福山　11
婦人協力隊　10
冨着幸地原　46
普天間　4、8

へ
辺野古弾薬庫　4

ほ
奉安殿　34、83
防衛隊　8、10、54、62、64
北部訓練場　4
戊申詔書　34

ま
真喜屋　9
真部山　36
み
宮古　7、32
水納島　10

も
本部　4、7、8、16、36、66
本部町　7、9、32、34、36、66、82

や
八重岳　9、36、66
八重山　7、32
屋我地島　8、40
八原高級参謀　9
山グシ　62

ゆ
有銘　38
山原　4、7、66
遊撃戦　9、10

よ
与那城　32
読谷　8、44、67
陸軍航空本部　8
陸軍中野学校　8

沖縄県立図書館蔵
平成
'15.5.09

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第16集

沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（Ⅲ）
－北部編－

2003年（平成15）3月25日

発行　沖縄県立埋蔵文化財センター
編集　沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903-0125　中頭郡西原町字上原１９３－７
TEL　098（835）8751～8752

印刷　株式会社　国　際　印　刷
〒901-0147　那覇市宮城1丁目13番9号
TEL　098（857）3385

① 国頭村

各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
1	シヌグスクの下の壕	国頭村	奥	住民避難	人工壕
2	ヒナクブの交通壕	国頭村	奥	陣地	構築物
3	乃木神社鳥居	国頭村	奥	その他	建造物
4	字奥の忠魂碑	国頭村	奥	記念碑	建造物
5	奥の避難壕	国頭村	奥	住民避難	人工壕
6	カジマナの壕	国頭村	奥	住民避難	人工壕

戦争遺跡分布図凡例

1　使用した地形図は国土地理院（平成６年１２月１日）発行25,000分の１を複製、転用した。

2　遺跡一覧表の番号は、各市町村とも概ね北の字から南の字及び東の字から西の字へと番号を並べており、分布図と一覧表の番号は対応している。

3　遺跡所在地について、本文表記の番地は遺跡の中心部と思われる位置を示しているもので、所在地を限定したものではない。分布地図上に示した範囲についても同様の意図である。

4　遺跡の名称については、各市町村において差異があるので、ここでは、地元住民の呼称や、使用していた部隊名が判るものはそれを使用した。

5　一覧表の名称は方言名が多いためにカタカナ表記が多い。そのため地元の発音と異なるものが多々あると思われる。

6　一覧表中の各遺跡の種別と形態は次のとおりである。
種別：住民避難、陣地、政治・行政、記念碑等、交通関係、不明、その他
形態：自然壕、人工壕、建造物、構築物、不明、その他
※本附図では、主として軍事目的に建築または土木工事を行った構造物を構築物とし、軍事目的以外のものを建造物とした。

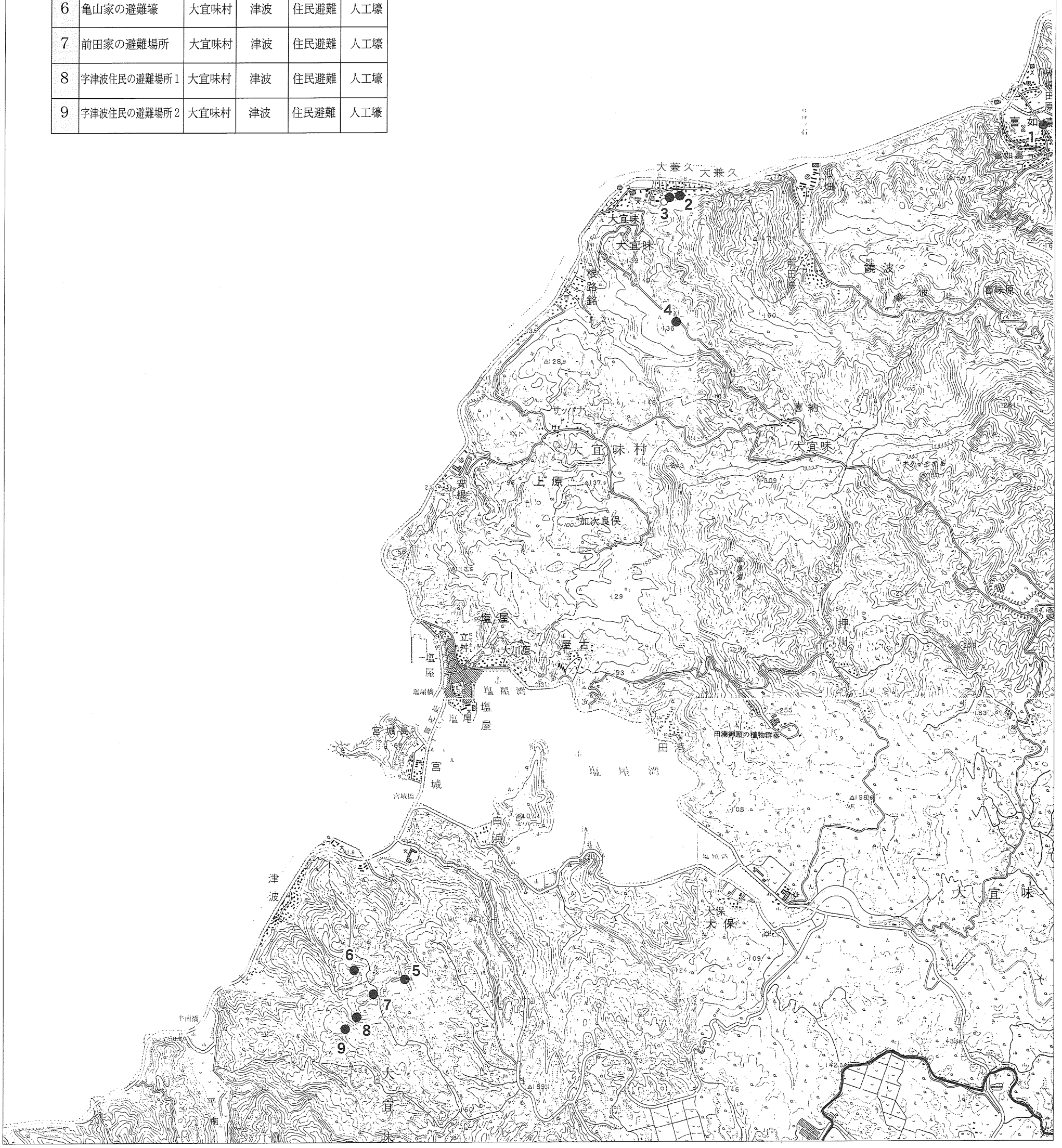
7　遺跡のほとんどが、試掘調査、発掘調査によって範囲等が変わる場合があるので、近辺での開発工事については当該市町村教育委員会との連絡調整が必要である。

② 国頭村

各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
7	字伊地の鉱山跡	国頭村	伊地	住民避難	人工壕
8	字比地の住民避難壕	国頭村	比地	住民避難	人工壕

③ 大宜味村

各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
1	喜如嘉の御大典紀念碑	大宜味村	喜如嘉	記念碑	建造物
2	旧大宜味村役場	大宜味村	大宜味	政治・行政	建造物
3	大宜味の忠魂碑	大宜味村	大宜味	記念碑	建造物
4	大宜味の住民避難壕群	大宜味村	根路銘	住民避難	人工壕
5	字津波70代の壕	大宜味村	津波	住民避難	人工壕
6	亀山家の避難壕	大宜味村	津波	住民避難	人工壕
7	前田家の避難場所	大宜味村	津波	住民避難	人工壕
8	字津波住民の避難場所１	大宜味村	津波	住民避難	人工壕
9	字津波住民の避難場所２	大宜味村	津波	住民避難	人工壕



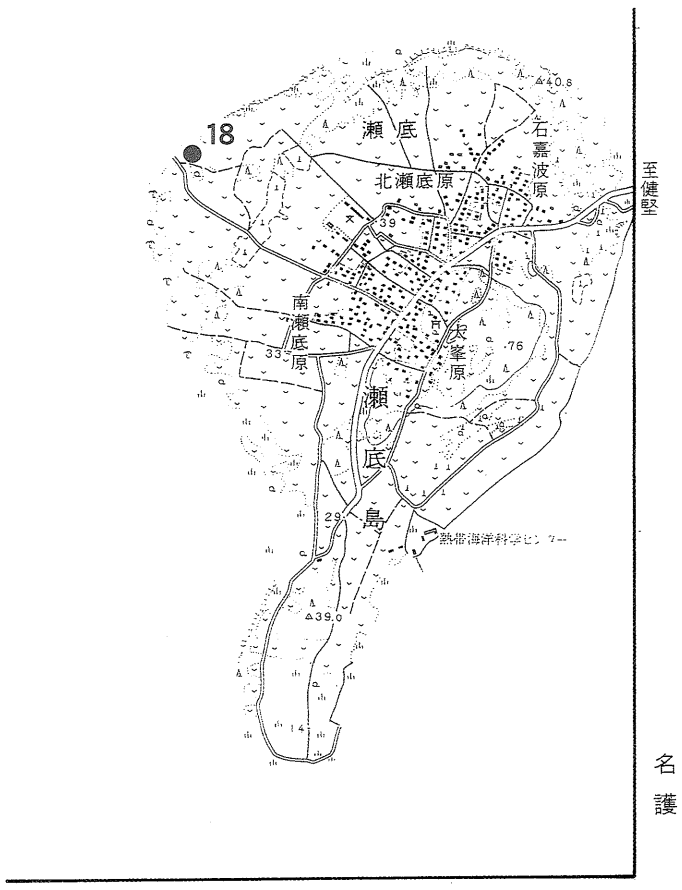
④ 東村

各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
1	川田の住民避難壕	東村	川田	住民避難	人工壕
2	平良の弾痕の残る壁	東村	平良	その他	建造物
3	慶佐次カミガーの壕群	東村	慶佐次	住民避難	人工壕

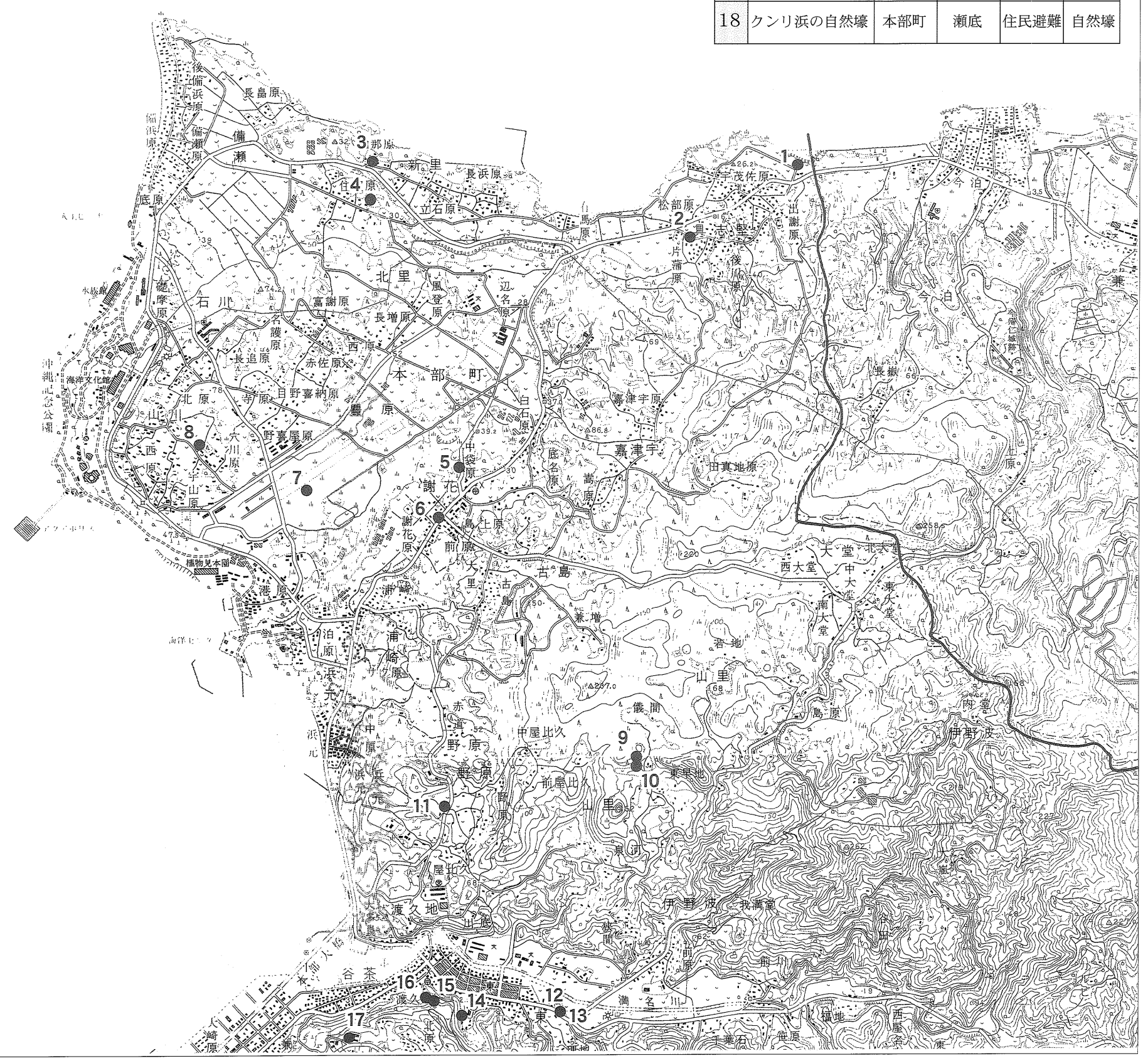
⑤今帰仁村

各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
1	ティラガマ	今帰仁村	運天	住民避難	自然壕
2	源為朝公上陸記念碑	今帰仁村	運天	記念碑	建造物
3	運天隧道脇の壕	今帰仁村	上運天	陣地+住民避難	人工壕
4	上運天2班の壕（安里組の壕）	今帰仁村	上運天	住民避難	人工壕
5	根神屋の壕	今帰仁村	上運天	住民避難	人工壕
6	蛟龍エンジン調整壕	今帰仁村	上運天	陣地	人工壕
7	白石部隊防空壕	今帰仁村	上運天	陣地	人工壕
8	第27魚雷艇秘匿壕	今帰仁村	上運天	陣地	人工壕
9	渡喜仁の陣地壕	今帰仁村	渡喜仁	陣地	人工壕
10	ウシヌスルガマ	今帰仁村	天底	陣地	自然壕
11	崎山の住民避難壕（浦原の住民避難壕）	今帰仁村	崎山	住民避難	人工壕
12	謝名の避難用通路	今帰仁村	謝名	住民避難	構築物
13	与那嶺の海食洞	今帰仁村	与那嶺	住民避難	自然壕
14	与那嶺の交通壕（シマ山の交通壕）	今帰仁村	与那嶺	陣地	構築物
15	字諸志の住民避難壕	今帰仁村	諸志	住民避難	人工壕

⑥ 本部町



各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
1	ジャニ浜の避難壕	本部町	具志堅	住民避難	自然壕
2	具志堅の陣地壕	本部町	具志堅	陣地	人工壕
3	イリンゴウ	本部町	新里	住民避難	自然壕
4	アブントウ	本部町	新里	住民避難	自然壕
5	中袋の防空壕	本部町	謝花	住民避難	人工壕
6	謝花国民学校の奉安殿	本部町	謝花	その他	建造物
7	桃原の飛行場跡	本部町	北里、豊原	陣地	構築物
8	ウーミィアブ	本部町	山川	住民避難	自然壕
9	山里の弾薬保存壕	本部町	山里	陣地	人工壕
10	海軍砲台	本部町	山里	陣地	構築物
11	テンヌチヂガマ	本部町	野原	住民避難	自然壕
12	字東の忠魂碑	本部町	東	記念碑	建造物
13	戦没軍人氏名の碑	本部町	東	記念碑	建造物
14	東の住民避難壕	本部町	東	住民避難	人工壕
15	渡久地の避難壕	本部町	渡久地	住民避難	人工壕
16	渡久地警察署の壕	本部町	渡久地	政治・行政	人工壕
17	本部監視哨跡	本部町	谷茶	政治・行政	構築物
18	クンリ浜の自然壕	本部町	瀬底	住民避難	自然壕



⑦本部町・名護市

各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
19	御大禮記念碑	本部町	伊豆味	記念碑	建造物
20	真部山の日本軍陣地壕	本部町	大嘉陽	陣地	人工壕
21	清末隊の陣地壕	本部町	大嘉陽	陣地	人工壕
22	国頭支隊野戦病院跡	本部町	大嘉陽	陣地	構築物
23	崎本部の御大典紀念碑	本部町	崎本部	記念碑	建造物
24	崎本部４２番地の壕	本部町	崎本部	住民避難	人工壕

各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
12	御大典紀念道路碑	名護市	勝山	記念碑	建造物
13	安和神社の碑	名護市	安和	陣地	建造物

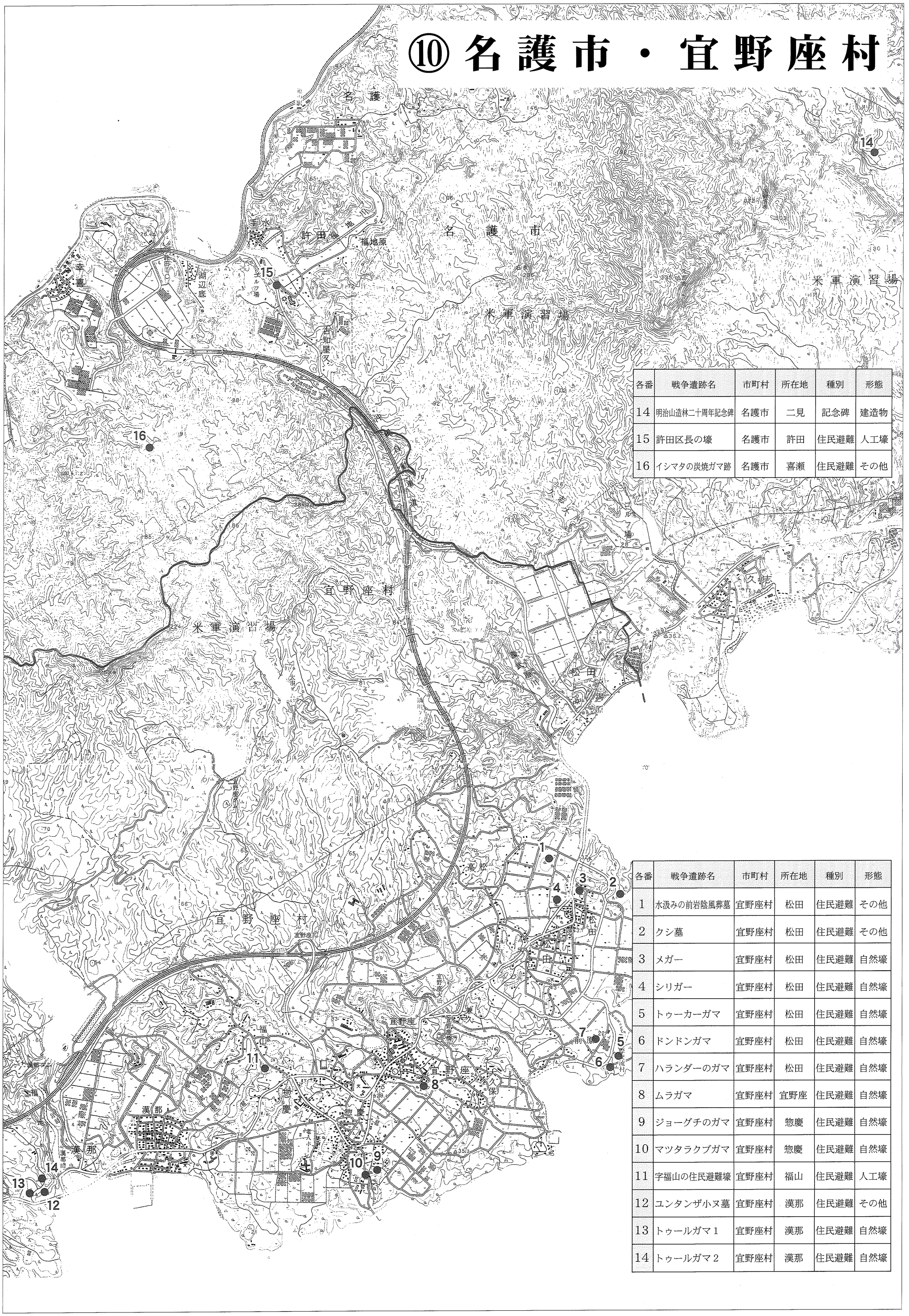
⑧ 名護市

各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
1	大湿帯の御真影奉護壕	名護市	源河	その他	人工壕
2	上城の紀元二千六百年祭記念碑	名護市	嘉陽	記念碑	建造物

⑨ 名護市

各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
3	早田壕	名護市	済井出	住民避難	人工壕
4	愛楽園弾痕の残る給水タンク	名護市	済井出	その他	建造物
5	愛楽園弾痕の残る壁	名護市	済井出	その他	建造物
6	済井出の住民避難壕	名護市	済井出	住民避難	人工壕
7	簡易水道　皇太子殿下御誕生記念碑	名護市	仲尾次	記念碑	建造物
8	仲尾次の住民避難壕	名護市	仲尾次	住民避難	人工壕
9	羽地の忠魂碑	名護市	仲尾次	記念碑	建造物
10	振慶名の陣地壕	名護市	振慶名	陣地	人工壕
11	武田薬草園乾燥場（弾痕の残る壁）	名護市	古我知	その他	建造物

⑩ 名護市・宜野座村

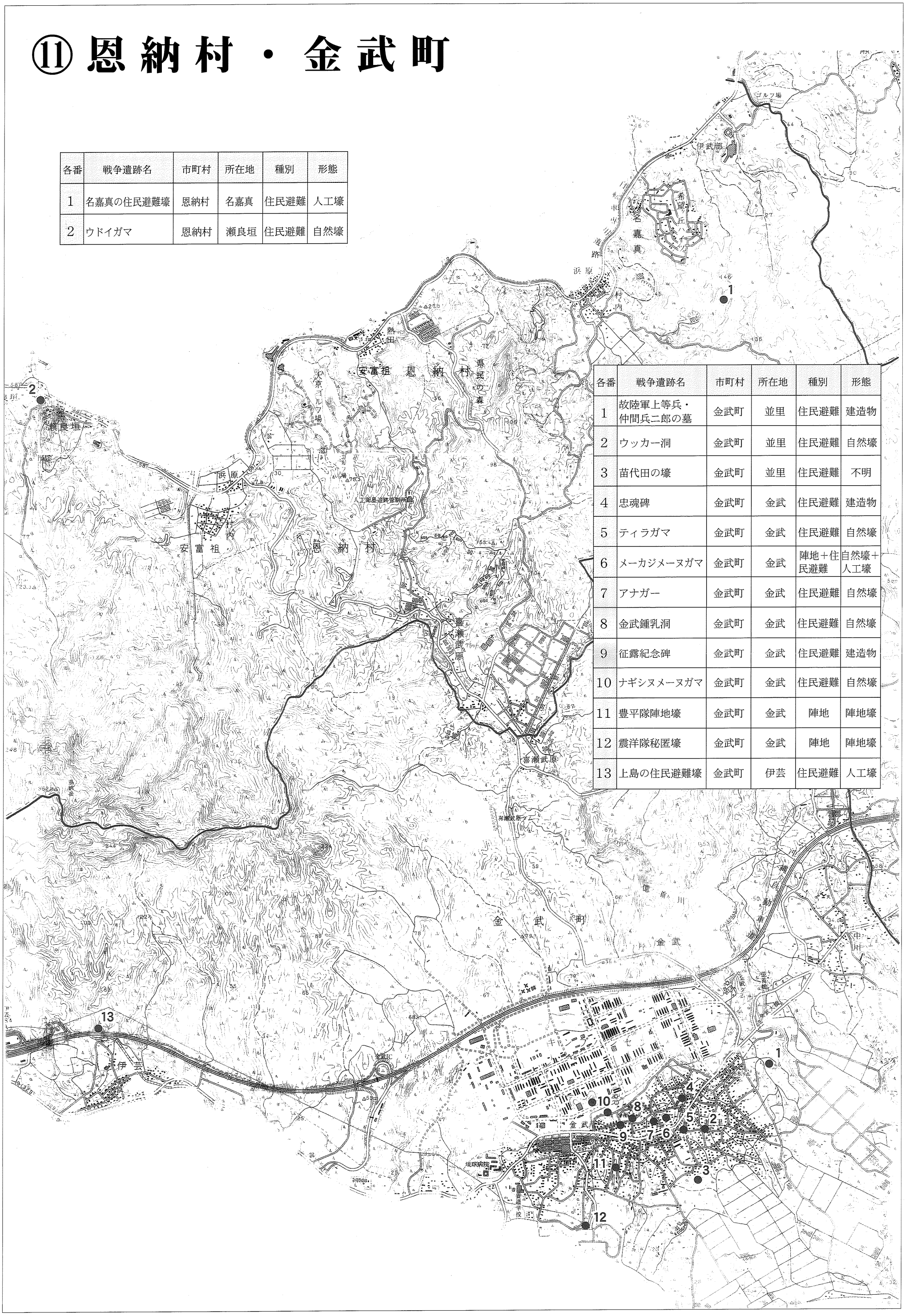


各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
14	明治山造林二十周年記念碑	名護市	二見	記念碑	建造物
15	許田区長の壕	名護市	許田	住民避難	人工壕
16	イシマタの炭焼ガマ跡	名護市	喜瀬	住民避難	その他

各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
1	水汲みの前岩陰風葬墓	宜野座村	松田	住民避難	その他
2	クシ墓	宜野座村	松田	住民避難	その他
3	メガー	宜野座村	松田	住民避難	自然壕
4	シリガー	宜野座村	松田	住民避難	自然壕
5	トゥーカーガマ	宜野座村	松田	住民避難	自然壕
6	ドンドンガマ	宜野座村	松田	住民避難	自然壕
7	ハランダーのガマ	宜野座村	松田	住民避難	自然壕
8	ムラガマ	宜野座村	宜野座	住民避難	自然壕
9	ジョーグチのガマ	宜野座村	惣慶	住民避難	自然壕
10	マツタラクブガマ	宜野座村	惣慶	住民避難	自然壕
11	字福山の住民避難壕	宜野座村	福山	住民避難	人工壕
12	ユンタンザ小ヌ墓	宜野座村	漢那	住民避難	その他
13	トゥールガマ１	宜野座村	漢那	住民避難	自然壕
14	トゥールガマ２	宜野座村	漢那	住民避難	自然壕

⑪ 恩納村・金武町

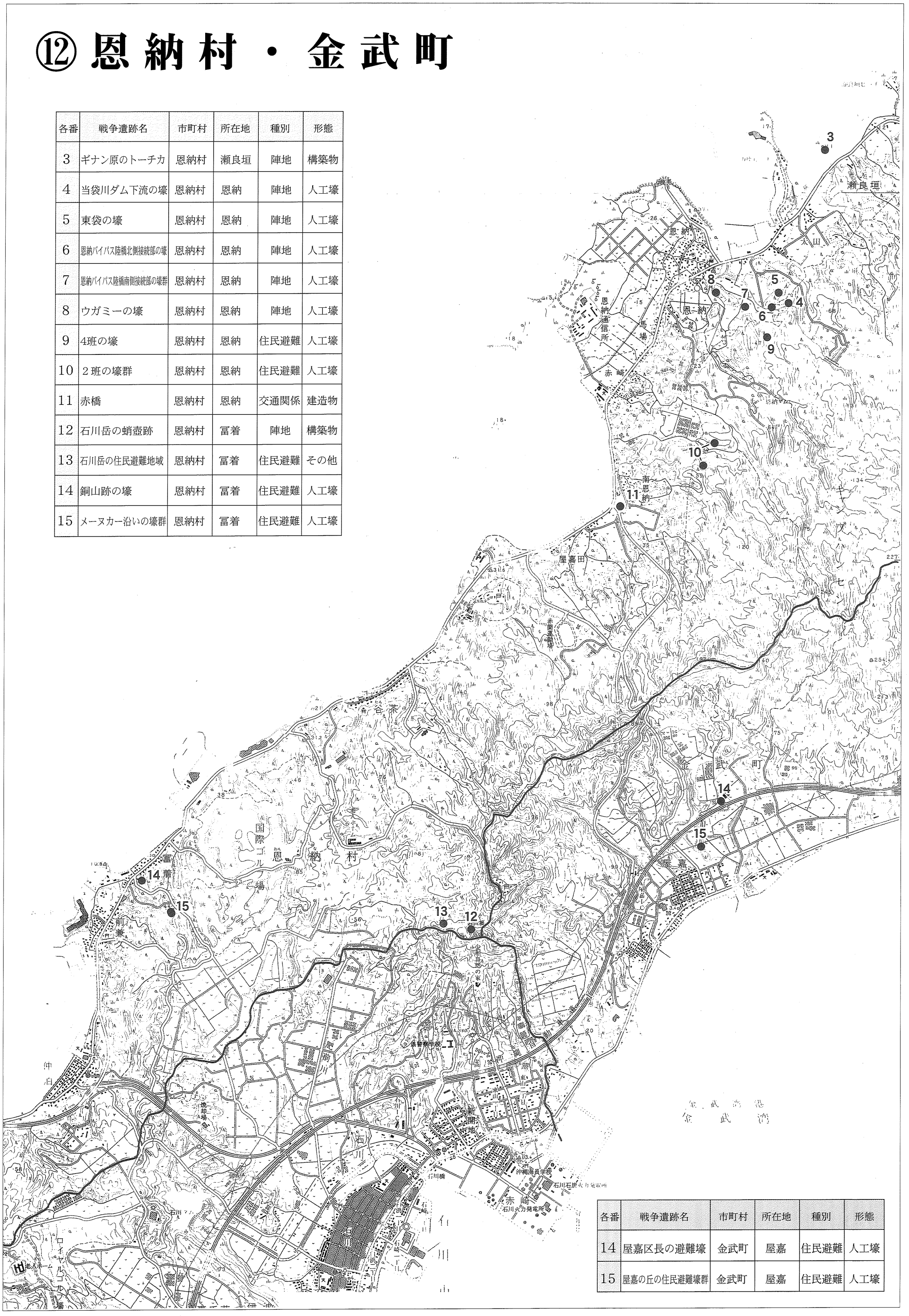
各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
1	名嘉真の住民避難壕	恩納村	名嘉真	住民避難	人工壕
2	ウドイガマ	恩納村	瀬良垣	住民避難	自然壕



各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
1	故陸軍上等兵・仲間兵二郎の墓	金武町	並里	住民避難	建造物
2	ウッカー洞	金武町	並里	住民避難	自然壕
3	苗代田の壕	金武町	並里	住民避難	不明
4	忠魂碑	金武町	金武	住民避難	建造物
5	ティラガマ	金武町	金武	住民避難	自然壕
6	メーカジメーヌガマ	金武町	金武	陣地＋住民避難	自然壕＋人工壕
7	アナガー	金武町	金武	住民避難	自然壕
8	金武鍾乳洞	金武町	金武	住民避難	自然壕
9	征露紀念碑	金武町	金武	住民避難	建造物
10	ナギシヌメーヌガマ	金武町	金武	住民避難	自然壕
11	豊平隊陣地壕	金武町	金武	陣地	陣地壕
12	震洋隊秘匿壕	金武町	金武	陣地	陣地壕
13	上島の住民避難壕	金武町	伊芸	住民避難	人工壕

⑫ 恩納村・金武町

各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
3	ギナン原のトーチカ	恩納村	瀬良垣	陣地	構築物
4	当袋川ダム下流の壕	恩納村	恩納	陣地	人工壕
5	東袋の壕	恩納村	恩納	陣地	人工壕
6	恩納バイパス陸橋北側接続部の壕	恩納村	恩納	陣地	人工壕
7	恩納バイパス陸橋南側接続部の壕群	恩納村	恩納	陣地	人工壕
8	ウガミーの壕	恩納村	恩納	陣地	人工壕
9	4班の壕	恩納村	恩納	住民避難	人工壕
10	２班の壕群	恩納村	恩納	住民避難	人工壕
11	赤橋	恩納村	恩納	交通関係	建造物
12	石川岳の蛸壺跡	恩納村	冨着	陣地	構築物
13	石川岳の住民避難地域	恩納村	冨着	住民避難	その他
14	銅山跡の壕	恩納村	冨着	住民避難	人工壕
15	メーヌカー沿いの壕群	恩納村	冨着	住民避難	人工壕



各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
14	屋嘉区長の避難壕	金武町	屋嘉	住民避難	人工壕
15	屋嘉の丘の住民避難壕群	金武町	屋嘉	住民避難	人工壕

⑬ 恩納村

各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
16	山田城の壕群 (クラシンガマ)	恩納村	山田	住民避難	自然壕
17	アマキンガマ	恩納村	山田	住民避難	自然壕
18	西金細工屋敷内 (イリカンジョク)の避難壕	恩納村	山田	住民避難	人工壕
19	ハブヒティガマ	恩納村	宇加地	住民避難	自然壕
20	コージガマ	恩納村	宇加地	住民避難	自然壕
21	カンジャーガマ	恩納村	宇加地	住民避難	自然壕

⑭ 伊江村

各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
1	アハシャガマ	伊江村	東江前	住民避難	自然壕
2	公益質屋跡	伊江村	東江上	政治・行政	建造物
3	山グシの陣地壕１	伊江村	東江上	陣地	構築物
4	山グシの陣地壕２	伊江村	東江上	陣地	人工壕
5	独立混成第44旅団第2歩兵隊第3中隊第２小隊壕	伊江村	川平	陣地	人工壕
6	ミンカザント(紀元二千六百年記念)	伊江村	川平	その他	建造物
7	ニィヤティヤガマ	伊江村	川平	住民避難	自然壕
8	第502特設警備工兵隊出撃の地	伊江村	西江上	陣地	自然壕＋人工壕